会　誌

恵迪

恵迪寮同窓会

第8号　平成20年

1983〜2008

恵迪寮同窓会創立二十五周年

〜西日本大寮歌祭で祝賀行事〜

設立総会

25年の歩みと歴代会長

昭和58年3月18日　設立総会
　名誉会長：木原均・御手洗毅・山本吉之助
　会　　長：星光一
昭和60年　開拓の村恵迪寮舎落成祝賀会
昭和62年　第2代会長：大原久友
平成 3 年　第3代会長：繁富一雄
平成13年　第4代会長：中瀬篤信
平成19年　恵迪寮百年記念祭
　　　　　第5代会長：横山清

「北海道開拓の村」恵迪寮舎開寮式典にて

恵迪8号目次

扉　恵迪寮同窓会創立二十五周年……（1）

巻頭言　恵迪寮同窓会会長　横山　清……4

グラビア　寮歌歌始めの会（平成20年1月26日）・恵迪寮観桜会（平成20年5月6日）・第99回恵迪寮歌祭（平成19年10月31日）……5

ご挨拶
恵迪寮同窓会代表幹事　白浜　憲一……9
恵迪寮同窓会東日本支部長　山中　義正……10
恵迪寮同窓会西日本支部幹事長　伊藤　靖久……11

追悼
幸健一郎君の死を悼む　厚谷　純吉……12
辻山昌佑君の恵迪魂を受け継ごう　窪田　開拓……13

特集Ⅰ　**恵迪百年記念祭　回想**……14
感激の100年記念祭……小出　精　14
わが「波と海」……緒方　純俊　15
わが青春の恵迪寮　永遠なれ！……佐竹　正治　17
感動　また感動の大寮歌祭……魚山　和春　19
恵迪、今・昔・そして未来……千原　治　21

特集Ⅱ　**寮歌　異論・正論**……23
寮歌「春雨に濡るる」考……木村　咲哉　23
「前口上問題」に想うこと……司馬　威彦　25
寮歌問題に対する事務局の見解……髙井　宗宏　27

特集Ⅲ—①　**入寮50周年同期会**……32
尽きぬ珠玉の思い出……古川　俊実　32
感慨新た、祝賀会に47人……河野　民雄　35
記念文集に45人・51編の玉稿……桜庭　慎吾　37

特集Ⅲ—②　**入寮40周年にあたって**……40
涙……恵迪寮の思い出……佐々木宏治　40
還暦の寮友　また会おう……畑　博　41

特別寄稿　林文平、薫及文平会　始末記（その2）　四方英四郎……43

寮史研究　①昭和初期の恵迪寮㊤「文武会ストと恵迪寮の移転」　河野　民雄……46
②「住民票事件」と寮史　沼田　久……51

現寮生から　変わりゆくもの、変わりなきもの　第290期執行委員長　竹内　進……53

寮歌物語

① ♪「手をとりて美しき国を」（昭和28年寮歌） …… 55
山本 玉樹（作歌者） …… 55
三河 勝彦（作曲者） …… 57
② ♪「草は萌え出で」（昭和53年第70回記念寮歌） …… 58
朝倉 仁樹（作歌者） …… 58
田坂 幸平（作曲者） …… 60

平成19年度恵迪「開識社」講演会

（百年記念特別講演）
「新渡戸稲造を育てた札幌農学校」 講師・藤田 正一 取材・中村 昭雄 …… 62

自由投稿

随想

都ぞ弥生・ある記憶 …… 角幡 春雄 68
入寮五十年を想う …… 深谷 勲 69
「絆」 …… 平野 亮輔 71
北大構内を散策する …… 中西 三郎 72
今、甦る青春 …… 芝垣 美男 74
寮歌愛好会からの誘い …… 横平 弘 75
ヒューマニズムとロマンチシズムの学校をつくる！ …… 亀貝 一義 76
ものごとの順序 …… 千田 忠男 77
神田一ツ橋門外探訪記 …… 中村 昭雄 78

俳句

新樹 小沢 久弥 …… 81

人物点描

河村 征治
・一期生首席のボヘミアン 荒川 重秀 …… 82
・北海道酪農の基礎確立 町村 金弥・敬貴 …… 83
・水産と教育の伝道者 内村 鑑三 …… 84
・農学校精神の全国伝播 鶴崎久米一 他 …… 86

エルムの森から

藤田正一名誉教授に道新文化賞 …… 88
喜田宏人獣共通感染症リサーチセンター長 学士院会員に …… 88
北海道大学を会場にG8大学サミット開催 …… 89

恵迪サークル史

シリーズ7 **青春興亡の百年・応援団概史** 後編 谷口 哲也 …… 90

恵迪寮同窓会通信 vol.24

恵迪寮同窓会第11期第2年次理事会報告 …… 114
北海道支部ニュース …… 121
東日本支部ニュース …… 122
西日本支部ニュース …… 123
西日本大会に寄せて 植松 高志・内藤 拓・間中 俊夫 …… 125

2008年恵迪寮同窓会西日本大会のご案内

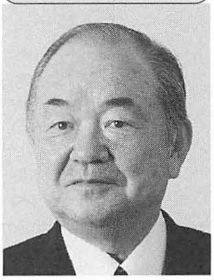
悠久の古都・京都に参集！ …… 129
「霊山歴史館」 佐藤 等 …… 132

恵迪寮命名百年記念グッズ

北大恵迪寮歌CD「都ぞ弥生」 ポストカード「都ぞ弥生」～北大恵迪寮歌と構内風物～ 恵迪百年記念オルゴール …… 133

平成20年度「年会費」納入のお願い …… 135
会誌「恵迪」第7号 訂正一覧 …… 135
編集後記 …… 142

巻頭言



恵迪寮よ永遠に

恵迪寮同窓会会長　**横　山　清**
（S31年入寮）

石狩平野に爛漫の春が訪れ北大キャンパスには精気溢れる新入生が闊歩しています。

同窓諸氏におかれてはご健勝のことと存じます。昨年九月の恵迪百年記念祭から早くも半年余を経過し、この短い期間に政治・経済・社会が劇的に変貌し只ならぬ情勢となりました。改めて記念祭のタイミングの良さと皆様のご協力に厚くお礼申しあげます。実行委員長として裏方の仕事を受け持った者として、直接札幌に馳せ参じた方々、そして残念ながら参加できなくても精神的、資金的な支援を惜しまず、記念祭を歴史に残る大イベントに盛り上げて下さった諸兄に心から敬意を表します。この当日、多少の予感はありましたが、計らずも同窓会会長を任命され非才ではありますが就任いたしました。

予科百年、水産学部百年と周年記念行事の続く中で恵迪寮命名百年記念祭は新聞、雑誌の記事やTV報道などで全国的に高い評価を受け北海道大学の名声を更に高め一世紀に亘って集積された恵迪寮精神の称揚を恣（ほしいまま）にしました。

明治・大正・昭和生まれのOBに加え平成生まれの現寮生、なかんずく女子学生、留学生、院生を包含する現寮を基盤として恵迪寮同窓会を維持運営し、継続発展させるのは至難の課題です。北大は独立行政法人になり学生には国際的に対応できる深い教養と専門知識を求めています。ゆとりの少ないこの時こそクラーク博士の「高邁なる野心」を源流とする恵迪思想が自治の精神と進取の気風を重んじ他者を敬い、弱者を思いやる心であることを伝承すべきであると思います。

ある先輩が恵迪寮同窓会は単なる同窓の集まりであってはいけないと喝破されました。この先輩が鳴らす警鐘は形骸化しマンネリズムに沈みがちな私達の行動を高い志を持つ集団たれ！　との叱咤激励の言葉と受け止めました。

北海道大学の豊かでふくよかな木々に包まれて、忘れ去られたようにひそやかに佇んでいた「都ぞ弥生」の歌碑は修復され再び生命を取り戻しました。合唱団OBによる寮歌CDアルバムは人々を魅了し続けます。生き生きとした力に溢れた潤い満ちた環境の中で優れた後輩達が陸続と生まれ育っています。私達は恵迪寮精神を発信し培養し続け、運び続ける恵迪寮同窓会でありたいと切望しているところであります。

明るく楽しく、前向きに生きる糧として寮歌があることも私達の大きな財産です。

寮歌歌始めの会（平成20年１月26日）

横山会長の藍綬褒章・フィンランド獅子賞受賞で同窓会から歌碑の原画をプレゼント

威勢よい鏡割りでスタート

「僕にも歌わせて」と飛び入りの佐伯総長

年の差50年？も　寮歌で一つに

宴もたけなわ肩組み合って「都ぞ弥生」

ついにストームも登場　年のせいか酒の
せいかなかなか足が上がらない

恵迪寮観桜会（平成20年5月6日）

大通公園の噴水に飛び込む現寮生を心配そうに見つめるOB

記念写真を撮らしてと市民に大人気の応援団

サクラの花？寮歌と酒があればそんなの関係ねぇ！

同窓会の差し入れに「ごっつぁんです」と現寮生が返礼

第99回恵迪寮歌祭（平成19年10月31日）

厚谷副会長や諏訪、藤田北大名誉教授の
大先輩の前で寮歌をうたう現寮生

新趣向の学部対抗で行われた寮歌リレー

現寮生とともに恒例の「都ぞ弥生」を斉唱

ご挨拶

開かれた行動する恵迪寮同窓会

恵迪寮同窓会代表幹事　白浜　憲一
（S40年入寮）

昨年9月22日の恵迪寮同窓会総会で代表幹事に選出され、諸先輩方が25年に亘り営々と続けられてこられた活動の重みに押し潰されそうですが、会のために背伸びをせずに精一杯努力させていただきます。若手？　といわれても世間的には「定年退職」世代です。今後とも皆さまのご協力・ご指導を宜しくお願いします。

４月８日の「北大入学式」、燃え立つ希望と初々しい若さ溢れる２、６００名の新入生と晴れ晴れとした悦びの表情の保護者たちで札幌コンベンションセンターは熱気に包まれました。この新入生の約６％＝１６０名ほどが我らが恵迪寮生となります。恵迪寮命名１５０周年を祝う恵迪寮同窓会の中心メンバーたちの寮生活の始まりです。そのように思えることに澎湃（ほうはい）とした喜びを感じるとともに、全国的にも稀有な恵迪寮同窓会の存在と活動の意義を再認識し、50年後の同窓生にバトンを渡せるような強固かつ持続可能な組織基盤を作ることが重要な課題となります。

「不易」とは時代を超えてその精神的な価値が不変で、それは時代に応じて変化し、自己変革を遂げるものであり、その根本は、誠・真実心です。即ち、不易性は固定的なものではなく、誠を責めるという不断の努力によって、進歩し脱皮しより高い境地が開拓される、それが変化・流行であります。「不易」と言うに相応しい恵迪寮の「誠・真実心」とは何か。それは、自治の精神が息づく「共生の場と時間」における、切磋琢磨の青春交歓を通して培われるヒューマニズムとロマンチシズムであります。恵迪を通過した者達は、生涯に渉（わた）り、この「誠・真実心」を責め続けることを誇りとすることができる特権を有するのです。

昨年の「恵迪百年記念祭」に寄せられた、多くの同窓生の恵迪寮への熱い想いと協賛は大きな波動となり、記念祭参加者のみならず多くの方々にその感激を伝導することになりました。この勢いを止めず、次の１５０周年に向けて、全国に散らばる恵迪寮同窓生が居住する都道府県に「恵迪会」を立ち上げ、毎月何処かで「都ぞ弥生」が歌われるようにしましょう。また、「恵迪百年記念グッズ」の販売を促進することで、同窓会財政を堅固なものにしましょう。

さらに、これまで以上に北大連合同窓会や各県の北大同窓会との連携を強め、21世紀型の「開かれた行動する同窓会」として、恵迪寮の「誠・真実心」を希求し広めることを目指したいと思います。同窓生諸氏のこれまで以上のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

ご挨拶

寮歌の灯を絶やすな！

恵迪寮同窓会東日本支部長　山中義正（S32年入寮）

昨年は9月22日に恵迪寮命名百年記念行事が札幌で行われましたが、その翌月の10月27日に東京都港区の東京海洋大学で東日本支部主催による「命名百年を祝う寮歌祭」を開催しました。

札幌へ行けなかった恵迪寮同窓生と札幌へ行ったが未だその興奮冷めやらず参加された人も含め総勢１００人近い同窓生が参加されました。当日は北海道新聞社の記者が取材に来られ、当日の模様が写真入りで翌日新聞に載りました。

さて、今年は持ち回りによる大寮歌祭は関西支部での開催になりますが、東日本支部は毎年寮歌祭を開催することになっていますので、今年は千葉県船橋市で開催することとしました。地元の「千葉県エルム会」の役員の方々をはじめ、会員の皆さんのご協力とご支援を頂いて『参加して楽しかった』と思える寮歌祭にしたいと思っています。

3年毎の持ち回りによる大寮歌祭は東京都内で開催を原則とし、その他の年は東日本支部域内の県で開催することにしています。それは、恵迪寮同窓会の存在を地域内に広く知らしめることと、寮歌祭の参加者が固定化するのを防ぎ、新しい参加者を得ることを期待してのことです。これらの活動が、先輩、同僚、後輩の間に伝わり、恵迪寮同窓会会員増強の一助になればとの願いをこめております。

「○○恵迪会」或いは「△△エルム会」など恵迪寮や北大にかかわる同窓会組織がある県で、しかもそのことを東日本支部の役員が承知している県でこれまで寮歌祭を開催してきましたが、特にどの県を優先するなどという基準はありません。「わが県にも上記のような組織がある」との情報を是非お寄せ下さい。

「今、平和な時代、時の流れに従おうとするやつも逆らおうとするやつも、寮歌を肩を組んで歌う時、何か共通に思うものがある筈だ。寮歌を歌うに形式はない。好きな時、好きなように、一人でも大人数でも口ずさんでほしい。繰り返して歌っているうちにきっとそのよさがわかるだろう。寮歌の灯を絶やすな！」

昭和57年度寮歌集に記載の寮歌普及委員会から抜粋しました。

今年も東日本支部に在住の同窓生諸君！集い恵迪寮歌を歌おうではないか。

ご挨拶

恵迪の精神・志を全国へ広めよう

恵迪寮同窓会西日本支部幹事長　伊藤靖久（S38年入寮）

恵迪寮同窓会並びに西日本支部会員の皆さま！　ご健勝でご活躍の事とお喜び申し上げます。しかし誠に残念ながら昨年、西日本支部は恵迪百年記念祭直後に、辻山昌佑支部長を失いました。西日本支部の興隆を願い、常に我々後輩を督励し、支部発足以来20年余に渡る活動の常に先頭にたち、また3年毎に巡ってくる恵迪寮同窓会西日本大会では、大阪海遊館隣「サイレン」に始まり、須磨荘（2回）、六甲荘、京都、名古屋そして今年の予定の京都まで企画・運営に並々ならぬ情熱を傾けてこられました。

私達役員一同は、辻山支部長の遺志を受け継ぎ、恵迪寮で培った精神・志を会員皆さまの精進の日々に活かしていただくお手伝いができればと頑張ると共に、会員相互の交流が促進されるよう努力していく所存です。

西日本支部は、東は愛知・岐阜・三重の名古屋・中部地域（会員174名）、富山・石川・福井の日本海地域（50名）から大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山の関西地域（364名）を経て広島を中心とする岡山・鳥取・島根・山口の中国地域（86名）、さらには四国地域（49名）、西は九州地域（85名）・沖縄（14名）までを抱え、会員相互のコミュニケーションを図る観点からは地勢学的に大変難しい「くり」となっています。

最近の大阪は求心力が低下し、物見遊山の場と人の集中という意味では東京の一人勝ちとなっています。そこで、組織を預かる幹事長としては、会員相互の交流はまず各地域の中で培っていただき、その勢いを3年毎の西日本大会に持ち込んでほしいと念じています。そのための手立てを講じます。地域恵迪会を立ち上げるお手伝いをいたします。立ち上げの中心を担っていただく地域幹事を推薦し、援助いたします。具体的には、勧誘、連絡等の通信費を補助し、交流会に支部役員も出席いたします。前回名古屋で西日本大会を開催したように地域での支部大会を追求いたします。

ひと頃、四国恵迪会や九州恵迪会などその活動と存在が知られておりましたが、世代交代の流れの中で今では見えなくなっています。さて、恵迪同窓の皆様！　今年は3年に一度の西日本大会です。会場は今、旬の都市・京都で行います。開識社、大寮歌祭、番外編（祇園　二軒茶家　中村楼）と趣向を凝らします。本号に掲載の紹介文をご一読下さい。役員一同総力を挙げて取り組み、皆様をお待ちしています。

追悼

幸健一郎君の死を悼む

恵迪寮同窓会副会長　**厚谷純吉**
（S30年入寮）

昭和30年4月、私は恵迪寮に入寮した。幸君も同期の入寮であった。特に付き合いはなかったが、昭和31年2月から7月まで第156期委員長を務めた彼の後を継ぎ、私が157期委員長になったのも何かの縁である。昭和33年3月に恵迪寮を退寮した後は、特に幸君との交流を持つこともなく数十年を過ごしてきた。

再会したのは、2代目恵迪寮の取り壊しをしのび、昭和29年・30年・31年・32年入寮生が集まった昭和57年8月21日開催の「恵迪寮閉寮記念同窓会」の場であった。当時私は釧路保健所に勤務していたので、その時はそのままお別れした。昭和60年4月、転勤で札幌に戻ったが、その時には昭和58年に発足した恵迪寮同窓会が活発に活動を展開しており、幸君はその中核として元気に頑張っていた。

恵迪寮同窓会の発足の経緯は記念文集「恵迪寮よ永遠に」の中に髙井宗宏君（S31年入寮）が詳しく述べているが、幸君は一貫してその先頭に立って活動してきた。私も「寮歌歌始めの会」や「寮歌祭」に参加し交流を深めていった。

この時期は寮生の入寮選考を巡って現寮生と大学当局の間に険悪な空気が存在していた時期である。幸君は一貫して現寮生を信ずることを説き、自ら先頭に立って寮生との交流を深めることに努力し、ついに大学当局に恵迪寮の名前を正式に認めさせてしまった。そして同窓会では現在寮の玄関にある看板を寄贈して喜びを表した。

平成7年、幸君は同窓会代表幹事に就任。そのとき「お前も手伝え」の一言で私も副代表幹事に就くことになり、共に同窓会の運営に汗を流すこととなった。幸君の一貫した主張の一つが現寮生を信頼し交流することの大切さであった。また、幸君は、同窓会の発展のために北海道内での組織強化の必要性を指摘した。代表幹事を辞した後も初代北海道支部長となり、全道に同窓会を組織化したり、組織の若返りを図ってきた。

このことを自らの手で実行すべく、後任の北海道支部長には白浜憲一君（S40年入寮・現代表幹事）を指名した。幸君は恵迪寮を愛し続けて生涯を過ごしてきた。ただ、残念でたまらないのは、昨年の恵迪百年記念祭には病床に伏して元気な姿で参加することが叶わなかったことである。

幸君、私は君の意志を継いで恵迪寮・恵迪寮同窓会のため頑張っていくことを霊前に誓う。見守っていてくれ。

追悼

辻山昌佑君の恵迪魂を受け継ごう

恵迪寮同窓会西日本支部長代行　窪田開拓（S32年入寮）

恵迪寮は不思議な所だ。時代を超えて、そこには何の利害もないのに、出会うと、「恵迪」の名のもとに親近感が増す。それは誰もが口にする「都ぞ弥生」だ。卒業以来、どれだけ謳ってきたことか。

辻山昌佑君（S26年入寮）との出会いは昭和45年、大阪万博の時である。静かな語り口で柔和な感じの方だと思った。当時の辻山君は東京勤務だったので、この時の全国寮歌祭は飛び入り参加だったのだろうか。昭和26年組は、関西に青山、小久保、米田君らがおられ、再会を兼ねて来阪されたのかもしれない。どういう訳かこの時の写真が手元にある。万博ホール横のローンで輪になって「都ぞ弥生」など寮歌を謳っている丸首シャツで半袖姿の健康そのものの辻山君が写っている。その後、ヤンマーを退職し、門真の地で書店業を営む傍ら、同窓会活動に踏み込んで来られた。

大袈裟な言い方だが、イエスキリストがバプテスナのヨハネの洗礼を受け、娑婆に出てきて語り口を一般に向けたように、彼は恵迪を彼なりの道標にしたのではないかと思う。同窓会の活動はどちらかというと実態のある現実世界で、思いは実現すると確信したのではなかろうか。

「鼻歌交じりで同窓活動の下調べや執筆をしているんですよ」と瑛子夫人がやさしい眼差しで言われた。夫人は今、辻山君の生前の意志を継いで門真銀座書店を営んでいる。「全く、なにごとも主人がやっていたので、手探りです」と言われ、私は人生の生き様をそこに垣間見たような気がする。ただ、令夫人が語ってくれたのは、同窓会会合のあと、帰宅はいつも深夜だったとか。私なりに解釈すると、同窓会の会合が良きに付け悪しきに付け自問しつつゆっくり酒を嗜み、山本七平の如く広い知識が飲み仲間と語るひとときがそうさせたのではなかろうか。それ故か告別の日、書店業でなく、はたまた同窓関係でない方が弔問に来られたということを聞くと納得できる節もある。

関西には北大関西同窓会と有限責任中間法人北海道大学関西エルム会がある。関西同窓会会長は阿澄君の後を引き継いだ遠藤彰三さんであるが、中間法人の代表幹事は辻山君である。彼の生への執念は今でも消えていないのである。

過日、辻山宅を立ち寄ったとき、令夫人はお嬢さん（?）と店を切り回しておられた。顧ると随分長いお付き合いをし、数々のご助言をいただいた。その頑固さ故に反発する向きもあったが、中間責任法人の立ち上げは彼を抜きにしては実現しなかったであろう。

同様、恵迪の火を絶やさない執念は目を見張るばかりである。北大恵迪系譜にその名を市井人として連ねることを後人に託す。

死んでも生きている辻山君、サヨナラ、auf Wiedersehen!

感激の100年記念祭

小出　精
（S30年入寮）

——恵迪第7号を読んで、100周年記念祭の前夜遅くまで奮闘なされた方々のご労苦を知り、改めて感謝しています。以下は、実に長くて楽しかった9月22日の日記です。

【22日午前】
「都ぞ弥生」歌碑の改装除幕式

会場に早足で向かう。周辺整理に駆け足で働いている仙台出身の長谷川健君（北大大学院理学研究院）にバッタリと出会う。彼は火山研究のためカムチャッカに赴いていた筈なのに……。何と「この日のためにトンボ帰りで一時帰国してきました」と聞いて、流石は恵迪の子と感心、感激。程なく式典が始まる。セレモニーに続いて全員で肩を組んで「都ぞ弥生」全曲を高らかに唄う。見上げる青空の大半を隠しているのは、あれからまた50本余り年輪を増やして鬱蒼と繁る原始林の樹木たち。人垣の輪の中では伝統的な装束の応援団員に加えて吹奏団の姿があったり、また私の右隣りには熱唱する女子学生が3人も続くという光景も、50年前とは明らかに異なっている。

式が済み人の輪が解けたとき、真っ先にお会いできた方は渋谷富業先輩。ご挨拶を終えたと思ったら、今度は又すぐに宍戸昌夫先輩にお会いする。お二人とも万年青年ここにありという元気なお顔。冒頭の長谷川君は平成の名寮歌の一つ「生命萌え出で」の作曲者であり、「都」碑除幕会場で忽ち三人の寮歌作者にお会いできたとは幸先がよい。

【22日午後】

クラーク会館で寮歌の新CDを入手する。2枚のCDの中には、宍戸さんと渋谷さんの名作はもとより、長谷川君の作品も登場して嬉しい限り。昨夜の昭和30年入寮組の同期会で、今度のCDでは長谷川君が寮歌の発声者（音頭をとる人）を務めていると聞いていたので、二重の喜びを感じる。

一万人の「都ぞ弥生」

仙台を発つときは正真正銘ぎっしりと大学構内を埋める人々の大合唱を予想していたが……。しかし意外に会場にはゆとりがたっぷりとある。が、幹事の千川浩治君の挨拶の中で〝一万人〟の意味を聞いて納得。「都ぞ弥生」の全節を合唱する間、ふと入学した年の5月頃か、ここで開かれた応援団による寮歌伝授の催しの時の情景が鮮やかに甦る。そこには大勢の男子学生の中に混じって、ごく少数の女子学生が楽しそうにそして物珍しげに笑顔で歌っている姿もあった。懐かしいことこの上ない。

【22日夜】

大寮歌祭では90代半ばを超えられたという繁富先輩から現役学生に至るまで一堂に会し、長時間に亘って数々の名

なのでどうにもなりませんが、どうしてこんなことを
書いたのでしょう。

７１頁自由投稿、平野氏「絆」
昭和２９年８月に天皇が来道した。→北海道国体で正解
　両陛下＝昭和天皇＋良子　→天皇の幼名＝迪宮裕仁
　皇太子＝今上天皇　　　　→天皇の幼名＝継宮明仁

指摘
１）皇太子は来道していない＝学習院聴講生の時であり、
　両陛下のみであった。
２）「殿下の目的」が恵迪寮前に全天候テニスコート
　＝寮前のホッケーグランド（煉瓦作りのスタンド）
　　に両陛下が来たが、全天候テニスコートができたは
　　あり得ない。殿下は皇太子の意味だから、来ない人が
　　希望も何もあり得ない。
３）「殿下はない地の某所で」は軽井沢の正田美智子妃との
　出会いを意味すると思うが、新聞等ではS32出会い、S34
　結婚となっている。ミッチーブーム
４）昭和８年生まれは皇太子、４人目にやっと生まれた男子、
　「迪宮明仁」と命名　＝親子チャンポンで、こんな間違いは
　救いようがない。
５）お召し船は洞爺丸、S23年建造　＝22年11月就航で間違い。
６）寮生に禁足令　＝未確認
７）「島学長から説明を受けた殿下」＝恵迪寮と迪宮の一致で
　一入だったと言うが、来ていたとしても継宮明仁には感じられ
　ないであろう。
８）昭和天皇の内親王の死は、照宮成子さんが３５歳で死んだことを
　言うのであろう　＝未確認

どうぞ宜しく。

＊＊＊＊　tmkitahiro　＊＊＊＊
高　井　　宗　宏
061-0031 北広島市北進町4-3-2
sspcy964@ybb.ne.jp
勤務先：北海道農業機械工業会
hokunoko@coral.ocn.ne.jp
＊＊＊＊　tmkitahiro　＊＊＊＊

寮歌を歌い続けることができ、こういうことができるのは今や北大だけだろうと思い、胸が熱くなるとともに、それができない他校の立場をおもんばかりして感慨深いものがある……。

歌の合間には人々との出会い、記念のスナップ撮影、初めてお会いできた神戸からの米田先輩、丁度50年振りに再会できた博多からの轟元名委員長等々……。皆、寮歌あってのお陰だ。終盤で100年記念寮歌の発表にも大いに魅せられて、「ブラボー!」と叫ぶ。

北大寮歌が今も生き生きと続くわけ

仙台に生まれ育った私は子供のときから旧制二高にも深い親しみを感じており、二高にも数々の名歌があることを知っていた。しかし二高をも包摂して再出発した東北大学では、寮歌は殆ど継承されていないようで大変残念である。仙台や東北の四季を織り込んだ自然讃歌の名歌もあるのに惜しいことだ。元々東北大と二高とは各々独立校であり、北大予科と同列には語れない事情はあるが、仙台ではかつて二高と仙台専とが（あたかも北大予科と樽商との如く）スポーツや応援合戦で格好のライバル同士だった。新制東北大はそれら二つの国立校と師範学校及び宮城女専という二つの県立校も全て包摂し、各校の校舎も寮も東北大のものとして市内の方々に散在する形となった。

比べて北大は、「都ぞ弥生」という大きな宝の存在が大要因なのは語るまでもなかろうが、札幌では全て旧制時代と変わらず同一構内にまとまったままであり、恵迪寮はそのまま教養部の唯一の寮として存続してきた。これは東北大だけでなくその他の大学にも例がないであろう際立った特徴に違いない。そういう好環境と、北海道特有の風土の中で、旧制時代の数々の名寮歌に続けとばかりに、今も名歌が生み出されていることは誠に稀有なこと、幸いなことだと言うの他はない。

恵迪寮歌がこれからも栄えゆくことを心から祈る。

（仙台市宮城野区）

わが「波と海」

緒方純俊（S38年入学）

若い学生の手による寮歌の言葉と調べはみな美しい。大和言葉だけの歌詞からはロマンと情感が伝わって来る。漢語を散りばめた語りには小気味よい響きがある。とても素人の学生が作ったものとは思えない。若い才能がまぶしく輝いてみえる。

一世紀を超えてなお歌い継がれる「都ぞ弥生」。有史来の混迷にも隠忍自重、なお匍匐前進を誓う「時潮の波の」。騒然とした60年安保の真っただ中の良心「茫洋の海」。

この世で作者に出会えるだろうか。明治は遠く追うに能わずとも戦後の「波」と「海」にはたどり着きたい。そんな思いが消えかかったころ、時はあっさりと期待に応えてくれた。

昨年9月20日、私はひとり札幌に入った。寮外生ながら恵迪寮百年記念祭にかこつけて教養時代の旧寮生に声をかけている。翌21日の教養クラス会は旧寮生の参加によって大いに盛り上がり、最後は「都ぞ弥生」の合唱で締めくくる。まずは大成功であった。

翌22日には勇躍記念パーティに挑む。われとわが身を省みず壇上に駆け上がり元寮生らと肩を組んで放歌する。おりしも、元応援団員の友人が「時潮の波の」作歌者が来ておられるから紹介すると言う。酔った勢いも借りて渋谷富業大先輩のテーブルに近づいた。

若くして才気の発露をみた人特有の雰囲気。穏やかな語り口。「時潮の波の」にまつわる話など、私の厚かましい質問にもごく自然な口調で応えられた。最後にツーショットの記念写真までお付き合いしていただいて、これまた感激である。待ちに待った「潮」は意外とあっけなく引いて「海」だけが残った。

「海」は手の届くところにあった。きっかけは、前出の友人が送ってくれた「恵迪」百年記念号（第7号）である。ページをめくっているうちに前野紀一氏寄稿の「茫洋の海と寮歌CD制作」が目にとまる。このとき、作歌者が三浦清一郎氏だと知る。まさか、あの三浦先生ではなかろうか。

私と同じ市内に成人教育のリーダとして高名な三浦先生が住んでおられる。しかも北大出身で、その人には昔会ったことがある。何から何まで作歌者の三浦さんの属性と一致する。しかし、本人に直接聞かない限り両者の一致は証明できない。

昭和38年大学祭：恵迪寮生と筆者
前列：左端　著者、左3人目　尾見仁一君　右端　福山利範君
中列：左端　楠美清彦君　左3人目　佐藤史夫君　右端　伊藤靖久君

そうこうする間に、三浦さんを知る友人からいくつかの情報が寄せられた。すべて私にとって確信に迫るものばかりであった。ここにきて私は勇を鼓して電話機を取った。あいにく三浦さんは出張中であったが奥様が知っておられた。ついに難儀した同定作業が終る。これで私の「波」と「海」がつながった。人はこれを僥倖と言って軽んじる。だが、時は私に味方したのだ。

数十年前、私たちの教養クラスは大学祭に参加した。テー

マは、「時代背景から辿る寮歌」である。それをならいたての青い方法論で料理しようとしていた。この作業の中核はやや先鋭化した寮生である。一仕事終えた私たちは会場の教室で自己満足のぬるま湯に浸っていた。

そのとき、髭面長髪の男が地下足袋を履いて現れた。居並ぶ我々をじろりと睨みつけたあと、一言も発せず、いきなり大声で寮歌を唸りだした。寮歌はかく歌うものだと手本を示したかったのであろう。迫力がまるで違う。良く通る野太い声で続けざま2、3曲吼えた後、最後に「茫洋の海」を朗々と吟じながら出て行った。髭男は、翌年、教養生最後の応援団長に推される。私が「波」と「海」に辿りつけたのは、ひとえに髭面老兄の厚情によるものである。

（福岡県宗像市）

※編集注

緒方純俊さんは恵迪寮生ではありませんでしたが、百年記念祭にも飛び入り参加されるなど寮歌に対する思い入れが強いため特別に寄稿して頂きました。

わが青春の恵迪寮　永遠なれ！

佐竹正治
（S39年入寮）

定年退職を機に、四十数年を過ごした札幌を諸般の事情で離れたが、恵迪寮百年記念祭に参加するため、約1年ぶりに懐かしの地、札幌を訪れることができた。

百周年記念の思い出とともに、初めて札幌の地を踏み、恵迪寮の門をくぐった時の新鮮な驚きや忘れがたい仲間たちを思い浮かべながら〝青春〟を回顧してみた。

初めての札幌　そして憧れの恵迪へ

東京受験のため、初めて札幌に来たのは、昭和39年の3月末。北陸・富山から「特急・日本海」で二十数時間かけて札幌に着いた。札幌駅のホームで「北大はどう行ったらいいのか」と尋ねたところ、北口を案内され、その北口のあまりの寂れた風景に、これが札幌なのかとびっくり。南口に出れば印象も違ったのだろうが……。そこから、恵迪寮まで雪解けのぬかるみの道を歩いた。革の短靴を履いていたため、靴に水が入り、たちまち泥まみれになった。

だから、札幌で初めての買い物はゴム長だった。やっと寮にたどり着き、事務室で仮宿の手続き。指定された部屋に行く途中、学生服の肩まで髪が伸びた人とすれ違い、一瞬、寮に女性が住んでいるのかとびっくり。後に、ひげを生やした長髪の応援団員と分かったが、奇っ怪な世界だなと驚いた反面、面白い人間たちが住んでいることに興味を覚えた。

仮宿は木製ベッドの5人部屋。入室した時、一人で黙々と勉強されていた在室の成島辰巳さんにとても親切にしていただき、寮生活に安心と親しみを感じた。

旧制高校の寮生活に憧れていたので、どうしても寮に入

りたかったが、入寮面接で補欠になり、5月末にようやく恵迪寮生活をスタートすることが出来た。

サークルは、尾崎毅さん主宰の「現代科学研究会」に所属した。他に多田憲男・斉藤武美・鉄信二郎・大和勝・村田義治の先輩諸兄と、私と同じ新入寮生の金子信弘・本間克・吉次章の諸君が思い出される。

寮生活と寮歌・ストームが我が青春を形作るものとなり、観桜会や歓迎ジンギスカンパーティ、部屋対抗早朝野球（ソフトボール？）も実に楽しいものであった。

思い出の歌碑周辺

富山―札幌間は、飛行機で約1時間30分。記念祭の前日に札幌入りしたが、丸一日かかった大学時代に比べて、隔世の感である。22日は午前11時からの修復された「都ぞ弥生」の歌碑除幕式に参加。在寮時、ドイツ語の単語を覚えるため、この原始の森にあった歌碑の周辺を毎朝散歩したことを思い出す。春先には延齢草の花が咲いていた。

除幕式には横山家・赤木家の親族も出席され、あらためて「都ぞ弥生」の永遠なることを感じた。

今回修復成った歌碑前で撮った写真を紹介する。左から佐藤博昭（S39入寮）大隈昭二（S40入寮）佐竹正治（S39入寮）西雪弘光（S40入寮）の諸氏である。修復歌碑除幕式参加を終え、クラーク会館への道は柔らかい秋の陽の中であった。恵迪寮から理学部へこの道を通った日々を懐かしく思い出された。理学部横のエルムの森も、数年前の風台風による倒木の影響か、間隙が大きくなってしまったようだ。あの頃はもっと鬱蒼としていたはずだ。

クラーク会館での北大交響楽団による、川越守編曲「都ぞ弥生シンフォニー」はCDでよく聴いていたが、生のオケラによる演奏は心に染み入り、感動的なものだった。更にその後のドヴォルザークの「新世界より」は新しく100年を超えることになった寮・寮歌に対しての応援メッセージに相応しいものだった。この曲を選んだ実行委員会幹事に感謝したい。

40数年ぶりに再会

京王プラザでの「大寮歌祭」は、老いも若きも、男も女（現寮は女性も入寮している）も集い、渾然一体と化した大寮歌祭となり、予想を遥かに超える大人数であった。祝辞の中で昭和6年入寮の御歳90歳を超える繁富一雄同窓会名誉会長が登壇。朗々たる声で「北大予科・恵迪寮生活を愛した」という祝辞には特に感銘した。会場では昭和39年入寮の天形・魚山・金子・佐藤・芝垣・鳥潟・林・吉田・関口の諸氏と40数年ぶりに再会した。あの混沌とした時代を共有して寮生活を行ったのだなと思う。昭和39年を中心に

した入寮生連中は、昭和40年度の寮歌「新しき陽は」（金子公良君作歌・西雪弘光君作曲）を歌い、久しぶりに多くの寮歌を堪能させてもらった。

昭和39年、40年入寮者で「39・40会」（芝垣美男君が会長）を結成し札幌や東京で会を持っている。そのメンバーの一人40年入寮の千川浩治君作歌・作曲の「恵迪寮命名百周年記念寄贈寮歌「不老の青春」が披露され、39・40会の一員として嬉しい限りであった。宴の進行する中で数年前自裁した昭和39年入寮の南部攻一君を思い出す。恵迪・月寒と寮を同じくした寮友だ。恵迪ではユーゲントコールに属していた。彼と一緒に寮歌を歌う機会はもうないと、心の中で追悼した。

翌日、月寒寮で一緒だった小松正幸・大隈昭二君と会食をした後、秋深まる札幌から富山へ帰省した。あらためて「北大・恵迪寮」は永遠なりと実感し、この大学で勉強し寮で過ごした喜びを感謝した。そして新たなる力を貰った「恵迪寮命名百周年記念式典」であった。

（富山市）

感動　また感動の大寮歌祭

魚山和春（S39年入寮）

記念祭当日私は苫小牧の自宅からＪＲで早めに札幌に着き、高層マンションやビルの建設で景観が大きく変わった駅北口周辺を通り抜け、久しぶりに北大構内を散策しながら歌碑除幕式会場へ向かった。様変わりした北大構内を見物しながら歩むうちに定刻20分程前に会場に着いた。既に多くの参列者が白幕に覆われた歌碑を幾重にも取り囲むようにして集っており、やがて除幕式が盛大且つ厳かに挙行された。恵迪寮と命名されたのが１００年前、改修される前の歌碑建立が50年前、因みに私が恵迪寮に入寮したのは43年前だ。そして今、新しく改修された歌碑が除幕されようとしている。そう考えると私は時の流れの中で、恵迪史上の記念すべき大場面に一恵迪寮ＯＢとして立ち会っているような厳かな気持ちになっていた。式典が終了し参列者が次の会場へ移動するのを待って、私は改修された歌碑の前に立ち初対面した。北大構内が大きく変貌した中で周辺には未だ原始の森が残っていたことに安堵すると共に、この新しい歌碑がこれから先の恵迪百年の歴史の流れの道標としてその発展を見守っていて欲しいと願った。

講師藤田正一氏による「新渡戸稲造を育てた札幌農学校」と題した講演は、講師の歯切れ良い説明で新渡戸稲造を通して札幌農学校時代の教育精神や当時の時代背景等が豊富な研究成果をもとに披露された。私も大変興味深く拝聴したが、藤田氏には北大関係者を始め多くの人達に北大史の原点ともいえる今回のテーマに関して、講演等を通し次世代に継承する一役を担って欲しいと感じた。

川越守氏指揮の北大交響楽団の演奏は真に素晴らしかった。「都ぞ弥生」の演奏を聴いて、私は改めてその雄大且つ荘厳な美しいメロディーに惚れ直した。またドヴォルザー

ク「第九番・新世界より」は、新天地に寄せた洋々たる希望と故郷を偲ぶという曲の背景が札幌農学校時代に重なり恵迪百年祭の相応しい選曲であったと思う。その厳かにして力強い演奏は会場の溢れんばかりの聴衆を魅了し、私も久しぶりに聴く北大交響楽団の生演奏に大満足であった。

快晴で太陽の照りつけるなか中央ローンでの「一万人で歌う都ぞ弥生」は、先程までクラーク会館で講演を聴いて札幌農学校時代を偲び、北大交響楽団の演奏を聴いてクラシックの世界に浸っていた私達を、すぐに現実の世界へ引戻した。今までのプログラムは見たり聴いたり受動的であったが、いよいよ自らが蛮声を上げて寮歌を歌う番だ。青空の下中央ローンの緑々とした広場に年齢差を超えて集った幾百の寮友が、千川実行委員の言う「恵迪寮百年で同じ釜の飯を食った一万人有余の寮生の想い」を込めて互いに肩を組み寮歌を高吟した。私もあらん限りの蛮声を張上げながら在寮時代の楽しくも懐かしい観桜会や観楓会を思い出し暫し若返った気分に浸った。

さては夜の部は京王プラザホテルでの「大寮歌祭」だ。会場は３００名余の同窓生で溢れんばかりの熱気に包まれていた。年齢層は20歳代から80歳代と幅広く特に昭和20年代入寮以前の大先輩達の恵迪寮への強い想い入れを感じた。恵迪寮で過ごした時期もその時代背景も違うから同窓生各人の寮への想い入れもまた当然違うわけだが、「多感な青春時代を恵迪寮で過ごした」と言う共通点でこれだけ多くの同窓生が集い、強い一体感を持てる事に改めて感動した次第である。

モツラの母さん　ありがとう

会場で大学卒業以来の先輩、同輩と再会出来たことも感激したことの一つだ。中には出席者名簿に懐かしい名前を見つけたのだが、会場を見回してもそれらしき人が見当らない。体型、風貌が当時と変わっていたためだが、相手からしてみれば私も同様に映っていたと思う。一旦会話を交わすと直に40年前にタイムスリップし、互いに積もった話で盛り上り旧交を温める事が出来た。そして感激の極みは、在寮時代に通った屋台ラーメン店（通称モツラ）の母さん、鈴木トクさんにお会い出来たことだ。貧乏学生が唯一安心して通える店で、厳冬の夜半に腹を空かせた同室の仲間と北大構内の近道の積もった雪を長靴で踏みしめながら熱いモツラーメンとコップ一杯のお酒を求めて寮から通った光景は、今でも恵迪寮時代の良き思い出の一コマとして残っている。いつも元気な声でラーメンを作りながら私達に声を掛けてくれた。お酒の味を覚えつつあった私はコップの受け皿まで一杯注いでくれるトクさんの手元を眺めながら満足したものだ。私は当時通っていた多くの寮生の一人でしかないが、今回お会いして挨拶し、昔の思い出話などしたところ当時と変わらぬ温かい言葉を交わして頂き、恵迪百年祭がより印象深いものとなった。同じ想いの同窓生に囲まれて終始感激の様子だったトクさんが今後もご健勝で過ごされますようご祈念申し上げたい。

さて熱気に包まれた大寮歌祭も全員肩組み

合っての「別離の歌」そして定番のストームを以ってびっしり詰まった当日のイベント全てが成功裡に終了した。満足した表情で寮友と別れを惜しみ再会を誓う和やかな光景があちこちで見られた。資金集めから寮歌ＣＤ制作等々、恵迪寮百年記念祭の成功の為に多大な時間をかけてご苦労された関係者の皆様に改めて感謝と敬意を表したい。

大寮歌祭の後、私は昭和39、40年入寮者の同窓組織「39・40会」の有志が集う二次会に顔を出してからＪＲ苫小牧行き最終列車に飛び乗った。そして記念祭の一日を振り返りながら自分にとって若き日の2年余の恵迪寮生活は短い期間ではあったが、その様々な体験は間違いなくその後の社会人として自立できた原点となっている……。電車の軽やかな振動と大寮歌祭、二次会で飲んだアルコールの酔いが効いて心地よい気分に浸りながらそんなことを再確認しつつ帰途についた。

（苫小牧市）

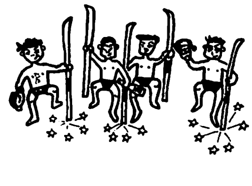
恵迪、今・昔・そして未来

千原　治
（S50年入寮）

平成19年9月22日、私は恵迪寮の同窓生であることを改めて誇りに思った日でした。恵迪寮誕生から約70年後に入寮した私達は、年代的には社会の中堅以上のところに位置する世代ですが、この日ばかりは「ひよっこ」でした。老いて益々ご壮健な大先輩諸氏の意気軒昂なお姿に圧倒されるばかりでした。この大先輩の方々が社会のいろいろな分野で活躍されたからこそ、今日の私達があるのだなと感じ入った次第です。この大先輩の方々も、生れた時には既に恵迪寮は存在していたわけです。そう考えた時、恵迪百年の時の長さに感動するとともに、その末端に連なっていることに誇りを感じました。そして、私もこれからの社会や地域で先輩に負けないくらいにやっていかねばならないという思いを強くした次第です。

この日は、ＮＨＫが「新日本紀行ふたたび」の「都ぞ弥生～北大寮歌物語」を放映した日でもありました。当初の放映予定は9月15日だったようですが、結果として恵迪百年記念祭の佳き日に重なったということは、奇しき因縁というべきでしょう。32年前の「新日本紀行」の撮影に少々関係した私は、この日の「新日本紀行ふたたび」を楽しみにしておりました。

ＮＨＫはこの番組について、「札幌にある北海道大学恵迪寮。明治時代から続くこの寮は学生が自ら管理する自治寮で、今年１００周年を迎える。代々歌い継がれた寮歌『都ぞ弥生』を歌い、集団生活を楽しむバンカラな学生達が描かれていた。あれから32年。寮は建て替えられ、女子学生も受け入れるなど時代と共に大きく変化したが、バンカラな気風は昔とかわらず残っている。４３０人が暮らす恵迪寮の日々を追う。」という説明の文章をＨＰに載せています。現在の寮生の生活を中心に昔日の様子も織り交ぜて描かれたこの番組の質は高く、この番組



を見た高校生が恵迪に憧れを抱いて入寮してくるものと思います。こうして恵迪は今後も脈々と続いていくのです。

恵迪百年記念祭の最後を飾るイベント「大寮歌祭」の折に、私にとって嬉しいことがありましたので紹介させていただきます。私は高校教師をしていますが、おそらく授業中に恵迪寮や寮歌の話を何度となくしていたのでしょう。そのことを教え子が覚えていました。彼女は親戚の結婚式に出席するために京王プラザに来ていて、恵迪百年記念「大寮歌祭」の看板を目にし、「きっと千原先生も来ているに違いない」と思い、実行委員の方に声をかけたそうです。その実行委員の方は私をご存知の先輩でしたので、私を探して彼女に引き合わせて下さいました。私は驚きと喜びで胸が一杯になりました。教師にとって教え子とこのような形で再会することはこの上ない喜びです。これも恵迪寮のおかげと感謝しています。その後、彼女の子どもとも会いました。埼玉の小学校に通う小学3年生のサッカー少年でした。この子が将来恵迪寮に入って、寮歌を高吟しているかもしれません。そんな姿を想像すると楽しくなってきました。

恵迪寮生の生活の中心に寮歌がありました。このことは、今も、私たちの時代も、大先輩の時代も、そして将来も変わらないことと思います。今も毎年寮歌を作り続けている恵迪寮の後輩達を頼もしく思います。これからも時代に根ざした寮歌が作られ、多くの名寮歌とともに歌い継がれていくことを期待しています。

（小樽市）

近ごろ、寮歌の歌い方や歌詞などが変化してきているという話をよく聞く。たまたま、木村咲哉君から「春雨に濡るる」の字句がおかしいという投稿があった。さらに、司馬威彦君から「都ぞ弥生」の前口上問題について意見が寄せられた。恵迪寮同窓会のアイデンティティーでもある寮歌を論じ合うことは大いに結構なことである。両君の考察に対し、髙井宗宏君が同窓会事務局としての見解を寄稿した。

寮歌「春雨に濡るる」考

木村咲哉
（S22年入寮）

〽春雨に濡（ぬ）るるアカシア花　街路の灯はなやかに
地は銀鼠にたそがるる　寂かに歩む若人が
心にめざむ爽やかの　潤ひ充てる力かな

大正12年度寮歌「春雨に濡るる」は誤りで、「濡る」が正しいと、北大図書刊行会発行の改訂版と昭和51年以降の寮歌集には校注が付されている。だがどうしてそうなのか、その理由は記されていない。古い寮歌の字句の一々をとらえて、それをとがめるつもりはないが、寮歌を青春の宝と思う人達にとっては看過できぬ問題と思うのである。

私がこのことを知ったのは平成になってからで、それまでは何の疑いもなく「春雨に濡るる」と歌っていた。「濡るる」が誤りならば、その根拠は何かという疑問が拭いきれず、10年ほど前に恵迪寮同窓会事務局に資料の有無を問い合わせ、当時の事務局長の髙井宗宏君と小寺義彦君に大変面倒をお掛けしたことがあった。

もし「濡るる」が誤りとすれば、二つの理由が考えられる。

一つは語法の問題である。「春雨に濡るるアカシア花」という名詞句にかかる文語動詞「濡るる」（口語は「濡れる」）は連体修飾語で、下二段活用文語動詞の「濡る」（ぬ―る）の連体形は「濡るる」（ぬ―るる）である。その用例は、「野もせに乱るる清白の雪（都ぞ弥生）」、「生気溢るる意気の歌（藻岩の緑）」「霞に暮るる野辺の春（花を褥）」等々、寮歌の歌詞にも数多く見られる。また語順が倒置して「地は銀鼠にたそがるる」のように動詞が語尾にきても、和歌、俳句などの定型詩では連体止めでよい。これが「散る」「降る」「塗る」のように四段活用文語動詞だと、「春雨に散るアカシア花」のようになって連体形は終止形と同じになる。故に「春雨に濡るる」は語法上の誤りではない。

二つ目の理由は送り仮名の問題である。送り仮名には一貫した理法はないが、古くは少なく送り、近年は多く送るのが習慣になっている。「春雨に……」でいえば、一番「心にめざむ爽（や）かの」、四番「琥珀の酒を汲み交（わ）し」に見られる。しかし、「春雨に濡るる」を「春雨に濡る」という送り方はしない。語幹は「ぬ」であるから「濡る」と書いて「濡る＝ぬるる」と読ませることはできない。「故郷を離るる歌」を「故郷を離る歌」とは書かないのである。

「春雨に……」が初出の寮歌集は大正12年版で、題名は意

外なことに「雨春に濡る」（春雨の誤植）となっており、歌詞の本文は「春雨に濡るアカシヤ花」、楽譜はアラビア数字の略譜で曲に添える仮名は付いていない。

しかし大正14年改訂版以後は「春雨に濡るるアカシヤ花」と直されており、楽譜に添付の仮名も「ハルサメニヌルルアカシヤバナ」となって、これが昭和50年まで続くのである。

こうして寮歌史を辿ってみると、この寮歌の題名・本文歌詞が「春雨に濡るる」であるにも拘わらず、初出の寮歌集に誤って「春雨に濡る」と仮名送りして印刷されたものと思われるのである。

高井氏から送られてきた資料は、前述の大正12年版寮歌集コピーの一部で、昭和51年改訂版の改訂者A氏（故人）はこの寮歌集にある「濡る」を見て、初出の方を重視して

アカシヤ

春雨に濡る（大正十二年寮歌）

高橋北雄君作歌
西田貫道君作曲

一

春雨に濡るアカシヤ花　街路(とおり)の灯(ともし)はなやかに
地は銀鼠(ぎんねず)にたそがるる　寂(しず)かに歩む若人が
心にめざむ爽かの　灑(うるお)い充てる力かな

二

夏の入陽に砂丘(やま)の　猟虎(らっこ)の骨に鷗(かもめ)飛ぶ
融けざる銀の山脈(やまなみ)は　碧(あお)薄れゆく空にうく
名残の光身にあびて　異郷の方(かた)を思ふかな

「濡るるとあるのは誤り」と校注されたのではなかろうか。改訂版の文中に「※大正13年版を資料に校訂」と書いてあるから、恐らくそうだろうと察するのである。高井氏もそのように推測されている（大正12年版の増刷か）。

ただ、昭和49年東京エルム会刊行「都ぞ弥生」（山口哲夫氏編）に所収の「春雨に濡るる」の歌詞は、作詞者ご自身が校閲されており、同じ歌名の題で回想文を寄稿されているが、A氏は前述の「都ぞ弥生」の集成をもとに改訂に着手されたのであるから、A氏がこれをご承知の上で誤りとされたのは、まことに不可解と言わざるを得ない。

次に、「潤（うるほ）ひ充てる力かな」の「潤ひ」であるが、初出の大正12年版寮歌集には「灑（うるほ）み」となっている。大正14年には、「灑（うるほ）ひ」に直されて昭和33年まで続き、翌年から昭和38年まで現代仮名遣いで「灑（うるお）ひ」に、さらに翌年から昭和50年まで「潤（うるお）い」の文字に改められた。

ところが昭和51年の大改訂で初出の「灑（うるほ）み」に戻っている。実は大正12年版は校正ミスと思われる個所が余りにも多い。また、文語動詞「うるほふ」「うるほす」の名詞は「うるほひ」である。「灑（うるほ）み」は多分誤植であろう。

前述の山口氏編「都ぞ弥生」所収の「春雨に……」の中で、これも作詞者ご自身が「潤（うるお）い」と校閲承認済みである。しかしここは慣例に従い、旧仮名遣いに復元して「潤（うるほ）ひ」とすべきが妥当と思う。

以上、臆測をまじえて縷々述べたが、30年もの長い間「濡

る」と訂正され、これが殆ど定着されかかっているものを、今更また改めよとは何事ぞと言われそうだ。異論があるだろうが、ぜひ然るべき専門の方に検証していただきたい。そしてもし「春雨に濡るる」が誤りでなければ、今からでも遅くない、元通りに直していただき、この名曲が松本高等学校寮歌「夕暮るる」、山形高等学校寮歌「寮に別るる日に」と同じことば遣いで正しく歌われることを願うものである。

（札幌市西区）

「前口上問題」に想うこと

司馬威彦
（S38年入寮）

少し前から我が寮を代表する「都ぞ弥生」のいわゆる前口上問題が会誌などで話題になっているようです。数年前には某演歌歌手が勝手に付けた前口上をめぐり、原作詞者との確執が時の話題になったことでもあり、この事件と当該問題を重ね合わせて感じた諸兄もいると思います。

入寮当時にはこのような慣習はなく、3年ごろから前口上を耳にするようになりましたが、言わばこのような習慣の芽生えの時期をたまたま体験した私にとっていささか関心のなくもない話題ですので、これについて愚見を一言述べさせて頂きます。

結論から申しますと、前口上付きで歌うことに推奨はしないまでも反対する気持ちはありません。確かに精神的には無論、経済的にも創作活動によって生きる芸術家にとっては、その作品は彼の全存在であり命です。これに他者が無断で手を加えることはその結果の如何にかかわらず、取りも直さず彼の全人格を否定することであり、いかなる場合もあってはならないことです。

しかし、今我々の間で論じられている問題には、この事件とは本質的に似て非なるものが考えられます。理由は以下の通りです。

①寮歌集にも明記されている如く、寮歌の著作権は全て寮に帰属しており、これから判断しても、寮歌は一度寮生の総意の下に選定された後は個人の手を離れ、作者といえどもこれに対する特別の発言権はないものと考えられます。この点は自己の全存在を賭けて作品一つで世に挑まんとする芸術家とは大きく異なるところでしょう。

②寮歌は選定された時点では、極論すればその原型を提供したに過ぎず、多くの寮生に歌い継がれてこそ真に寮歌として完成するという側面もあると思います。やや誇張していえば、過去、現在を通して全ての寮生、否、寮歌を愛する全ての北大生の手になる北大民謡的性格も併せ持つのではないでしょうか。

③現実に曲については何度も改訂されたり、さらにその楽譜からもかなり外れて歌われていたりしていますが、以上のような見地に立つならば、ある意味では当然のことであって、不特定多数の寮生もまだ寮歌の形成に長年の間にはなにがしかの形で「参加」したという事実の反映といえ

るでしょう。

④歌詞についてはさすがに変えようもありませんが、ほとんど全ての寮歌において、特定部分以外の多くの詞を省略するという形で歌われているのが普通であります。考えて見ればこれは歌うものが歌詞を選別しているわけで、厳密にいえばこれも一種の「改変」と言えなくもないはずですが、特に異を唱える者はいないと思います。

⑤昭和11年度寮歌の一部を、明治の寮歌の前に付して、あたかも一体のものの如く歌うことは確かに歌詞の一部省略などとは比較にもならない乱暴なことです。しかし、これまでに述べてきた考えに従い、今少し視点を広げて眺めるならば、各年度の寮歌を集大成した、いわば「寮歌集合体」自身もまた年度にとらわれない一つの「大きな寮歌」との見方が出来るのではないでしょうか。だとすれば、「省略」が許されるなら「合体」もまた場合によっては許されてもよいという見解が成り立ってもおかしくないはずです。

「楡陵謳春賦」は青春の感じやすく多情な心境を実に巧みに吐露しており、あふれる感慨と高揚する気持ちを表現するのにはこれ以上はないと思われる希有の名句です。

「都ぞ弥生」との相性は取り分け良いですが、それに限らずどの寮歌の前に冠してもおかしくない、いわば青春と寮歌全体に対する「応援団」的口上と言っても過言ではありません。にもかかわらず、自分たちの気持ちを表すのにぴったりの名文句を「都ぞ弥生」の前に付する習慣は「都ぞ弥生」を冒涜するものでは少しもないばかりか、取りも直さず「都ぞ弥生」に対する特別の敬意の表れとすら感じられます。

そして何らの規制も強制もないところに自ずと芽生えたこの習慣は極めて自然なものと言わねばなりません。

私の考えは概ね以上のようなものですが無論、異論を持って誤りと断ずる気持ちは毛頭ありません。つまり、感じ方の問題だからです。自己の作品が他人の手を経るうちに何時しか変わったとなれば違和感を抱くのは当然のことで、自分自身の体験からもよく理解できます。

もとより、私とて寮歌は好き勝手に恣意的に歌ってよいと主張しているわけではありません。

伝統を守り、尊び、継承しようとする熱い心が前提となるのは当然のこと。それにもかかわらず、伝統擁護の名の下に形のみにとらわれ、縛られるような閉塞的、思考停止的に仮にも陥るようなことがあれば、それこそまさに我が恵迪寮精神の「伝統」に背くものと言わねばならないというのが私の本意とするところです。

また、事実に対する正確な認識や、先人に対する当然の敬意などが必要なことは論を待ちません。例えば「楡陵謳春賦」は本来、昭和11年度のものであることをしっかりわきまえ、寮歌は本来楽しく歌われるべきものである以上、前口上を好まない先輩の前ではこれを遠慮するなど常識的な配慮は今さら述べるまでもないことでしょう。

（札幌市中央区）

寮歌問題に対する事務局の見解

髙井宗宏
（S31年入寮）

前記の寮歌問題に関して本会の刊行物を振り返って見ると、私自身が「正調『都ぞ弥生』をめぐって」（恵迪の青春、p393）を投稿しているばかりか、「寮歌『雪解の楡稜の』作詞者より」（恵迪1号、p146）、「寮歌『時潮の波の』はこう歌おう」（恵迪4号、p84）、「手をとりて美しき国を」（恵迪の青春、p366）、「予科柔道部東征歌の誤り訂正を」（恵迪1号、p148）など、作詞作歌者本人によって正調への訂正や誤記について意見が表明されている。永年に亘って同窓会事務局を担当し、これらの投稿を見てきた者として、なぜ、このような修正要求文が投稿されるか、どう解決を図るか等について見解を述べる。

寮歌関連資料の整理統合

寮歌の作詞作歌者本人や寮歌研究者による正調問題は、要約すれば一つの寮歌に各種の寮歌集があるためであると考えられる。最初に恵迪寮歌に関連する資料を整理区分にすると次のようになる。

資料①　水野一／川越守校訂「北大寮歌集」、北大図書刊行会編、昭和51年刊。北大百年を契機に刊行。昭和50年度までの寮歌に対して、歌詞は水野氏、譜面は川越氏が「徹底的な校訂作業に基づき可能な限り原曲を復元」（編集後記および本の帯）していて、在来の寮歌集とは随所で異なる。

資料②　恵迪寮刊「寮歌集」の内、明治44年（歌詞のみで初版）、大正7（歌詞・譜面併記して初版）から恵迪寮史刊行頃まで。これらの譜面は、「ドレミファソラシ」を「1234567」で表す「数字譜」で書かれている。

資料③　昭和6年刊行の「恵迪寮史」が収録する「寮歌集」。この収録時に、毎年の校正が大変なため、ミスプリントが重複しているとして「一々原作と対照して原作の儘を載せるように努めた結果、今日の寮歌集とは多少相違している」（編集後記）と原曲復帰の改訂を明記している。

資料④　恵迪寮刊「寮歌集」の内、昭和12年から昭和50年版まで。細かく分けると昭和12年版は、初めて数字譜から五線譜に書き換え、青葉満六先生の序を貰った改訂版で、寮が発行する寮歌集の基本となったが、その際に随所に校訂された形跡がある。次いで昭和16年版は、伊藤周五郎先生の序を貰って再改訂し、赤木顕次氏と接触して「藻岩の緑」の作歌者をそれまでの柳沢秀雄から赤木顕次と書き換え（昭和32年版で復元）ている。この校訂は、紙質の悪化によって在来の銅製版では綺麗に印刷できないとして、銅製版を更新したためであるが、急ぎ過ぎて正誤表を追加する羽目になり、翌17年版で正しく修正し、巻頭に「改訂について」の文を掲載している。

資料⑤　恵迪寮刊「寮歌集」の内、昭和52年頃から現在まで。この中で昭和50年度以前の寮歌は、それまでの製版が汚かったこと、同じ印刷所で無料転用ができたことなどから、資料①の「北大寮歌集」の版型をそのまま転用した

ため、作詞作歌者の意向に無関係に校訂されているにも拘わらず、恵迪寮の刊行物となって誰の目にも「正調」と認めさせる状況に置いている。

資料⑥　山口哲夫編「都ぞ弥生」、東京エルム会刊、昭和49年初版、昭和50年3版。昭和49年度寮歌まで作詞作歌者、またはいずれか一人が原作を校閲し、思い出を執筆している。しかし、これには譜面がつけられていない。

これらの分類と経過から明らかなように、寮歌集の五線譜への移行時を始め、印刷用銅版の摩耗更新時や印刷所変更時などに校訂があったと考えるのが妥当であり、その時点の寮生のムードが反映されていることも否定できない。加えて「寮歌は寮生の口伝で変わって良い」とか、「著作権が寮にあるから変更は自由である」と言う強い意見も加味すると、すべてが現寮生の歌い方が正調となって前述の正調や原作者の意見投稿は問題外となる。

しかし、恵迪寮歌集には「著作権を有する」と記載しているものの、作詞作歌者名を明示しているため、単に著作権法の「公表権＝未発表の著作物を公に発表する権利」および「氏名表示権＝著作物の公表の際に著作者の氏名を表示する権利」を有するに過ぎず、著作者（ここでは作詞作歌者）の意に反して改変する権利までないとするのが正鵠を得た考えだろう。だからこそ冒頭に掲げた作詞作歌者の投稿も次節の「前口上」禁止も有効であり、寮歌の正調論を論じて良いことにもなる。

ただし、作詞作歌者の意見はすべて正しいとすることも疑問である。詳しくは「正調『都ぞ弥生』をめぐって」または閉寮記念文集「恵迪寮よ永遠に」の除幕式特集を見て頂きたいが、作歌者本人が在来寮歌集とは全く異なる譜面と合唱テープを届けながら、来寮して寮生の歌を聴いた途端に寮生の歌を正調と認め、自身が提供された資料をキャンセルされた事実がある。加えて、同氏の指摘によって昭和16年版から昭和31年版まで、「藻岩の緑」の作歌者を書き換えたミスも起きている。これは本人の了解を得て昭和32年版寮歌集で復元したことも紹介しておきたい。

「都ぞ弥生」の前口上をめぐって

これは、「都ぞ弥生」の前に昭和11年度寮歌「嗚呼茫々の」の序「楡陵謳春賦」を付けて歌うことを指している。これに対して「嗚呼茫々の」の作歌者宍戸昌夫（S10年入寮）君は、平成9年1月刊行の「東京エルム新聞433号」に「続・寮歌考」と題して次のように書いておられる。

（冒頭略）北大では「都ぞ弥生」を歌う前に前口上を付けることが通例になっているようで、誰もそれを異としないで過ぎ

都ぞ弥生（明治45年寮歌）　横山芳介君 作歌　赤木顕次君 作曲

1

都ぞ弥生の雲紫に　花の香漂ふ宴遊の筵
尽きせぬ奢に濃き紅や　その春暮れては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに　燃えなん我胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の　清き国ぞとあこがれぬ

5

朝雲流れて金色に照り　平原果てなき東の際
連なる山脈玲瓏として　今しも輝く紫紺の雪に
自然の藝術を懐みつつ　高鳴る血潮のほとばしりもて
貴とき野心の訓へ培ひ
栄え行く　我等が寮を誇らずや

オオバナノエンレイソウ

ている。驚くよりも呆れるばかりである。（中略）前口上とは、まるで村芝居か旅役者のその謂で、教養の乏しさを露呈している。私は幾度かこの前口上の不当さを恵迪寮関係者に抗議したが、それを誰もまともに取り上げてくれない。誰が考えても「都ぞ弥生」には何の序文も付けられていないのだから、付けて歌うのは作者に対して失礼な話である。また、私にすれば、あの序文は昭和11年の寮歌「嗚呼茫々の」につけた序「楡陵謳春賦」で、それを他に付けられては困るのである。北大の某教授までが「あれは名文句だからいいではないですか」と言うに至っては、われ何をか言わん哉」と嘆ずるのみである（後略）

この記事を見た板谷実君（S21年入寮）は、本会東日本支部主催の大寮歌祭で刊行された「都ぞ弥生90周年記念祭記念誌」に「宍戸さんから、私も数年前にこの話を聞き、お手紙も頂戴した。至極尤もなことであり、こんなことが放置されてはいけない（中略）『都ぞ弥生』に序文も序言も巻頭言も要らない。また、あってはならない。正しい『都ぞ弥生』を後生に残そうではないか。また、残すことが吾々に課せられた責任でもある」と投稿されたばかりか、本会事務局に対してもいろいろと資料を揃えて善処を申し込まれた。

これを受けた本会は、「同窓会通信18号」（平成15年春発行）で同窓会事務局に、「寮歌『都ぞ弥生』にあろうことか、昭和11年度寮歌『嗚呼茫々の』の序『楡陵謳春賦』を前口上と名付けて歌うのはけしからんとのお叱りと、今後は無いように修正させろとのご指示を頂いた。筆者も同一の意見で、このような指摘はもっともと頷けるし、すでに幾度か現寮生や応援団幹部と話し合いもしてきました。しかしながら、今でも続いていることから、ご注意が絶えません。（中略）本件に対する皆さんのご意見をお伺いし、誰もが納得できる結論を得たいと思います。投稿をお待ちします」との話題提供をした。

これに寄せられた2件の意見は、「同窓会通信19号」（平成16年春発行）に掲載し、「あくまで『吾等が三年を契る……』で歌い始めれば、続くのは『都ぞ弥生』でなくて『嗚呼茫々の』でなければならない。作者が怒っている前口上の転用など、悪いことは止めるべきである」を前口上問題の結論とした。

すなわち、「嗚呼茫々の」の作歌者宍戸昌夫君が平成9年に異論を発表されてすでに10年、本同窓会の紙面上で「『都ぞ弥生』には前口上を絶対につけない」との結論を公表して4年を経ている。前口上を禁止するには「全恵迪OBどころか、全北大OBがこぞって歌わないことにせねば解消できない」ことを指摘し、「都ぞ弥生」を愛する全ての方々に周知を図りたい。

「春雨に濡る」考をめぐって

前述の分類に従って「春雨に濡る」の資料間の違いを検証・比較するが、ここでは譜面の音程や音符の違いについては報告しない。一、本寮歌ができた大正12年版「寮歌集」（資料②）は、タイトルと歌詞とも「春雨に濡る」と記載し、

譜面には歌詞のみで音の割付け法が分からない。二、前者の寮歌集を原典・正調と判断した資料①の「北大寮歌集」および同じ版型を使っている資料⑤の現行「寮歌集」は、タイトルと歌詞とも「春雨に濡る」、譜面には歌詞が割り当てられ、「ハルサメニーヌル」と記載している。さらに注目すべきことは、両者共に歌詞の末尾に「＊従来『濡るる』となっていたのは誤りである」と特記していることである。

一方、三、資料③の「恵迪寮史」は、タイトルに「春雨に濡る」、歌詞に「濡るゝ」と使い分けし、譜面には歌詞を割り当てて「ヌルル」と記している。四、資料④の在来の寮歌集は、タイトルと歌詞とも「春雨に濡るゝ」、譜面には「ヌルル」が割り当てられているが、一部に音程を変えた部分がある。五、資料⑥の山口編「都ぞ弥生」は、作詩者の校閲を受けた上でタイトルと歌詞とも「春雨に濡るる」と記載し、譜面は付いていない。これには作詞作曲者の寄稿文があり、文中でも「濡るる」で統一している。

この一連の区分に従うと「春雨に濡る」の正調は、大正12年版寮歌集が初出だから正調と断定したくなるが、そう考えるには無理がある。その寮歌集は端面を綺麗に裁断してあるが、「春雨に濡る」の頁のみは裁断面より小さい用紙で製本後に差し込んだ形跡があるため、恐らく当選曲を決めたが寮歌集刊行までに時間がなく、校正も不十分だったと見るからである。数字譜は音階を1から7で表すとはいえ、数字のみは基準オクターブで四分音符の長さ、それより長い音は数字に続けて「―」を足す、逆に四分音符より短い音は半分になるごとに下線を一本加える。さらにオクターブの上下は「数字の上・下の点」で表すため、当時の印刷技術では容易ではないので、急がせれば誤植も出やすい。前述の昭和16年版よりも翌17年版が正しい例のように、作詞作歌者本人が在寮している翌年以降の版が正調になると見た方がよい。また、永年に亘って「ヌルル」と歌ってきたことも理由に加えて、「春雨に濡る」は刊行年次が近い「恵迪寮史」が収録する「寮歌集」を正調として提案したい。

恵迪寮歌の正調や誤記問題について

前述で紹介した5編は、いずれも正調への訂正や誤記について述べているが、作詞作歌者の場合は当然として、他の人が正調を確認する術をどこに求めるかも考えねばならない。

第1の作詞作歌者の投稿に対しては、現在の恵迪寮歌集が、昭和50年度以前の寮歌に資料①の「北大寮歌集」を転用しているため、第3者の刊行物である「北大寮歌集」ならば発行者の責任に帰して問題外となるが、恵迪寮刊行のために水野・川越氏の校訂が正調と見えてしまうから問題が起きている。いずれの投稿も在来の恵迪寮歌集であれば問題がなくなるからであり、現寮生に対して恵迪寮歌集の昭和50年度以前の寮歌を在来の寮歌集に置き換えて欲しいと訴える。

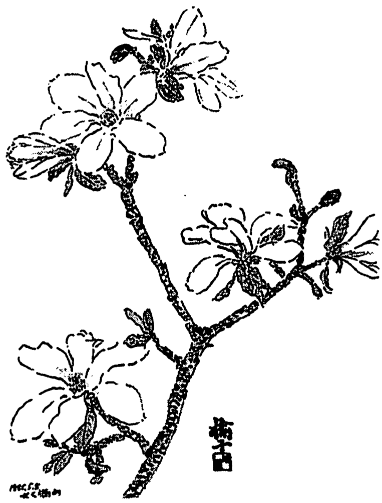
次に作詞作歌者以外の正調探索については、何が何でも「原典準拠」を正解とするなら、「都ぞ弥生」の5番に「自然の芸術を懐かしみつゝ」とあるが、今も残る横山芳介氏の作詞ノートには、「自然の巧みを懐かしみしつゝ」と書か

れて投稿後に変更があること、同氏の回顧録に「寮歌委員として前年の歌詞に手を加え過ぎたことが作歌する動機になった」とあることを考えると、本人のノートや選定時に配布された応募歌プリントよりも、少なくとも当選年に寮生が歌い込んで仕上げた選定翌年の寮歌集の方が寮生による正調寮歌と言えるようである。

ただし、これには作詞作歌者の了解が前提であり、前述の「著作者の意に反して改変する権利までない」に反しない。

現在の北大内では、10数年前から「都ぞ弥生」の第5フレーズ「夢こそ一時」以降がスローテンポになっている。また、同窓会の寮歌祭で「都ぞ弥生」を合唱する時も、各自まちまちに歌い始めて1番の後半にならないと全員が一致した合唱にならない。これは、大学関連機関の刊行物に掲載される「都ぞ弥生」の譜面を詳細に比較すると10種類近くあること、これに「寮歌は寮生の口伝で変わって良い」等の意見を許容しているからであり、いずれ同窓会で「都ぞ弥生」を合唱できなくなることを恐れる。本同窓会が発足した早々から、恵迪寮歌に関して「前口上」問題ばかりか、「□△はけしからん」とのお叱りと「今後は無いように修正させろ」とのご指示を頂き、そのたびに事務局担当者として適切に対応してきたつもりである。しかし、今回のように幾たびも繰り返されるため、各位の了解を得たいとして長文になったが、これによって問題の終結を図りたいと思う。

（北広島市）



昭和31年入寮生が、一昨年秋に入寮50周年の同期会を盛大に開催した。なぜ「入寮50年」かと言えば、五代程前の先輩らが「卒業50周年」で開催したところ、皆が72歳を超えているから、参加申し込みしながらドタキャンが多発したとか、会場で入院騒ぎまで起きたなどの経験を紹介され、同期会の開催期は、浪人者でも70歳に過ぎない入寮50年の方がよい、この歳であればサラリーマンはもとより、自営者でも経営移譲して余暇を考える世代となって集まり易いとアドバイスされたからである。

31年組が実際に集まった経験からも「来し方を吐露し、これからの発展を展望するにも元気で夢がある年齢で有意義であった」ため、これから企画する入寮組にも「入寮50年」を推奨すべきと考えた。ここでは同窓会開催のノウハウも伝わるようにと考え、長文になるが開催報告をお伝えする。

尽きぬ珠玉の思い出

古川俊実（S31年入寮）

「おい、○○じゃないか」
「えーと、だれだっけ」
「オレだよ、オレ。□□だよ」
「いやぁ、すっかり変わって…」
「お前、○○だろ。すぐ分かったよ」
「随分久ぶりたけど、いつ以来かな」
「寮を出て以来だから48年ぶりだ」
――こんな会話が、記念誌『わが青春の北大恵迪寮』を手にして、飛び交いました。

２００６年9月6日。私たちの入寮50周年記念行事のハイライトといえる祝賀パーティーを前に、集合場所の北大構内クラーク会館での出会いのときでした。

「便哲」に迎えられ入寮

私たちは、１９５６年4月、恵迪寮の住人になりました。古ぼけた木造2階建て、カビ臭く昼なお暗い廊下でしたが、古今の哲人や文人の詞章の数々を大書した部屋や廊下、トイレの壁は、旧制予科時代の雰囲気をまだまだとどめていました。

現役入学者は18歳。あの日本敗戦時は国民学校2年生でした。つまり、浪人入学者を含め、寮友はみな「少国民」として、さまざまな戦時体験を経ていました。私自身は戦争末期、縁故疎開で東京を脱出したのですが、東京に残った同級生の何人もが「3月10日大空襲」の犠牲になりました。寮で1年上の同室者は広島で肉親のほとんどを亡くした被爆者で、他の寮友からも戦災の実相と身内を失った話

を聞きました。沖縄出身の2人は、全島戦場という「鉄の暴風」の中を生き抜いたのですが、北大への進学時、沖縄がまだ米軍占領下だったため、パスポートを携行しての留学でした。

とはいえ、当時の寮が硬直した「反戦平和の一大拠点」だったわけではないようです。「60年安保」の前夜で、学内外のデモは度々でしたが、参加はあくまで自由意思でした。総じて、リベラルではあっても無党派が大勢だったと言えるでしょう。それは敗戦直後、教科書にスミを塗った最も年少の世代として、個々人の多様さこそが肝心という判断が身についていたからではないかと私は考えます。

入寮して半年後、ハンガリーで自由を求める民衆の蜂起がソ連によって圧殺されたことが報道されました。この民衆の行動を全学連は「帝国主義分子の扇動による反革命」として糾弾する方針を打ち出しましたが、その判断の支持を諮る寮代議員会は、出席者少数で流会続き。寮生たちの知恵だったでしょう。私たちの入寮50周年記念行事と同じ年、ハンガリー映画『自由、愛』＝邦題『君の涙ドナウに流れハンガリー1956』が作られました。自由を叫ぶ学生たちの決起に始まった動乱の悲惨な歴史的事実を描く作品の製作まで、実に50年かかったわけです。

すきっ腹に象の肉が届いた

『恵迪』第7号に梶浦政男君が書いているように、私たちは貧しさに耐える日常でした。寮友の多くは実家からの送金がなく、バイトに次ぐバイトが当たり前でした。月に2500円納めれば3食あたりましたが、炊務委員会苦心の献立は質素そのもの。毎食5分もかからず食べ終えるのですが、「メシだぁ」と告げる鐘の合図は待ち遠しいものでした。

そんな「欠食野郎」たちの前に、ある日、象の肉が現れました。巡業中のサーカスの火災で焼死した象やライオンが獣医学部で解剖され、その肉がバケツでどっと寮に持ち込まれたのです。聞き付けた寮生がアンモニア臭い珍味を焼いたり煮たりしたのですが、炊務委員会があずかり知らぬことなので調味料がありません。「せめて醤油があれば」と言いながら腹に納めたものの、「うまかった」という記憶は寮友のだれも持っていません。

よく通った北16条電停そばの「いろり」が50円のラーメンを60円へ値上げすると言い出したとき、断腸の思いで、抗議のボイコットをしたものです。空腹に耐え兼ねると、質屋に学生服の上着を入れて500円借り、狸小路で寮友とトンカツを食いました。

たばこは売店でバラ売りを買うのが常で、その金もないとシケモク（吸い殻）をキセルで吸うしかありません。酒は臭い焼酎か合成酒が飲めれば幸せで、まともな日本酒やビール、ウィスキーは貴重品でした。

この年の政府の『経済白書』は「もはや戦後ではない」と復興をうたいあげましたが、私たちの生活実感とは、まだかけ離れたご託宣でした。また、石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞に選ばれましたが、そこで描かれたドラ息子どもの生態とも、無縁でした。

胃袋を超えた寮歌の魅力

ともあれ、貧しさを分かち合いながら、寄り添う魂の裸の触れ合いは、かけがえのない濃密なもので、終生の友との交遊をもたらしました。

食を超えたものの筆頭は寮歌でした。『藻岩の緑』『都ぞ弥生』『魔神の呪』『蒼空高く翔らむと』『黒潮鳴れる』『別離の歌』『春未だ浅き』『津軽の滄海の』『湖に星の散るなり』『時潮の波の』『手をとりて美しき国を』、そして同期生・前島一淑君作歌作曲の『花繚乱の』まで、何十回、何百回と歌ったことでしょう。『花繚乱の』は寮歌として58曲目でした。

それぞれの時代相を映す面は極力、沈潜させて、ひたすら「自然との対話」を描写するわが寮歌群は、喜びにわくとき、悲しみに打ちひしがれたとき、震える魂の鼓動に応えてくれるものでした。歌詞に難解な漢字が使われ、漠然とした意味しかつかめない部分もありましたが、それでも満足でした。物質的ひもじさを忘れて、いつの日かへの希望の灯をかきたててくれました。

『津軽の滄海の』と私の誕生年は同じで、その1938年、札幌出身の劇作家・久保栄が代表作『火山灰地』を発表。劇中にさりげなく『都ぞ弥生』と『ストームの歌』が盛り込まれました。当時の北海道の人々にそれだけポピュラーだったのでしょう。そして『津軽の滄海の』作歌時は予科野球部員で、6年後に中国戦線で戦死した二階堂孝一さんの最期について、私は2001年、『北大野球部100年史』の中に、鎮魂の祈りを込めて記しました。

恵迪寮歌にとどまらず、他の旧制高校の寮歌もよく歌いました。平成20年1月、旧制7高造士館寮歌『北辰斜（め）に』を題名とする映画が一般公開されました。前島一淑君は東京の上映館で自らの寮生活と重ね合わせて涙が止まらず、2回続けて見た後、7高の地元鹿児島でもう1回見て、感慨を新たにしたといいます。この映画は北大東京同窓会の会合でも話題になり、80代の予科OBたちもほとんどが歌詞を諳じていました。学校の枠を越えて、青春の炎は今も燃えているのです。

深夜の寮で、娯楽室は別天地でした。SPレコードによる珠玉のクラシック名曲との出会いは至福の時間でした。ただ、チャイコフスキーが『悲愴』第4楽章の「消える」フィナーレを考えたとき、『ハムレット』のラストワード「あとは沈黙」を意識しなかったかどうかの疑問は、未だ解けていませんが…。

我らが砦は脳裏に消えず

往事茫々ですが、友情の宝石を数々生む砦であった寮舎は、もうありません。『恵迪』第7号にあるように、髙井宗宏君の奮闘で北海道開拓の村に一部は保存されていますが、全容は私たちの脳裏にしか残っていません。

しかし、この残像こそ、入寮50周年記念行事を思い立つ原点でした。自由と自治の精神を育んでくれた日々の記憶は学窓を巣立った後、あの激動の時代に挑み、たくましく生きる支えになってくれたからです。

同期入寮は187人（うち住所不明10人、早世27人）ですが、古稀に差しかかった者たちが、恵迪へのいとおしさを体現した50周年記念企画の中身は、本稿に続く河野民雄・桜庭慎吾両君の報告にあるとおりです。

私たちの宴のほぼ1年後、恵迪寮100年を祝う行事が札幌で催されました。それは、連綿と受け継がれてきた恵迪の歩みのちょうど半ばの時点の歴史を私たちが刻んだ証しを確認することでもありました。

◇

同期の文化人は多々ですが、朝日・毎日新聞両紙の歌壇にしばしば入選している手塚主於美君の作品を結びにしましょう。

永らへて「花繚乱の」歌に酔ふ
寮友の貌　思ひ出せば

（東京都江東区）

感慨新た、祝賀会に47人

河野民雄
（S31年入寮）

入寮50周年祝賀会――。恵迪寮入寮から半世紀。その節目に開いた記念パーティーは、2006年（平成18年）9月6日、札幌市郊外茨戸のオテル・ド・レーゼンサッポロを会場に開催。夫人同伴の4人を含む47人が出席、大盛況だった。

感激の再会…学内ツアー

この激動の半世紀の間、同期入寮者たちが一堂に集う機会がなかっただけに、記念行事への思いは強かった。2本柱として、祝賀会は札幌中心に北海道在住の者が、記念文集は首都圏を主に本州在住の者が、担うことにした。

祝賀会の実行委員会は、横山清君をキャップに18人で構成、前年から準備を重ねた。祝賀会当日の前段は母校学内のツアー。午後2時、クラーク会館に集合。感激の再会を果たした参加者は、西沢郁夫君のガイドでキャンパス見学に出発。クラーク像前で記念撮影の後、現在は大学博物館となっている旧理学部を見学。さらに進みポプラ並木へ。並木は先年の台風で多数倒れ、幼木が植えられていた。

久しぶりに見る構内は樹木が伸び、新しい建物が増えたことに驚くうち、最大のお目当て恵迪寮跡を目指し、『都ぞ弥生』の歌碑に到着。この碑は、入寮2年目の1957年9月、北大創基80周年記念で建立されたものだ。同期入寮の159期横山清委員会の発議で資金集めを開始。寮生も労力奉仕をして160期太田徹委員会のとき完成した。除幕式には作曲者・赤木顕次さんも出席。寮生は献歌した後、歌碑の周りでストームを展開した。そんな往時を思い返し、歌碑の前で参加者が声をそろえ『都ぞ弥生』を捧げた。

歌碑は地盤沈下のためかみすぼらしく見える。恵迪同窓会代表幹事でもある横山君が「来年の恵迪百周年記念に修復工事をしたいので協力を」と要請（この通り実現した）。

つわものどもが夢の跡、私たちの恵迪寮のあった辺りは

テニスコートになり、樹林の中に寮の記念碑だけがひっそり佇み、一同昔日を偲び感慨深いものがあった。元の寮の西側数百メートルに現在の鉄筋コンクリート造りの新寮がある。希望者がいれば案内する予定だったが、文部省が学生管理強化策で自治権を剥奪し、集会を開けぬよう個室だけで食堂も無い寮の姿を見ることを省略して正解だったであろう。

学内ツアーの最後は元の寮の前方、第2農場のモデルバーンを見学。農場横に復元された「遠友学舎」に立ち寄って終了。ここから送迎バスで祝賀会会場のホテルへ向かった。

思い出話と歌・歌・歌

会場のホテルは、バブル最盛期に建設され、拓銀破綻の原因にもなっただけあって、なかなかゴージャス。私たちの在学時、拓銀は道内屈指の優良企業で就職試験も難関で知られ、北海道開拓とともに歩んだ拓銀の前途を疑う者はなかった。が、巨額の過剰融資と不良債権で破綻。その消滅へつながった現場のひとつに足を踏み入れ、ここでも時の流れをかみしめたのだった。

夜7時からの宴会に先立って、記念撮影となったが、ここでハプニングが起こる。写っているのが出席者より数人少ないのだ。早くもボケが来たのか、それとも恵迪伝統のタイマン癖が出たのか。結局、後で集合写真の欄外に数人の顔が追加されたので、それは誰であったか、とくとご覧あれ。(写真)

夜の部は小笠原孝之君の司会で、横山代表の歓迎の辞に始まり、遠来の岡本希八郎君(九州)、松栄(山本)新君(佐渡)らのスピーチの後、元応援団永澤昌久君の音頭による『都ぞ弥生』の斉唱で開幕。以後は、河野の司会で寮歌と思い出話のオンパレード。『行こうかススキノ戻ろか寮へ』や佐藤春夫作の『酒、歌、タバコ、また女』などの飛び入りもあって賑やかに進行。2次会は隣室に移って髙井宗宏君が用意してくれた往時の写真類をスライドで鑑賞し、歌や会話でさらに盛り上がり、最後は『別離の歌』と、肩組み合ってのストームで終わった。

初代の寮舎とも対面

翌日は、野幌森林公園の「開拓の村」に移された恵迪寮の見学となった。遠方から来た7人が参加し、地元から兼古潔君や西沢君らが案内した。小雨模様だったが、初代の恵迪寮の玄関でガイドさんや観光客も交えて『都ぞ弥生』

を大声で歌う。展示室には『都ぞ弥生』歌碑落成時のストームを写した大きなパネル写真があり、そこに自分や友人を発見しての歓声や、昔の居室の木製ベッドに寝転んで懐かしむ人もいた。

こうして、2日間にわたる宴は好評のうちに終えることが出来た。この成功は、前述したように地元札幌勢と東京勢の連携によるところが大きいが、それにも増して全体の事務局長役を務めてくれた高井君の献身的働きを特筆して、ご苦労に感謝したい。

《祝賀会実行委員会》

代表＝横山清▽副代表＝高井宗宏・長谷川孝太郎▽委員＝岩船修・大島聡範・小笠原孝之・兼古潔・亀貝一義・河野民雄・小林征・高橋忠嘉・永澤昌久・西沢郁夫・林陽・福永典之・干場一正・三ツ谷富夫・山下貴正

（札幌市清田区）

記念文集に45人・51編の玉稿

桜庭慎吾（S31年入寮）

刷り上ったばかりの記念文集——『わが青春の北大恵迪寮／1956～2006年　入寮50年記念誌』が机の上に積まれていた。東京・高田馬場の同窓会事務室。2006年（平成18年）8月21日、冷房下とはいえ外の炎暑が室内にも及んでいたが、編集委員たちの顔は輝いていた。14カ月にわたる取り組みが貴重な作品に結実したのだ。「間にあった。来月、札幌での祝賀会に皆この文集を読んで出席してくれるだろう」。その思いを胸に、寮友たちへの発送作業にかかった。

10年前から温めた構想

記念行事のプランは、実は1997年(平成9年)、恵迪同人で12年先輩の角幡春雄さんと交わした会話から私の中で温めていた。戦時下の1944年（昭和19年）に入寮した角幡さんたち農類同期生は卒業後、会誌『楡陵』を定期刊行し、入寮50周年記念の集いも札幌で開いたと伺って感銘を受けていたのだ。

そして、私たちの入寮50周年を翌年に控えた2005年の年賀状で、私は札幌の横山清・高井宗宏両君へ、「来年、節目の同期会をやりたいね」と提案してみた。その後、札幌へ出かけた折、他の同期生にも会って記念行事の論議が動きだした。結論として北海道在住者が50周年祝賀パーティーを準備し、本州側が記念文集作りを受け持つことを確認した。

編集委員会に16人が参加

記念文集の編集作業は、その年6月から始まった。寮友たちの職歴もにらみ、首都圏在住者を主に編集委員を委嘱し、16人で構成した。一応の分担は、▽原稿集約＝栗田信▽会計幹事＝中島幸一→手塚主於美▽名簿整理＝石橋健▽誌面割り付け＝古川俊実の諸君が中心になり、実務はメン

バー総がかりで進めることにした。

大まかな構成や日程を固めた後、最初のポイントは、原稿の呼びかけだった。松竹映画の製作現場で長年、人生の喜怒哀楽を作品化してきた梶浦政男君が「かつては紅顔緑髪の恵迪寮生だった諸子へ」と題する檄文を書いてくれた。50年の重みを説き、「(あの) 学寮で、共に遊び、学び、飢え、凍え、飲み、論じた日々の記憶」を共有する寮友の玉稿を求める格調高い文面だった。

文章だけでなく、秘蔵の写真類の出稿も要請。同期生全員の消息確認のためのアンケート用紙も同封し、半世紀ぶりの名簿整備に努めた。

多様多彩な原稿次々と

第2次呼びかけを経て、原稿が届き始めた。終生の友との交わり、若さゆえの蛮勇や煩悶、運動部やサークル活動での燃焼、時代状況との接点など寮生活の思い出にとどまらず、その後の生き方を記した文など多様な内容で、50歳で逝去した藤岡諭君の真知子夫人の玉稿も貴重な彩りを添えてくれた。

締め切りぎりぎりのねじ込みは佐渡から届いた。萩原荘平君が主宰する手稲句会の一行が、在寮時に「サドシン」の愛称で親しまれた松栄（旧姓・山本）新君を訪ね、吟行を催したもので、同人たちの作品を写真付で掲載した。

編集会議は計12回に及び、ゲラは5回点検した。読むたびに往時を思い起こし、目がうるむのを覚えた。おこがましいことであったが、誤字、脱字を正したほか「読むひとたちにより分かりやすいように」と編集委員たちが話し合い、いささか手を入れた原稿はゲラを筆者たちに届け、確認、了承してもらった。

表紙は西沢郁夫君が在寮時に描いていた懐かしの寮舎のスケッチに決め、収録は45人の51編の文章、19点の写真と１８７人の名簿一覧を合わせ98ページになった。

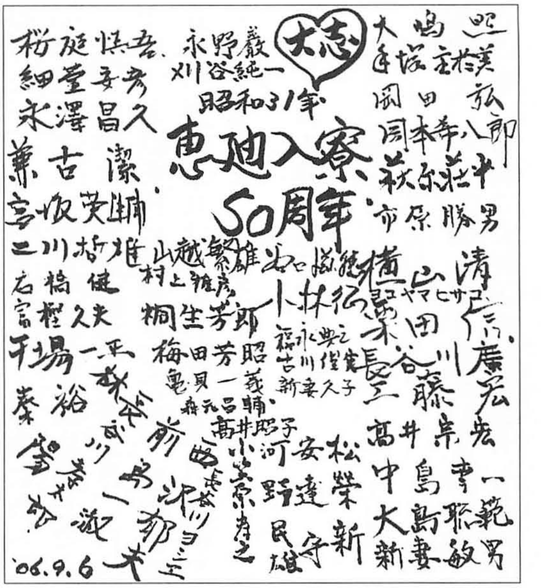
最終段階で、製作費用を賄う頒布価格のメドをつけるため、表紙と目次のゲラを添えて予約注文を受け付けた。予約部数は当初、厳しいものだったが、あまり高いと入手しにくい点を斟酌して頒布価格を４９００円に設定。赤字分は編集委員たちが負担することを覚悟しつつ、「余裕のある方々には寄付をお願いしたい」との文書を差し上げた。

しかし、予約受け付けが進むにつれ、予期せぬ状況が生まれた。販売部数が１００部を超えたのだ。うれしい誤算で、その収入だけで各種経費をカバーできる見通しが立った。寮友64人から申し出のあった寄付金32万６４００円は深い感謝の気持ちを込め、現金書留や切手でそっくり返すことができた。

全体の収支決算は、札幌での祝賀会の席上、会計幹事の手塚君から報告した。

先輩・後輩や図書館へ献呈

最終的に発行部数は２５０部に決定。寮友への頒布のほか88部を寄贈分とした。謹呈先は冒頭に記した角幡さんら恵迪の先輩たちや後輩諸君、さらに北海道立、札幌市立図書館、新聞、テレビ各社へだった。先輩には「輝かしい恵



迪の伝統に連なるよう導いていただいたこと」、学外の人々には「往時の放歌高吟やストームを寛恕してくださったこと」への感謝を挨拶状に込めた。

こうして、若き日の恵迪寮での出会いが生涯の宝物であることを改めて確認するとともに、鮭の母川回帰のように、半世紀を経て寮友たちが文集を手に札幌の地に総結集することができた。いま、記念行事の一端を担うことができた喜びをかみ締めながら、ご協力いただいた皆さんにお礼を申し上げたい。

そして、文集作りの仲間は、その後、これまで交遊のなかった首都圏在住の寮友たちへも再会の輪を広げ、札幌の宴の後、東京・銀座、横浜・中華街、そして鎌倉の梅見と毎年集いを続けている。同期生の絆の強さは揺らいでいない。

古稀すぎて　かく会ふべしと思ひきや
命なりけり恵迪の友

青空の中に早梅さがしあて

◇

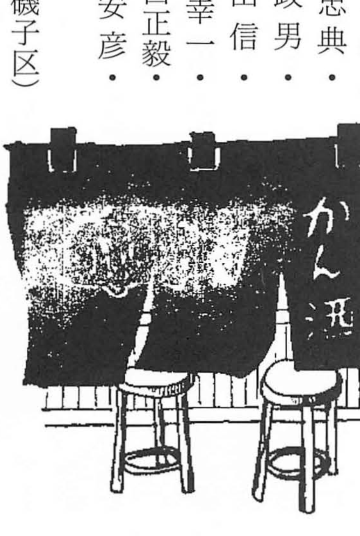
私たちの入寮50周年同期会の1年後、恵迪寮百年記念祭が札幌で多彩に開催された。開識社の講演会や「都ぞ弥生」の大合唱に参加しながら私は、その感慨を漢詩に綴った。それは早世した山下弘樹君――まさに寮歌オンチで鹿児島出身の詩人だった寮友の魂へ捧げるものだった。彼が逝って12年である。

憶恵迪寮百年記念祭（恵迪寮の百年記念祭に憶う）
百歳享名懐尚新（百歳の名を享け懐いなお新らたなり）
紅顔往昔正純真（紅顔の往昔まさに純真）
巡房半裸酔狂乱（房を巡る半裸酔いて狂乱）
高唱寮歌仰北辰（寮歌高唱して北辰を仰ぐ）
合掌

《記念誌編集委員会》

委員長＝桜庭慎吾▽委員＝石橋健・伊藤忠典・岡田弘・梶浦政男・久保治良・栗田信・手塚主於美・中島幸一・萩原荘平・秦裕・樋口正毅・古川俊実・細萱安彦・前島一淑・松栄新

（横浜市磯子区）



涙……恵迪寮の思い出

佐々木　宏　治
（S42年入寮）

昭和42年春、私は宮城県の片田舎から青函連絡船と列車を乗り継いで、住むところも決まらないまま、札幌駅に降り立った。チッキで駅留めにしておいた蒲団を担いで、恵迪寮に向かった。恵迪寮に入寮が許可されていたわけではないが、仮宿というものがあり、住むところが決まるまで、1日100～200円で泊めてくれた。当時、新しい寮規則の問題で大学当局と寮自治会が対立しており、恵迪寮と女子寮の自治会委員長が無期停学中であり、入寮選考も大学側と自治会側が別々に実施した。私は両方の入寮選考を受けたが、どういう訳か、大学側に落ちて、自治会側に受かり、そのまま晴れて恵迪寮の寮生となった。

私とは逆に、大学側選考に受かり、自治会側に落ちた学生は、蒲団を担いで寮に来たが、自治会執行部に追い払われた。逆であれば、私の恵迪寮での生活や友人との出会いもなく、大げさにいえば人生が変わっていたかも知れない。

ズーズー弁も気にならない

寮は部屋ごとにサークルとなっており、私は誘われるまま、「歴史学研究会」というサークルに入った。部屋は5人部屋で、一番北側にある新寮の1階の端、60号室で冬は猛烈に寒い部屋で栄養状態が悪かったのか足が冷たく長靴を履いて寝たこともあった。私は東北出身で言葉がズーズー弁で、コンプレックスもあったが、同室者は北海道、神奈川、岡山、愛知出身で様々な言葉が飛び交う中で、いつしか気にならなくなっていた。

1週間に2回ほど、部屋のサークルで、著者は忘れたが確か「歴史とは何か」「鎖につながれた巨人」と言う岩波新書をテキストに勉強会があった。順番でチューターを決めて、解説をしていくのだが、どのような内容であったかは全く覚えていない。ただ、このような生活の中で「俺も大学生になったんだ、恵迪寮に入ったんだ」と言う感慨を強く感じたことを今でも奇妙に思い出される。私は政治や社会思想といったこととは無縁の高校時代を送ったので、寮生が日常、政治（当時中国で文革の最中であり、日本では70年安保改定が迫っていた）や唯物論だ、観念論だ、弁証法だと雄弁に語るのを見聞きし、心底驚き、そして刺激を受けた。

川越さんの金魚を食べる

そして、当時の多数の学生とたがわず、私は自治会の運動に参加するようになった。1年生の終わりには恵迪寮自治会の執行委員となり、炊務を担当して、余った晩飯の夜食販売（呼び方があったがどうしても思い出せない）などの仕事をした。その時期はちょうど冬の真最中。炊務委員会の部屋は昼間は栄養士さんの川越さんがいるためストーブがあり、夜は委員会のメンバーが集まり、会議や作業をした。その部屋で川越さんが金魚を飼っており、毎日えさ

をやるなど可愛がっていた。ある晩、3、4人の委員会メンバーが集まり、作業していたが、副委員長の佐藤廣君(彼は責任感の強さ故に一昨年、非業の死を遂げた)が「腹減ったな、金魚焼いて食うか」と言い出し、我々もいたずら心から「そうだ」と同調、ストーブの上で金魚を焼いた。当然食べるところがほとんどなく、ストーブの上には焦げた骨だけが残った。翌朝、川越さんが出勤してきて、金魚の骨を発見、大騒ぎとなり、我々は平謝りで、過ぎたいたずらを反省した。

このようなバカなことや、大マジメな議論（多分、当時はそう思っていた)、観桜会、観楓会、ジャンプ大会、そして、程々の授業出席のうちに、1年半は瞬く間に過ぎ、函館の水産学部への移行の時となった。

水産類寮生の追い出しコンパは寮の食堂で開催され、その後、恵迪寮から、大学の中央道路を寮生のつくる騎馬に乗せられて、札幌駅まで行き、ホームで「都ぞ弥生」、「水産放浪歌」そして「別離の歌」で送られた。汽車は11時過ぎ発の「急行樽前」でまだ蒸気機関車だった。

蒸気機関車の汽笛が鳴り、その中で皆と肩を組んで寮歌を歌っていると、どうにも耐えられなくなり、涙がとめどもなく流れた。私は泣き上戸でもなく、涙腺の緩いほうでもない。

なぜ、あの時に人前も憚らずに泣けたのか。あれから40年、うれしいこと、悲しいこと、様々あったが、私はあれほど泣いたことがない。

（札幌市南区）

還暦の寮友　また会おう

畑　博
（S42年入寮）

寄稿にあたって、私自身は昭和41年に入学をして、1年あまりで4回の引越しを繰り返し、昭和42年入寮の銓衡で晴れて恵迪寮に入寮した経緯があることをお断りしたい。大学の学問の内容に失望したと同時に勉学に身が入らず、昭和42年も大学1年生を経験した。したがって、新入学で直ちに入寮して新鮮な寮生活を満喫した寮生たちとは1年遅れで入ったこともあり多少ともなじめない一面もあったのかと思われる。寮生活の日々の詳細を語ることができないのは残念であるが、資料としてはすくないながらも、当時を思い出すものとして私の手元に古い領収書が残っていた。

昭和43年6月の領収書から食事の値段は、朝食30円、昼食50円、夕食65円であった。欠食は朝10回、昼0回、夕食5回となっている。経常費1215円　寄宿舎費100円　保健会費10円　寮連費25円だ。

寮生活は眠る場と眠りから覚めると食事を取る場ということであったような気がする。

朝の欠食は当然、授業に出る体制ができていないことであり、腹が減っては生きていけないことから昼飯はきちんと取っている。夕飯の時間に帰らず、欠食も5回も。

現役であれば18歳か19歳で寮生活は卒業であるが、前述

のごとく1年長く教養課程をおさめたために成人の日は恵迪寮の玄関前で写真を撮っている。

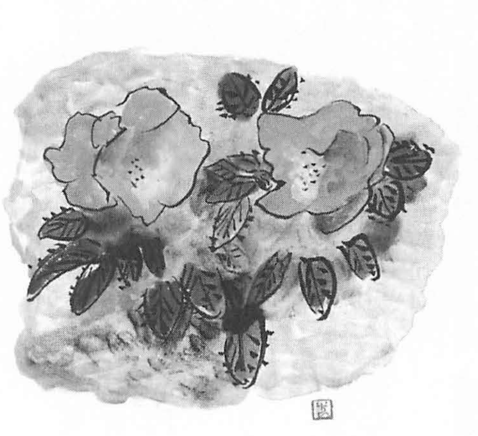
あれから40年が経過した。40年前の昭和42年の入寮は前年の6月の新寮規則決定のあおりから、3月の寮生による入寮銓衡を新寮規則違反として寮長無期停学処分公示。4月に入寮銓衡が大学当局と寮生で別々に実施された年である。

昭和44年には教室封鎖や機動隊導入など、学園はゆれて怒涛のごとく社会に飲み込まれるように、会社のために身を削り40年前の恵迪寮時代をなつかしむ暇もなかったことだろうと思われる。残念ながら昨年9月に開催された恵迪百年記念祭に参加した昭和42年入寮のメンバーは私一人であった。

いずれにせよ、現役で入学した寮生は還暦を迎えた年でもあり、定年を迎えて学生時代を振り返る時間を持つことができるようになればと思われる。

今回の寄稿は40年を迎えて、40年前のメンバーでの記念行事を企画してのPRをとのことも目的の一つと編集を携わる委員より聞いていたが、その見通しは今のところたっていない。恵迪寮のホームページ(http://www.keiteki-ob.jp/)が開設してあるので、各地で活躍している同窓生の一端でも情報を送ってほしいと思っている。こうしたことで寮生活のことを語り合える機会の機運がみえてくることを期待したい。

（札幌市北区）



特別寄稿

林文平、薫及文平会　始末記（その2）

四方　英四郎
（S19年入寮）

寮史にも残る　その功績

明治40年恵迪寮の発足と同時に、園芸部（里正義主任）、畜産部（小熊捍主任）を設け、寮生は必ず何れかの部に属し開拓精神を涵養すべきとした。これらの部は後に畜産蔬菜部となって大正14年休止される。

そして昭和17年12月6日、生活部に畜産園芸掛を創設し記念式典が行われた。寮史第二巻に、これは林文平農学部助教授の助言、提案によって創設されたこと、休止していた畜産蔬菜部を復活させ、先人の開拓精神を引き継ぎ、戦時下の自給体制を整えると記されている。文平会は林文平助教授の六畳間を訪れた人々の会である。

文平さんは、大正2年恵迪寮に入寮、大正11年北大農学部畜産学科卒業後、農林省月寒種羊場に勤め、昭和初頭に母校に戻り、後に農学部付属農場の畜産部助教授として、第一農場事務所2階の研究室で、ひとり動物発生遺伝学の研究に専心された。お住まいは第二農場正門西側の官舎で、恵迪寮生との交流が深まったのは、第5期幹事会（昭和17年度）の頃のようである。「恵迪」創刊号の「四方記、文平会始末記」の前の頁「村山正郎氏、昭和十六年入寮同期の二つの集まり」の方々である。

寮生のオアシス　不休庵

当時の寮幹事、特に生活部幹事や畜産園芸班員は、その設立の経緯や、文平さんの指導を受けて寮裏の畜舎（北溟庵と称した）で豚、鶏を飼育して、寮生に肉、卵を供したこともあって、文平さん宅を訪れることが多く、夜が更けるまで六畳間で文平さんと薫夫人を囲んで人生を語り、自由な談論を楽しんだのである。当時は戦中、戦後の極端な食糧不足の時代であったが、薫夫人はなにがしかの手料理（時には一切れのお漬物やお薯だけのこともあった）を供して下さった。家を離れ空き腹の若い寮生にはその温かいおもてなしを終生忘れることが出来ないのである。このようにして、友人を誘っての訪問も次第に多くなり、六畳間に人の絶えることがなかった。昭和29年の不休庵（文平さんは六畳間をこのように称した）住所録には83名の名前がある。

昭和29年、すでに社会人となった会員を中心に、還暦を迎えた文平さ

旅の疲れも癒えて、六畳間の歓談
（昭和29年12月5日、前列中央、文平さん、同右薫夫人）

んと夫人を17日間（10月26日—11月11日）の旅にお招きした。この旅でご夫妻は、会員の家族ぐるみの歓待を受け、東京や会員家族との箱根旅行、そして大阪ではこの世で唯一残された肉親、姉の臨終に遭い、その後30年ぶりにご夫妻の故郷・徳島で旧友との邂逅を楽しみ、帰路は羽田からプロペラ機で強風雪の中帰札された。この姉については後年、「一老教授の憶出」（あるてりや17、1960）の中で「たった一人の此の愚弟を此上なく愛してくれた、そして信じてくれた。……我心の糧となっている」と述懐している。その上、両親の厳しい教えと愛情への思い、長兄・鶴一（東北大学教授、著名な数学者）の励ましと、学問や研究の尊いことを身をもって教えてくれたことに、追憶と感謝の思いを書き綴っている。

「北大に在りし日…助手として研究生活に入り、文字通り研究者としてはあらゆる辛酸を幾度かなめさせられた。しかし、世界は広い、小熊捍教授（理学部長、低温研所長、国立遺伝研所長、文平さんは生涯の恩師と仰いだ）、理学部牧野佐二郎教授（日本学士院賞、同会員、両教授とも北大の誇る細胞遺伝学者）は、絶えざる鞭撻とご親切な指導を与えて下さって、当時の遺伝関係の諸先生は私に支持と声援を与えて下さった」

〈孵卵器にとりくむ耳に文平サン：　恩師の声の高くとどきて〉
文平散人（あるてりや18）

昭和31年文平さんの北大最後の年、畜産園芸班（北溟会）の集まりに贈った言葉、「……此のめぐまれた、自然の中に、科学への憧憬と研究への情熱に、唯ひたすらの道を歩いた四十年。悲しい日、寂しい時、いつも我心を慰めてくれたのは、手稲連山、藻岩山並、校庭の楡の大樹であった。又ポプラの並木路に静かに朝夕の散歩することであった。或いは又石狩平原を恵迪寮の北側から、春夏秋冬と、四季の変遷を眺める時であった。

〈ひと本のポプラの木陰、我が生を楽しみし処〉

先日三十年勤続の表彰をうけたのでもうよかろう。明春は勇退する……」

文平さんが北大を退職した昭和32年の文平会住所録は140名である。その時、居（不休庵）を琴似に移されたが、時の寮生が、リアカーで引っ越しを一週間手伝い、会員は新居にソファーなどを寄贈した。

〈蝶の窓ソファーのあるじすこやかに〉
〈初蝶や新居の門に佇にけり〉　薫

一路真実に進む者は幸せなり

北大退職後、若い頃よりご親交が深かった大野精七学長の札幌医科大学進学部で教鞭とられた。医大での忍路湾の生物学実習は文平さんにとって格別の思いがある。同じ「一老教授の憶出」の中で「学生として生まれて始めて、ウニの発生実験をやったのは、四十年余も前であった（この時、小熊先生の指導を受けた）。そして生物学担当者として、此の長年月の後、二度目の忍路湾に今秋、忍路湾の風物に接した。又感慨も一入である。……私は私なりの人生に

幸福であり度い念願の一部も果たし得た様な気がする。人生は唯一路真実に進むことである。そして常に若い者に語った。〝科学に芸術に恋愛に唯一路真実に進む者は幸せなり〟……」

〈四十年の忍路の秋も変わりなく〉

〈秋深し窓の紅葉も顧みず　顕微鏡下の神秘さぐりぬ〉

文平散人（あるてりや17、18）

昭和37年7月28日、文平さんは68歳で亡くなった。葬儀委員長は大野精七、友人代表は町村敬貴（江別の町村農場とは深い親交があり、敬貴氏とご親族には永く文平会員としてご支援を戴いた）であった。

文平さん亡き後、薫夫人が会員に送ったお礼の一節に「人間の年齢に致しましては古びて倒れるとも惜しからぬ命ではございましたが、余りにも恵まれざる生涯でしたので、日々歩み来ました過去を振り返っては涙しております。……貧しき学究でした主人はいきな歌一つ覚えることも出来ませず、思いあまる時はお腹の底からしぼり出すような大声で寮歌をどなり、研究がうまくはかどりました時はおだやかな声で語尾を長く引きいかにも楽しそうに歌います。この歌声によって私は其の日の主人の天候を知り湿度を推し食事の献立をととのえます。子供も無く二人限りの寂しき者には毎日の食事が何よりの慰めでございました。自然を愛し、散歩を好み、文学を趣味とし、若い方達との心置き無き語らいを何よりも喜びました。最後までお若い卒業生の方、学生さん達に可愛がって頂きとても喜んでおりました。」。学問一筋の文平さんを支え通した夫人の悲しみである。

その後も不休庵の薫夫人を訪れる人は絶えず、お子様もない夫人を会員皆で支え通して、昭和42年7月2日、65歳の薫夫人も文平さんのもとへ逝かれた（大野公吉葬儀委員長、精七氏子息）。

文平会は、ご夫妻の残されたものをお預かりして、北大寺の納骨堂に毎年の命日の供養、薫夫人の永代供養、二十三年忌供養(札幌)、三十三忌に文平先生ご夫妻を偲ぶ会（東京）、同供養（札幌）を行って、その時の会員は94名でした。その後、北溟会の集まりを平成16年6月16日東京で開催しました。そして現在の生存会員は72名です。

昨年、ご夫妻のお骨をあと20年間北大寺の納骨堂に今のまま残して頂くようにお願いしました。また、文平さんが生前ご縁のあった所に、その名を残して頂きたく、北大フロンティア基金、札幌医大と、恵迪寮百年記念に寄付を致しました。これまでの永い絆を考えると、「林文平、薫及文平会」の名が一番ふさわしいと思います。

特に恵迪百年記念号にその名を刻んであげたかったのですが、残念ながら手違いで次号になり、この始末記（その二）を書くことになった次第です。しかし、そのことによって、戦中、戦後の騒乱の時代から平成の今日まで、恵迪寮を中心とした若い学生と文平さん夫妻との温かい心の交流が続いてきたことを書き残すことが出来ました。

（北大名誉教授・農学部）

寮史研究 1

「文武会ストと恵迪寮の移転」

昭和初期の恵迪寮（上）

河野民雄
（S31年入寮）

はじめに

十数年前、高校時代の恩師松田繁先生がクラス会の席で「自分は北大工学部在学中、学生運動をやって投獄された」と告白された。その後詳しい話を伺う機会がないままに、先生は亡くなられた。最近になって、先生が関わった事件について調べ始めたところ、治安維持法下の北大で展開された学生の抵抗運動の輪郭が明らかになった。そこで、昭和初期の学生運動と恵迪寮の関連について、二回にわたり紹介したい。

ストのきっかけは新入生歓迎会

１９２８年（昭和3）５月、文武会学生委員は新入生歓迎会の持ち方で学校当局と大いにもめていた。北大文武会というのは１９０１年（明治34）以来の歴史のある会で、学生や教授陣が全員加盟し、学芸会（文化系クラブ）と遊戯会（体育系クラブ）を後援するための校友会であった。

当時の北大は予科のほか農学部、工学部、医学部、土木・水産専門部、農学・林学実科で構成され、理系学部だけの学生数２０００名を少し超える大学であった。これら、全ての学部・学科を結集したのが文武会であった。会の上層部には名目的に教授が就任していたが、本部委員には学生代表が参加していた。これまで学生委員は前任者の推薦で決められていた。ところが、大正デモクラシーや普選の影響もあって、公選にすべしとの声が高まり、この前年11月ついに公選が実現した。

この公選学生委員が始めて企画したのがこの年の新入生歓迎会であった。最初学生は歓迎園遊会を植物園で開催することを望んだが大学側に反対され、結局構内の第二農場で5月14日開催に決まった。園遊会には酒やビールも出される予定になっていた。ところが、熱心なクリスチャンであった予科英語教授高杉栄次の抗議で、歓迎会実行委員長の中島九郎教授や学生監も認めていたはずの飲酒が、文武会会頭である佐藤昌介総長により禁止された。これが騒動の発端だった。

一部の新聞はきっかけがきっかけだけにこの問題を面白おかしく報道した。しかし、当時農学部学生だった救仁郷繁は、後に『北大文武会事件の回想』でこう反論している。「確かに北大生はのんびりと暮らしてはいたが、ビール問題だけで多数の犠牲者を出してストライキを起こすほど愚かではなく、この事件はその日まで積もり積もった学生の不平不満が破裂した発火点だったにすぎない」と。

学生の不平不満は何だったのであろうか。金融恐慌の不景気の中で昭和を迎えると、大正デモクラシーと国際協調

から一転してファシズムと軍国主義へと時代は進んだ。1925年(大正14)、治安維持法が制定されてからは学生に対する大学の思想統制が一層強まった。北大でいうと、1928年（昭和3）の三・一五事件の後、農学部農業経済学科の学生を中心に結成された「読書会」に解散勧告が出される騒ぎが起こった。

「読書会」の前身は大正末に結成された社会科学研究会(略称社研)で、マルクス主義を中心に社会問題を研究し、学生社会科学連合会（略称学連）に属して活動していた。しかし、治安維持法による最初の弾圧である京都学連事件の余波で解散させられ、その後を受けて1927年に再建されたのが「読書会」であった。大学当局は学内のバランスをとるためか「読書会」だけでなく、学生の右翼団体「興亜学会」にも解散の圧力を加えたため、左右両派の学生の反発を招き、期せずして両者の共闘体制が出来上がった。

軍国主義化の波は1925年、中等学校以上の学校への軍事教練の導入という形で大学に押し寄せてきた。学連はこれに猛反対し、特に小樽高商では大規模な軍教反対運動が起こった。北大では社研の学生以外の組織的抵抗は起きなかったが、予科生はふざけ半分、サボりながら教練に参加することでささやかに抵抗した。学内諸団体への圧迫や軍事教練の開始によって、多くの学生は国や大学当局の強圧的やり方に対して素朴な反発を抱くようになっていた。

飲酒問題がきっかけで歓迎園遊会は中止となり、23名の学生委員はその責任を取って総辞職した。5月15日、中央講堂では園遊会の中止、学生委員辞任の説明会を開催した。この席で「読書会」のメンバーが中心になって学生大会への切り替えが提案され、大学の措置に抗議し、言論・集会や新聞に対する検閲の撤廃を決議した。新たに26名の実行委員を選出し、文武会の自主化、実行委員会の自治機関化を目指して文武会の会則改正に取り組むことになった。園遊会問題は北大民主化運動に発展したわけである。

この運動を主導したのは農業経済学科の学生を中心とする「読書会」の面々であった。学生実行委員と大学側の会則改正起草委員会との間で、この年の秋にかけて文武会の自主化などを巡って協議が重ねられることになった。

ついにストを決意

夏休みは学生の運動に不利であった。休みが明けて秋も深まった11月末、学生のほとぼりが冷めたのを見透かすように、大学側は従来とほとんど変わらない内容の文武会規則改正案を提示した。学生は予想外の結末に大いに憤激して、この問題の報告会を中央講堂で開催しようとしたが、新設の学生主事はこれを拒否した。11月30日、やむなく学生は中央講堂脇のクラーク像のある広場で屋外集会を開き「文武会の解散」、「学生主事の横暴糾弾」、「言論の自由」などを決議した。この夜大学評議会は集会の報告者前田英彦(工学部3年)の放学処分を決定した。前田は卒業3か月前であり学生は大学の横暴に大いなる憤りを感じた。

12月1日、農業経済学科学生は集会を開き、前田の復学を求めてストライキを行うこと、復学が認められなければ全員が退学することを決議した。同月4日クラーク像前の屋外に学生が集合し「前田復学、実行委員支持」を決議。

この集会のとき右派で文武会の学生側の実質的委員長、この日の議長にも予定されていた井上実が闘争から脱落し、ちょっとした波乱が起こった。急遽山田真人が議長に選ばれ集会が開かれた。集会終了後、数百名の学生は中央講堂前から大学本部に向けて行進し、その後正門近くの学生ホールに籠城し、代表が大学本部で決議文を手交するが拒否され、ついに学生たちは同盟休校を決議することになった。

翌5日は雪であったが、学生はストに突入した。事情が分からず登校した人もいたが校門に控えるピケ学生の誘導で、続々と工学部の北に新設されたばかりの野球場で集会を開き、12月いっぱいスト断行を決議した。大学は学生主事を動員して集会の解散を命じ、ついに警察官がトラックに乗って駆けつけるものものしさであった。集会は整然と行われ最後には「都ぞ弥生」の斉唱が自然に沸き起こった。全学2000名の学生がこぞってストに突入するなどというのは、戦後の60年安保の時代ですらなかった画期的出来事だった。

ただ、大学はスト当日、前日の大会の中心人物とみなした山田真人(農学部2年)、西條寛六(同1年)を放学処分、東弘(同3年)を停学処分にすると発表し、力づくでストを押さえつけようとした。ついで7日、大学は予科3年生の芳野俊行を除籍、同じく淡谷忠一を停学処分にすると発表、学生たちの怒りの炎に油を注いだ。

恵迪寮ストからいち早く脱落

当時全国的に大学や高校で紛争が発生し、スト騒ぎが起こっていた。しかし、首都から離れているとはいえ、当時七つしかなかった帝国大学の一つで大規模ストが起こっているということで、東京の各新聞も連日このことを大きく報道した。文部省もこの動きに憂慮を表明し、恐らく大学に対して早期のスト収集を厳しく督励したものと思われる。

ストに入って5日目、佐藤総長は10日から3日間の休校を決定し、総長訓示を学生宅に郵送した。その概要は、「文武会会則改正に端を発する騒ぎで、学生と意見を異にして対立したのは遺憾であるが、これに乗じ数人の学生の煽動行為があったため処分したが、学生の本分に立ち返り、速やかに学業に復帰すべし」といったものであった。これがきっかけで学生の足並みが乱れ始めた。救仁郷繁の推測では、先ず土木専門部が崩れ、次いで医学部や水産専門部、予科の恵迪寮生や工学部学生がストから脱落したという。恵迪寮の脱落の経緯については次のようなものであったという。

恵迪寮では、寮務部長古河勝夫はかねてから寮生に対し、各自の思想は自由であるが、まどいの場である寮内に抗争を持ち込まぬように訴え寮の平静化に努めていた。

他方、寮委員長前田登は学校側に説得され、一存で寮生の盟休中止を約束してしまったため、委員長の独断に対し非難の声が上がったが、寮生は友情の見地から委員長を許すことになり、寮は真っ先に盟休から離脱した(『北大百年史』・部局編)。これを裏付けるように『北大新聞』は次のように報じている。

「十日より三日間休学を宣した学校側においては、休暇明

けの十三日までに必ず登校を促すべく努力し、水産専門部及び恵迪寮に向かって最も力を尽くした」。

また、当時予科農類1年生の恵迪寮生であった須田政美は当時を回想して次のように述べている。

「自主的な寮生大会はもたれなかったように思うが、当時の全寮委員長前田登さんが単独で招集した寮生大会で、委員長がスト中止のアピール演説のような熱弁をふるった一幕もあった。寮生、とくに各運動部の上級生たちがかなり野次って、流会の形で終わった。印象に残っているのは野球部の浜田正太郎さんなど、前で委員長にすごい剣幕で食ってかかったことでした。〈中略〉二学期末の試験がなくなることも単純な予科生の期待でもあった」（救仁郷・前掲書）

同じ釜の飯を食う仲間とはいえ、所詮は寄り合い所帯の寮で学生が一致結束するのは困難であった。ましてや委員長が独断でストからの離脱を決め、それを友情で認めるところに単純で馴れ合い的な寮生気質があらわれている。

相次ぐ脱落でストの続行は無理との判断で12日夜、ストの中心であった農学部も涙を飲んでスト中止を決議した。これにより12月5日から丸8日間続いたストは終息することになった。スト中止後は学生の復学、文武会の自主化、会則改正などは全て頓挫してしまった。救仁郷繁が述べたように、「それ故に、ふたたび文武会解散と言論研究の自由を要求する第二次文武会事件が、１９３２年（昭和７）５月に起こり、多数の北大生が特高警察に逮捕されることになる」のである。第二次文武会事件については次回に詳しく述べることにする。

寮の移転と自治権侵害に反発

１９３１年（昭和６）１月、大学当局より恵迪寮の移転が突然発表になり寮は大騒ぎとなった。北大が北一条付近から現在地へ移転したのに伴って、寄宿舎が元理学部前に建設されたのが１９０５年（明治38）。１９０７年（明治40）にはこの寄宿舎は「恵迪寮」と命名された。最初は南寮、北寮の2棟で、予科と本科生が同居していた。その後学生の増加とともに中寮と新寮が増築され4棟になり、１９２２年（大正11）からは予科生のみの寮となった。

何故急に移転話が持ち上がったかというと、当時大学は法文学部設立を目指し政府に予算要求をしていたが、折からの緊縮財政で認められず、寄宿舎移転の予算のみついてしまったからである。それで急遽新年度からの解体移転を計画し、四月からの一時閉寮を決定した。移転予定地は８００㍍北北西の農場放牧地であった。驚いた寮生は抜き打ち的移転通告に抗議し、早速対策委員会を設置した。

当面の要求は「寮を中絶しない事」「建設地を遠隔地にしない事（彼らの希望地

はポプラ並木西側か理学部裏手」であったが、前者は認められたが後者は却下され、4月末には一旦閉寮された。ちなみに、このとき作られたのが「別離の歌」で、学生の間で送別の席などで必ず歌われる曲になった。歌詞の一節に「春秋ここに二十六」とあるが、北1条から理学部前へ移転して26年目にさらに北へ移転となったわけである。

北17条西8丁目に新しい寮がほぼ完成したのが10月末。下宿生活を余儀なくされた寮生が入寮を待ちわびているのに、大学は入寮許可に手間取っていた。その間の事情を「北大新聞」（昭和6年11月1日付）はこう伝えている。

「今度の寮改築と共に当局では従来の自治寮に加えていた監督権を更にこれを機として拡大せしめんとする意志をもち、具体的には寮舎監の常置、常時消灯点灯の制を企画している」。

新しい寮の建設を機に大学が寮の自治権を制限しようとはかるのは、昔も今も変わらぬやり方である。「別離の歌」の出だしは、「高遠（たかき）を誇る自治寮よ」である。この言葉には危機に瀕している自治寮の行く末を案じる気持ちが込められていた。

自治権の侵害を何とか食い止め、ようやく11月末には新しい寮での生活が始まった。『恵迪寮史』によると新しい寮に満足した学生が多かったが、「不要な学生主事室の存在」「玄関入口の巡視室の厳しさ」「廊下の高い窓」の三つが不満であった。最初と2番目の不満は大学が寮の管理を強化するための処置であり、3番目の不満は、いわゆる「窓ション」ができなくなったことを意味する。

自治権を巡る寮生と大学の対立が一段落したかに見えた1932年（昭和7）春、大学はまたまた寮の部屋定員を4人から3人に削減すると言い出した。寮生たちは「寮の定員に大幅削減を加え、実質的に自治寮の規模と力を縮小」（『恵迪寮史』）させるのではないかと猛反対した。万一寮生の要求が受け容れられない場合は総退寮の決意で大学と交渉した結果、大学は定員削減を撤回した。

そして迎えた1932年（昭和7）4月19日、問題の事件が起こった。この夜恵迪寮では新入寮生の歓迎会が行われた。歓迎のコンパが終わった後、一杯機嫌のフンドシ姿でスキー片手に恒例のストームを行った。このとき、中寮の玄関の近くにあった学生主事室の扉が壊された。酒に酔っての偶発事故とも考えられるが、大学は計画的破壊とみなした。多分学生課は壊した人物は申し出よと強く要求し、寮との間で激しいやり取りがあったと思われるが詳しいことは分からない。

最終的に事を起こしたのは中津山正二、林達男、堀俊郎の三人の寮務委員であるとされ、10日間の停学と退寮処分が下された。この事を報じた「北大新聞」は、検閲のため記事の一部が削除され白紙であった。これを知った大内敏孝らの予科の生徒は、中津山らの処分は不当だとするビラを教室に貼り出し、学生課との間で緊張する場面があった。些細な出来事ではあったが、この次に起こる大事件の予兆でもあった（堅田精司『北海道社会文庫通信』）。次回ではその大事件と寮の動向を述べることにする。

（札幌市清田区）

寮史研究 2

「住民票事件」の寮史記述に誤り

沼田　久（S26年入寮）

昭和27年7月、恵迪寮で「住民票事件」が発生しました。それについて「恵迪寮史　第二巻」（452ペー）には、次のように記述しています。

『七月五日、この当時住民登録の法律の制定が、若者の再徴兵の準備だということで問題とされ、学内でも反対運動が盛り上がっていた。恵迪寮でもこれに反対の立場であり、ほぼ全寮の一致で全員の住民票を警察に渡すわけにはいかないと言うことで焼却した。これに関連して、どこのものかは不明であるが、ある住民票を強奪した五人の学生活動家が寮内に逃げ込むという事件が起こった。警察側は寮への立ち入りも辞さない態度であったため、深夜まで寮生大会を開いて討論したが、結局五人の学生活動家を警察に引き渡すことになった』

ところがこの記述は全く事実と異なるため、左記のような訂正文を作り、今後頒布する「第二巻」に貼付するか、今後寮史編集が行われる際には正式に訂正されるよう、関係方面に強く要望します。

「恵迪寮史　第二巻」452ペー、13〜18行目の記述訂正文

『住民登録法が七月一日から施行されることに対し、これは徴兵制の準備だと主張して住民票提出阻止運動をする勢力があり、寮委員長に対しても内外から強く働きかけていた。六月二十九日、寮生大会で「住民登録票を提出するか否かは各人に任せる」と決議した。七月五日午後遅く、寮内で住民票を回収していた札幌市役所幌北出張所長が、寮内に入って来た提出阻止派の寮外生五人に、回収した住民票を強奪された。騒ぎを聞きつけて集まった寮生多数が、強奪行為は寮自治の侵害だと主張し、寮外生と口論になった。委員会は寮生大会を招集、午後七時半過ぎ開会。寮外生五人は最後部の席にいた。大会は深夜まで及んだが、寮外生代表の意見表明も聴いたうえで、「寮自治を侵害した寮外生を寮外に退去させる」と決議した。寮から出た五人は、寮を包囲していた武装警官隊に逮捕された。口論の間に脱出した所長が警察に通報、警察は学生部に通知、待機していたものと思われる』

平成20年3月6日
要望代表者
第百四十五期委員会委員長　澤正雄（S26年入寮）
第百四十六期委員会寮務部長・中瀬篤信（同）

記述内容の検討

①「恵迪寮でもこれに反対…全員の住民票を警察に渡すわけにはいかないと言うことで焼却した」ことが事実でないことは6月29日の決議で明らか。また住民票の提出先は市町村役場であって、警察ではない。

②「ある住民票を強奪した…活動家が寮内に逃げ込むという事件」

当日まで学外での住民票強奪事件はなかった。それに寮外の住民票を奪って寮内に逃げ込んだなら「寮自治の侵害問題」として寮生と争いにはならなかったはず。この日の「強奪」は寮内での事件だから、警察に追われて逃げ込むような事件でもなかった。

③「警察側は寮への立ち入りも辞さない態度であったため、深夜まで寮生大会を開いて討論…」

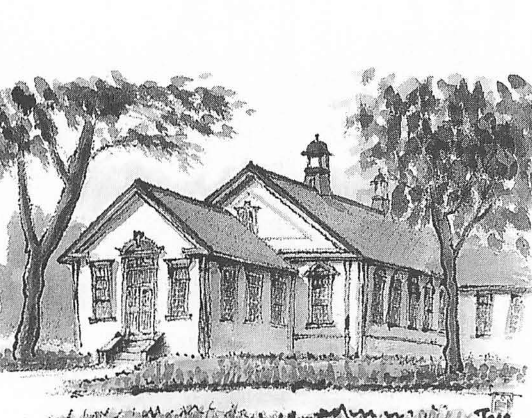
寮生大会は、警察の「立ち入りも辞さない態度」を知って開いたのではない。五人の寮外生に対して寮自治侵害の責任を問うための大会だった。警察の強硬態度は、大会開催中に学生部から委員長への電話連絡で知らされた。学生部も、警官隊を学内に入れないよう努力していたことは確か。さらに「武装警察官が寮を包囲している」ことを寮生たちが知ったのは、寮生大会も後半になってから。

④「寮生大会を開いて討論したが、結局五人の学生活動家を警察に引き渡すことになった」

大会決議の要旨は、「恵迪寮の自治を侵害した寮外生５人を寮外に退去させる」ことで、「警察に引き渡すことになった」は曲解である。

⑤寮から出た彼らは、包囲していた武装警官隊に「結果としては」逮捕された。早期に逃げ出せば警察に捕まらずに学外へ逃れ得ただろうが、何かの事情があったのか、逃げ出そうとはしなかった。また、寮生大会では最後部の席に座っていた彼らの代表者に長時間、意見表明の機会も与えた。

（札幌市西区）



変わりゆくもの、変わりなきもの

第290期執行委員長　竹内　進
（H17年入寮・法学部3年）

先日追いコンが開催され、今年卒業される寮生達と盛大に、日が昇るまで呑んだ。永らく生活を共にした寮生達がこの寮を去るのは、いつでも寂しいものだ。特に今年は私の一つ上の学年が多く卒業したので、関わりの深い人が多かった。寂しさと同時に、もう自分がこの寮にいられるのもそう長くない、やり残しの無いよう一日一日を大切にしようと改めて思う。

しかし、いつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。たくさんの卒業生を見送ったすぐ後には、その倍近くの新入寮生を迎え入れる時期が来る。私はこの慌ただしい時期が一番好きだ。年齢は一つ二つの違いしかないのに、毎年世代交代かと思うほどの新鮮な風を新入寮生は吹き込んでくれる。今年はどんな風が吹き荒れるのかと、今から楽しみで仕方がない。

私が一年目の頃を思い返せば、受け入れられた部屋が寮歌部屋だったせいか、酒に裸に赤ふんといった具合に寮の伝統を存分に味わった。挙げればきりがないが、幾多の寮文化、伝統行事は寮の魅力のかなり大きな部分を占める。今年の寮歌祭では平成19年度寮歌「恵迪小唄」が披露され、寮史に新たな一ページが加わった。また、ジャンプ大会も今年は開催されたし、春には観桜会が予定されている。さらに今年秋には第百回記念寮祭も控えており、例年よりも盛大な赤ふんパレードが巻き起こるだろう。このように、100年を誇る寮の歴史は今もなお寮生活に深く根付いている。

だが、はたしてそれが寮の魅力の根幹なのだろうか。しばしば恵迪寮は「バンカラ」というイメージと結び付けられるが、安易にそう括っていいとは思わない。

現在寮長である私も、外では「全然バンカラじゃないな。」「恵迪寮生っぽくない。」という評価が大半である。私を見たことがあるOBの方ももしかしたら同じ印象を受けたかもしれない。「こんなやつが今は寮長をやっているのか」と。確かに、私の外見は貧弱だし、大酒呑みでもな

い。しかし、今の恵迪寮はそれでもやっていける、と言えば語弊があるかもしれないが、要するにいろんな個性が今の寮には蠢いているのだ。そしてそれぞれが強烈に互いの個性を引っ張り出し、強烈にぶつかり合っている。そして常に現状に飽き足らず、新しい何かを貪欲に求めている。このように常に化学反応が起こっているような日常は非常に刺激的で、そこから得られる面白さ、教訓は計り知れない。これこそ恵迪寮の魅力の根幹だと私は強く思う。

現在の三代目恵迪寮は定員が500人弱、そのうち女子は90人もいるという大所帯である。そのうち約三分の一がこの3月から4月にかけて一新するわけだから、当然新年度を迎えるたびに寮内の雰囲気は一変する。私が1年目の頃に住んでいた寮生はそのほとんどが卒業されているし、私自身も寮の中での立場がかなり変わったので無理もないが、現在の寮の雰囲気は私が新入寮生だった頃のそれとは似ても似つかない。しかし、このめまぐるしい変遷の中にあっても恵迪寮はいつまでも魅力を失わない。それは、その時々の寮生が、人と関わることの面白さをずっと大事にしてきたからであると思う。恵迪寮の歴史のどの断片も、それぞれが味わい深く魅力的であったということ、そしてその事実はこれからも変わらないということは自信を持って言える。伝統に拘泥せず、常に斬新に、常に大胆に、面白いものを吸収し、時に生み出す。これこそ恵迪寮の伝統だと自分では思っている。往くべき迪に掟（さだめ）無し。これからも自分が面白いと思うものをどんどんぶつけて非日常を作り上げていくことが、私にとっても良い刺激になるし、これから入ってくる前途ある後輩達に伝えていけるものであると思っている。

寮歌物語 ① ♪

「手をとりて　美しき国を」（昭和28年寮歌）

ヒロシマ・ナガサキの原爆投下　ビキニ水爆実験の怒りの中で

山本玉樹（作歌者）（S28年入寮）

朝鮮戦争の戦火やまぬ1953年4月、私は北大に入学し、幸いにも恵迪寮に入寮を許可された。憧れの寮に入寮できた喜びもつかの間、寮費は、確か月2300円だったと思うが、みな空腹にさいなまれていた。寮のエッセンに疑問を持ったA君が、寮の会計を調べ、驚愕の事実を報告した。寮の執行委員会が、寮生の許可なく、「委員会交代コンパ」「執行委員会旅行」と称して、寮費を使っていたこと、さらに「寮の伝統」と称して、2年間寮費を一切払わず退寮している寮生が数多くいたことであった。当時米食は米穀通帳によって管理され、それがなければ米の配給を受けられなかった。寮費未納寮生の米穀通帳が大量に炊務委員会に厳重に保管されていたのである。

学寮の大改革・自治規約の確立

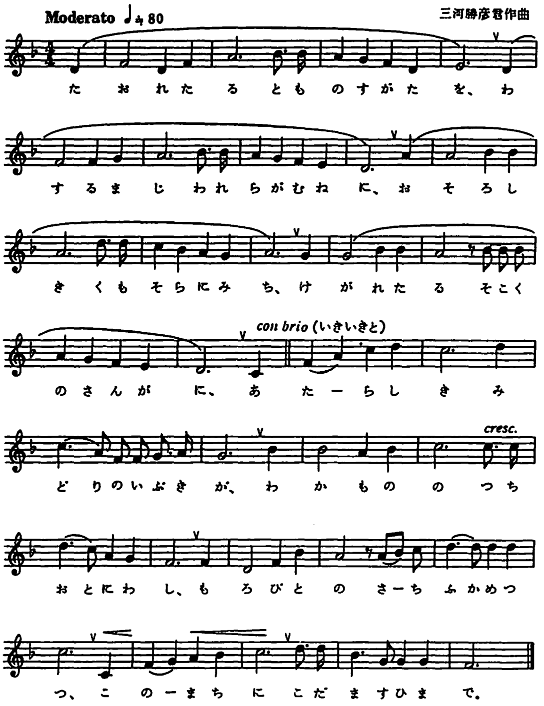
こうして2年生の一部と新入寮生を主体とする臨時寮生大会の開催となり、旧執行部のリコール、新寮執行委員会の選出、そして三権分立（執行委員会、代議員会、監査懲罰委員会）の寮規約の採決となった。当時、恵迪寮は、1950年の「イールズ闘争」、1952年の「住民票登録事件」などで文部省・学生部ににらまれていた。そこで、寮の大改革が行われたのであった。

入学の年の1953年7月、朝鮮休戦協定が締結され、朝鮮戦争は休戦になった。しかし、アメリカは、朝鮮戦争で三度目の原爆使用で形勢挽回を図っていた。「にんげんをかえせ」の詩を発表し、米占領軍の弾圧をくぐりぬけながらアメリカの原爆投下に決死の抗議を行った峠三吉は、アメリカが朝鮮戦争で同じ皮膚の色をした人種の上に原爆投下を企んでいると「米占領軍のプレスコード違反」ビラをまき、命がけで抗議を続けていた。

真理と平和を希求して

1950年3月19日、平和擁護世界大会はジョリオキュリーの起草した「ストックホルム・アピール」（ベルリンアピールへと続く）を発表して、全世界に原子兵器の無条件禁止要求の署名運動を提唱した。この署名は、日本では、仏・伊についで、645万人の署名が集められた。入学翌年の1954年3月1日、アメリカはビキニ環礁で水爆実験を強行し、第五福竜丸乗組員23名が「死の灰」を浴び、無線長の久保山愛吉さんが急性放射能症と診断された。

手をとりて美しき国を



手をとりて美しき国を

（昭和二十八年寮歌）

山本玉樹君 作歌

一

倒れたる友の姿を
忘るまじ我らが胸に
恐ろしき雲空に充ち
けがれたる祖国の山河に
新しき緑の息吹が
若者の槌音に和し
もろ人の幸深めつつ
この町にこだます日まで

二

沸き出でよ新らしき歌
消すまじ自由の歌を
わだつみの声をばひめて
去り果てし若き生命に
たくましき若き鼓動が
美しき歌声に和し
平和なる国を築くと
海こえてこだます日まで

久保山さんは、日本の知能を結集した集中治療を受けたが、遂に亡くなった。このアメリカの水爆実験の暴挙と久保山さんの死は、日本国民の怒りと平和への願いに火をつけ、300万を超す日本国民の原水爆禁止署名運動を巻き起こしました。このような状況の中で、「手をとりて 美しき国を」は作られた。戦争を体験した私達世代は、何よりも『戦争には絶対反対』であった。広島で被爆した兄を持つ私は、「一瞬にして何十万もの人を殺害する核兵器」には、絶対反対であり、アメリカの広島・長崎への原爆投下は、許すことができない戦争犯罪であった。これは当時の寮生の過半数の思いであったと思う。全寮投票にかけられ、わたしの歌詞が採択された。70年間、草木も生えないと言われた広島・長崎に、新しい緑の息吹が萌えいで、たくましき若き鼓動と若者の槌音が聞こえてきた。一瞬にして数十万の市民が殺された原爆地獄の中から、栗原貞子さんの「うましめんかな」の詩が発表された。これは、被爆者が絶望の中から、人類生存の道を照らし出す不屈の姿をしめしたもので、深い感動と勇気をあたえた。三河兄が、平行調で歌詞にこめた私の願いを表わして下さった。感謝である。今、「偽と戦争への道」が喧しく報じられ、なんと自衛隊海外派兵恒久法の成立が強行されようとしている。まさに、このときにこそ、偽を許さず、真理と平和を希求して闘った先覚にこそ学び、その闘いを受け継がなければならない。

（札幌市西区）

昭和29年度寮歌は作られなかった

三河勝彦（作曲者）
（S29年入寮）

寮歌は伝統的に毎年1曲ずつ制定されるものであると誰しもが理解しているはずなのだが、何故か昭和29年入寮の私が作曲した寮歌は昭和28年度のものであった。その後、29年度寮歌は募集されなかったので、29年度寮歌は欠番となっている。理由は委員会の怠慢と勝手に想像しているのだが、そのあたりの事情については当時の委員会の説明を待つほかはない。

ともあれ山本玉樹氏による詞が選定されて、それに対する作曲が公募されたのを受けて、以前から寮歌の作曲は是非共やってみたいと考えていた私は早速応募のために作曲を始めたのが昭和30年3月16日であった。

私には縁の薄い昨今のはやり歌の数々は先ずメロディーが作られて歌詞は後から付けられるものがあるそうだが、当時は作曲の王道として詞に曲を付けるために先ず「手をとりて美しき国を」という従来の寮歌にはなかった新しい感覚の歌詞をじっくりと読み込み、曲も以前とは異なる感覚のものにしたいと考えた。

歌詞の内容から、前半を短調で後半を長調にするという構想を基本にして翌17日には骨格が完成し、修正に2、3日をかけた。

寮歌の選定は同年6月24日の寮歌祭で全寮生の投票で行われた。応募曲は朧気な記憶では3曲であったような気がする。全寮生の投票にかけるには演奏してこれを選択の基準にして貰わなければならない。幸い、当時私の所属していた部屋は後にユーゲントコールになったバドミントンサークルで2部屋あったので、全員の約10名がこれらの全応募曲を練習して覚え、これを全寮生に披露・演奏して投票を待った。その結果、140余票中74票を得た私の曲が昭和28年度恵迪寮歌として選定された。

寮歌集には当時作曲されたままのものが掲載されていたが、その後、北大創基100年に当たる昭和51年に、北大音楽科出身で北大交響楽団指揮者の川越守氏による寮歌集の大改訂が行われ、その際にこの曲も改訂された。しかしなお、曲を改訂する必要性を覚えたので、平成19年に恵迪寮同窓会が作成した寮歌集CD「都ぞ弥生」に「手をとりて美しき国を」も含まれることになり、北大合唱団OB会としてこれに係わることになったのを機に、この曲を部分的に改訂し、この改訂譜で演奏収録した。私としてはこれを最終稿にしたいと思っている。

なお、このCDに収録した寮歌は私の曲を含めて幾つかの曲は僭越ながら部分的に改訂してある。改訂は主として近年のものが対象であり、出来るだけ作曲者と協議して行ったので、寮歌集改訂版出版の際には参考にして頂ければ幸である。

（札幌市中央区）

寮歌物語 ② ♪「草は萠え出で」（昭和53年第70回記念寮歌）

進化を続ける寮歌

朝倉仁樹（作歌者）
（S52年入寮）

昭和五十年の寮歌は「憧憬の故郷」である。「しょうけいのさと」と読む。

私が勤める新聞社の紙面で「憧憬」に「しょうけい」と読み仮名をふったら、読者から電話がかかってきたことがある。「どうけい」の誤りではないか、というのだ。

どちらも間違いではありません、と答えると、電話の主は、正解が二つある、白黒がつかない、ということが腑に落ちない様子だった。伝統的な読み方は「しょうけい」だが、「どうけい」と読む人が増えて無視できなくなり、今では多くの辞書も「どうけい」を慣用読みとして認めるようになって、どちらを使っても間違いとはいえない状況だと説明した。

「消耗」も昔は「しょうこう」と読まれたが、今そんな読み方をする人は、まずいない。言葉も生きている。時代とともに変化する。

平成19年秋、恵迪百年記念祭が行われた。卒業して30年近くたち、木造の寮は跡形もなく、学内もずいぶんきれいに整備されたが、中央ローンはほぼ以前のままだった。

これが現代風　テンポの速さにびっくり

その芝生の上で、現役の寮生が「草は萠え出で」は今でも結構人気があるんですよ、と教えてくれた。寮歌集の中で眠っている歌だろうと思っていただけに、少し驚いた。そして、十数人で歌ってくれたのを、見て、聴いて、今度は腰が抜けるほど驚いた。

ずいぶんテンポが速い。膝を折り、腰をくねらせ、拳を突き上げてイェーイという感じで、途中に複雑な手拍子が入る。何の工夫もなく淡々と歌っていた30年前とは全く違う、現代風のアレンジだった。30年で、どうしてこうも変わってしまったのだろう。

今の寮生は「都ぞ弥生」を歌うとき、「ゆーめこーそーーーーーーーー」で力の限り伸ばし、「ひーとと一きーーーーーーー」でまた伸ばす。もちろんOBと一緒のときは多数派に合わせてくれるが、「あそこで伸ばさないとカクッときちゃうんですよね」と話していた。我々としては、あそこで伸ばされるとカクッとくるのだが。

そういえば、東京で開かれた寮歌祭に誘われて顔を出した際にも戸惑ったことがある。たとえば「藻岩の緑」を、我々の世代はそれこそ朝霞のごとくダラダラと歌うが、

草は萌え出で

（昭和五十三年第七十回記念祭歌）

朝倉仁樹君 作歌

一

草は萌え出で郭公は鳴き
憧れ睦ぶ宿舎に
疾風怒濤の渦の中
明り求めて放浪いぬ
巷の塵をふり払い
悠々迪を歩まなん

二

蛮声放歌乱舞する
姿雄々しき吾なれど
原始林の可憐な白花に
心ふるわす春もあり
清き乙女子去りて行く
恋に涙す秋もあり

三

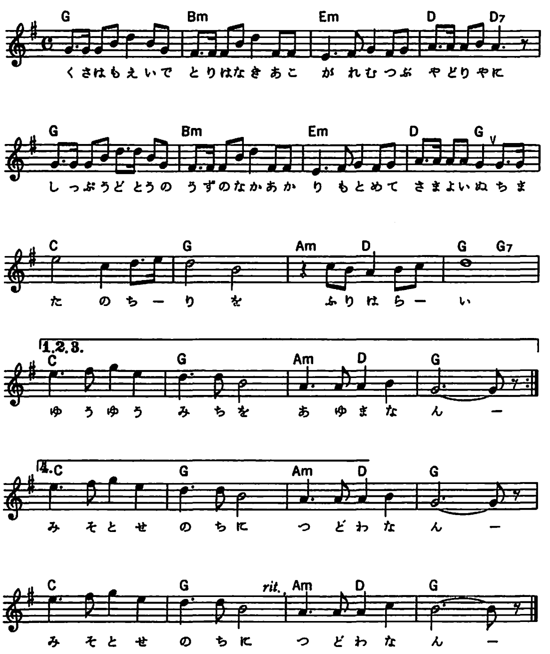
気高き野心の男の児等が
士幌に山小屋をうち建てぬ
十勝の山と平原に抱かれ
果てなく魂翔けるなり
厳しき北の大地より
新たな夢に飛びたたん

四

読み飲み語り夜は明け
熱き愉に年は経り
ああ青春の祭日も
はや七十を数うなり
寮生よ再び俤に
三十年後に集わなん

草は萌え出で

田坂幸平君 作曲



ずっと上の世代は行進曲風に歌う。キーもテンポも、各世代が妥協しないと合わない。

先輩方は、若い者が「正しい歌い方」を継承していないと嘆く。確かに、古い寮歌で楽譜どおり歌われているものは、ほとんどない。でも、若者からは、「都ぞ弥生」にはやっぱり「前口上」がないとサマにならない、という反論も出る。

寮歌がかけがえのない財産なのは、青春時代の思い出が染み付いた、自分たちの歌だからだろう。だから現役時代に歌った歌い方が一番なのだ。

百年記念祭の夜、寮歌祭が催され、現役寮生が再び「草は萌え出で」を歌ってくれた。というか、一緒にステージに上がった我々の世代は、やっぱりついていけなかった。昼間はナンジャ、コリャと思わず口走ってしまったが、このとき、本当に楽しそうに歌っている彼らを見て、思った。30年かけて、この歌をここまで育て上げてくれて、本当にありがとう。

この歌は生きている。生きているものは、必ず変化する。恵迪寮も成長している。そんな思いで、胸が熱くなった。自分も30年でずいぶん変わったのだから。

作者自身が一緒に歌えない、ということに、少し情けなく、寂しく感じるのも確かだ。

でも、「都ぞ弥生」は、各世代が各バージョンを保ちつつ、全世代が肩を組んで一緒に歌える。寮歌は、脈を打って、確実に、味わい深く、生きている。

（さいたま市緑区）

札幌で、恵迪寮で生きた青春の証

田坂幸平（作曲者）
（S51年入寮）

〽虹の地平をあゆみ出て
　影たちが近づく　手をとりあって
　街ができる　美しい街が
　あふれる旗　叫び　そして歌……

高校生の頃、大阪中心部の繁華街の近くに住んでいた私は、実家にいることを息苦しく感じていて大学はどこか遠くに行きたいと思っていた。そんな時、〈トワ・エ・モア〉が唄うこの札幌オリンピックの歌「虹と雪のバラード」を聴いて、札幌に住みたいと思った。うっとうしい気分を吹き飛ばしてくれる何かが、冬の雪に埋もれた札幌に、春のライラックの匂う北の街にあるのではないかという期待があった。その後進路を北大に決め、北大を受験し、1年の浪人生活を経て合格し、入学と同時に恵迪寮に入寮した。

割り当てられた部屋は南寮一階の5人部屋で同期が2人、先輩が2人という人員構成だった。最初のうちは、初めて実家を出ての、誰一人知り合いもいない土地での暮らしにもかかわらず、寂しいとか故郷が恋しいとかいう感情はこれっぽっちも湧かず、共同生活と毎晩といっていいほど開催される飲み会に心と体を慣らすのが精一杯だった。今にして思えば、自分はちょっと神経質で引っ込み思案で人間関係を作るのが下手な人間だったのだろう。

そのうち寮の生活にも慣れると次第に授業に行かなくなり、あるいは授業に行っても教室では寝てばかりという不真面目な学生となって2年生を2回経験することになる。それでも、昼頃に起きて授業に行ったり、ボーリング（玉転がしではなく穴掘り）のアルバイトを時々したり、スキーやスケートをしたり、山に登ったり、山スキーをしたり、海水浴に行ったり、マラソンをしたり、酒を飲んで寮歌を唄いストームを踊ったり、ジャンプ大会で頭から雪の中に落ちて救急車で病院に運ばれたり、体育の時間に鉄棒で大車輪をして両腕を骨折したり、赤フンパレードで寮歌を歌いながら円山公園まで一升瓶片手に歩いたり、自転車であちこち旅をしたり、士幌小屋を作りに士幌まで行ったりと、今から思えば忙しい学生生活だった。

この「草は萌え出で」は、恵迪寮生活3年目でS上（南寮二階の一番奥の部屋）に住んでいた時に作った歌である。恵迪寮生活3年目といえば留年していた年で、留年とは名ばかりの、大学の学生生活で一番楽しかった時期でもあった。当時は（今でもそうだと思うが）1年に1回、寮歌が作られていたが、その年は寮ができてからちょうど70年目の年ということで記念祭歌を募集していた。私は先に決まった朝倉君の作った歌詞を眺めてギターを弾きながら、その歌詞にコードとメロディーを付けていった。音楽テープへの録音は、同室にいた栗田君に頼んで二人で唄ったものを寮の講堂で録音した。

その当時、「寮友（とも）よ再び楡影に三十年後（みそとせのち）に集わなん」という歌詩があったが、その30年後

がいつの日か来るとは、想像すらできなかったというのが本音かも知れない。果たしてビジョンのない20歳の若者が、自分が50歳になった時のことをリアルに想像できるだろうか？　それでも生きている限り30年後は確実にやってくる。今その30年後がすでに過ぎている私にとって、「草は萠え出で」は自分が恵迪寮で、札幌で生きた証である。

今、恵迪寮が与えてくれたものを考えてみると、それは、高校までの人生に比べて目の前で実に多くの生の人間を見たことだった。人は教室の中では表現しない本音を生活の中で露わにする。他人の人生は参考にはなっても同じ人生を歩くことはできないし、例え歩いたとしても同じように幸せにはなるとは限らない。どのように生きるべきかは自分の価値判断で考えて決めなければならないという、ごく当たり前のことを学んだように思う。

それにしても、恵迪寮とそれを取り巻く札幌の街は貧乏学生にとっては快適な生活環境であった。あの時代にもう一度生まれたなら……再び恵迪寮に入寮するだろう。郭公の声で目を覚まし、水芭蕉咲く原始の森を彷徨いたい……と思う今日この頃である。

（福岡県小郡市）

平成19年度恵迪「開識社」講演会（百年記念特別講演）

「新渡戸稲造を育てた札幌農学校」

講師・藤田正一君（S38年入寮）

取材・中村昭雄（S41年入寮）

札幌農学校から続く恵迪寮伝統行事の「開識社」講演会。昨年9月の百周年記念事業の一環として北大獣医学部の藤田正一教授（S38年入寮）が「新渡戸稲造を育てた札幌農学校」の演題で講演しました。百年記念号にも速報の形で掲載しましたが、実際の講演内容と一部異なる内容となり、藤田教授にもご迷惑をかけました。

東京から参加した中村昭雄君（S41年入寮）が会場で記録した講演内容を、要旨にまとめ、編集委員会に送ってくれました。北大、恵迪寮精神の根源にかかわる重要な講演であることと、中村君の努力に感謝して、全文を掲載することにしました。

◇

さてこの写真が新渡戸稲造先生のお顔です。戦前戦後を通じて、国際社会で活躍された第一級の日本人として5千円札の肖像になりましたが、お札は残念ながら短命に終ってしまいました。

新渡戸先生は文久2年盛岡藩（南部藩）士・新渡戸十次郎の三男として盛岡に生まれ、11歳の時、東京英語学校に入学、明治10年、15歳で札幌農学校の2期生として入学しました。

明治14年卒業後、開拓使御用掛勤務を経て、21歳の時、英文学を学ぶため東京大学文科大学に学士入学しますが、このとき銓衡官に述べた「私は太平洋の架け橋になりたい」という言葉が有名になりました。しかし東大では勉強しなくても常にトップで、札幌農学校ではそんなことはありませんでしたから、東大の余りのレベルの低さを嘆き、「ここで勉強することは何もなかった」と宮部金吾に語っています。

明治17年、米ジョンズ・ホプキンズ大学に留学、明治20年、札幌農学校助教とドイツ留学辞令を貰い、ボン大学やベルリン大学で勉強し、明治24年帰国後、佐藤昌介校長の下で札幌農学校教授に。この年、貧しい子らのために遠友夜学校を創設します。皆さんはあまり知らないかもしれませんが、これは新渡戸先生の業

新渡戸稲造

績の中でも光るものとなっています。

明治33年、病気療養渡米中に「武士道（Bushido, The Soul of Japan）」を出版、明治39年、第一高等学校校長兼東京帝大農科大学教授となり、ここで内村鑑三を学生達に紹介するとともに、自らも学生達に深い人格的影響を与えています。大正7年、東京女子大学学長、大正9年、国際連盟設立に際して事務局次長に選ばれています。

新渡戸先生は昭和7年に松山で講演したとき、地方の記者達に「書かないという誓約ができるなら話そう」という条件付の座談で「日本を危うくするのは共産主義と軍閥である。そのどちらが怖いかと問われたら、今は軍閥であると答えねばならない」と語り、これが報道されて国賊として攻撃を受けました。これが松山事件で、亡くなる1年前のことです。

昭和6年に満州事変が起こると、新渡戸先生は米国に飛んで日本の立場を説明して回りますが、日本の軍事行動に対する理解は得られず、昭和8年、カナダのバンフで開かれた太平洋調査会議に日本代表団団長として出席し、その帰り道に倒れてしまわれたのです。

教育者としての新渡戸先生は、第一高等学校長として南原繁、矢内原忠雄らに影響を与えただけでなく、スミス女学校（現・北星学園、ここの教え子に河合道がいる）、北鳴学校、普連土学園、女子英語学校（津田塾大学）、拓殖大学、恵泉女学園（河合道が設立）等に直接的、間接的に影響を与えていますが、先ほど述べた遠友夜学校は特筆すべきものと言えます。

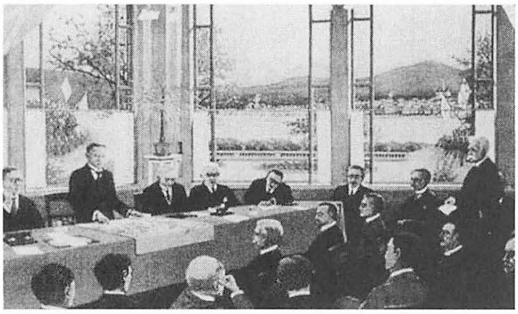
明治26年、メアリー（萬里子）夫人の乳母をしていた女性の遺産が、その遺言によって送られてきました。このお金で札幌独立教会のボロ校舎を購入し、札幌農学校の学生に先生をさせて、学校に行けない貧しい子供たちを教えたのです。遠友夜学校は明治27年から昭和19年まで50年間続いています。この間に500人の北大生が教え、5000人が卒業しています。遠友夜学校の校是は「リンカーンに学べ」即ち「何人にも悪意を抱かず、全ての人に慈愛を持って臨め」というもので、「学問より実行」を重視しました。これが万巻の書物を読んだ新渡戸先生の言葉です。

名著「武士道」は、明治32年に口述筆記させたものです。この書を愛読したセオドア・ルーズベルト大統領は、60冊を購入して知人に配り、更に日露戦争の仲介役を買って出てくれました。戦争後、明治天皇は新渡戸先生を宮中に招いて感謝の意を表しています。

第一次大戦後、米ウィルソン大統領の提唱によって国際連盟ができますが、事務総長J・エリック・ドラモンド卿（英）の下で、新渡戸先生は事務局次長（大正9～昭和2年）を務め、「国際連盟の星」と称えられました。先生が事務総長の代わりに演説を行ったのです。また事務局次長

として、バルト海のオーランド紛争（オーランド諸島の帰属を巡るフィンランド、スウェーデン、ロシア3国の対立）の解決に尽力しています。

この写真はノーベル賞を受賞したH・L・ベルグソン、A・アインシュタイン、M・キュリー夫人で、国際連盟が設置した国際知的協力委員会（ユネスコの前身）の委員です。ここで新渡戸先生は事務局長を務めています。



新渡戸稲造が解決に尽力したオーランド紛争の会議

新渡戸先生は、米国留学中（明治17〜20年）に、クエーカー教徒（プロテスタントの一派、フレンド派の通称）になりました。クエーカーは何があっても戦争に荷担しない、絶対的平和主義の立場を取ります。新渡戸先生はこう言っています。「よき愛国者はよき国際人であり、よき国際人はよき愛国者である」

今なぜ新渡戸先生なのでしょうか。「武士道（Bushido）」は、西洋的価値観に通じた日本人が、日本人の根本思想（宗教）とは何かについて答えたものです。今、日本人がそれを読んでいる。拝金主義の卑しい国、豊かであるが品性のない国になり下がって、新渡戸先生の書物が見直されているのです。

新渡戸先生は、祖父・伝（つとう）、父・十次郎の血を受けて生まれました。この祖父と父は三本木原（現十和田市）の開拓を成功させ、藩の財政を立て直しています。このことは新渡戸先生に農業の重要性を認識させ、農学への憧れを抱かせることになったのです。また米ジョンズ・ホプキンズ大学留学中に、フィラデルフィアの富豪モリス家でメアリー・エルキントン嬢と出会い、明治24年にフィラデルフィアで結婚しています。

さて、新渡戸先生を育てた札幌農学校（Sapporo Agricultural College＝札幌農科大学）についてお話します。

戦後、東大総長を務めた矢内原忠雄は、昭和27年の五月祭講演で次のように述べています。「明治の初年において日本の官立大学教育には二つの大きな中心があって、一つは東京大学であり、一つは札幌農学校でありました。この二つの学校が日本の教育における国家主義と民主主義という2大思想の源流を作ったのである。札幌農学校から発したところの人間を作るというリベラルな教育が主流となることができず、東京大学に発したところの国家主義、国体論、皇室中心主義、そういうものが日本の教育の指導理念を形成した。その極み、ついに太平洋戦争を引き起こし、敗戦後、日本の教育を作り直す

という段階に、今なっておるのであります」。

W・S・クラーク先生は、1826年マサチューセッツ州アッシュフィールド生まれ、1848年アマースト・カレッジを卒業し、1850年独ゲッチンゲン大学に留学後、アマースト・カレッジ教授、1861年から63年まで北軍少佐として南北戦争に出征しました。1867年にマサチューセッツ農科大学初代学長に就任、日本政府・北海道開拓使の懇請を受けて来日。東京英語学校で選抜した第1期生とともに、明治9年7月31日札幌に到着、札幌農学校のPresident（学長）に就任します。明治9年8月14日、札幌農学校開校式において、クラーク先生は「Young Gentlemen（若き紳士諸君）!」と呼びかけ、「Lofty Ambition（高邁なる志）」を抱くべしと、教訓に満ちた演説を行いました。

クラーク博士

翌年4月16日、千歳に近い島松の駅逓において、見送りの教え子達に「Boys be ambitious!（少年よ大志を抱け）」の語を残して去られました。この言葉には「like this old man（私のように）」が続いていたのです。

「Boys be ambitious!」の北大の解釈は、「少年よ大志を抱け。それは金銭（money）や私利私欲（selfish aggrandizement）、名声（fame）という虚しいもの（evanescent thing）のためではなく、知識（knowledge）のために、正義（righteousness）のために、かつ国民の向上（uplift of your people）のために、大志を抱け」ということです。

最近、外人がジョークで言った異説を真に受けて吹聴する人が北大教授にもいますが、とんでもないことです。英国のジョン・メージャー首相も、この言葉を「大志を抱け」の意味で使っています。

クラーク先生が着任されたとき、札幌学校から選抜移行してきた生徒達が、札幌学校校則を示したところ、その古い校則を破り捨て、「こんなことで人間が作れるものか」、「余がこの学校に望む規則は〝Be Gentleman〟ただこの一語に尽きる」と言われたそうです。

クラーク先生が札幌農学校へ伝えたニューイングランドの気風（the Spirit of America）すなわちピューリタンの精神は、自由を尊ぶ自主独立の精神（Live Free or Die）であり、クラーク先生を通して表した言葉が、「Be Ambitious」であり「Be Gentleman」なのです。

クラーク先生は教え子のウィリアム・M・ホイラー教授、デイビッド・P・ペンハロー教授及びウィリアム・P・ブルックス教授に後事を託しました。クラーク先生が去った後、この順にPresident（学長）が引き継がれていきます。いま時計台として

親しまれている演武場（Military Hall）を設計した（明治11年）のがホイラー教授、時計塔を設置（明治14年）したのがペンハロー教授です。

札幌農学校の教育精神は、①Lofty Ambition（高邁なる志）②Be Gentleman（自律的な個、自主独立、責任感を持った大人）③個人の尊重、が基本であり、「勤労の重視」、「平和主義」、「机上の学問より実践の重視」、「現場主義」、「暗記より思考力を！」等が中心でした。

ホイーラー先生は『日本国教育の真否』の中で、「日本人はその向学心において欧米人にひけを取らないにも拘らず、伝統的な学問観、方法と社会的束縛のため、学校を卒業した後の進歩が欧米人に遅れてしまう。日本の学問は殆ど中国の古典を文字から学ぶ記憶中心のもので、模倣には長けているが自ら作り出すということをしない」と指摘しています。

札幌農学校の教育は、①自由・自主・独立の精神、②Be Ambitious、③Be Gentleman の3本柱で行われ、特に1期生、2期生は、同窓生との切磋琢磨で優秀な人物が育ちました。内村鑑三は「かつて私どもは札幌を北方のアテネとなし、日本第一の智識の淵源たらしめんと志した」と述べています。

さて札幌農学校は、ときの政府・権力に対して「Ｎｏと言える日本人」を輩出しました。4期生（3期生は募集せず）の志賀重昂（しが・しげたか）（１８６３～１９２７）は札幌農学校で一番先に世に出た人ですが、欧風文化に流れる明治日本において自国文化の優秀性を主張しました。内村鑑三は日露開戦にあたり非戦論を唱え「戦争の利益は泥棒の利益である」と喝破しました。自ら「札幌農学校の子」と称した南原繁（１８８９～１９７４）と矢内原忠雄（１８９３～１９６１）（ともに東大卒）の場合、矢内原忠雄は日中戦争批判により東大教授を辞職、南原繁は全面講和を主張して吉田茂首相と対立しました。その後に首相を務めた石橋湛山（１８８４～１９７３）は、甲府中学（現・甲府一高）で校長・大島正健（第1期生）の影響を強く受けました。早大卒業後、東洋新報社で主幹、社長を務め、民主主義、自由主義、平和主義を貫き、戦後政界に入った後も、中ソ両国との国交回復の基礎を作るなど国際平和活動に力を注ぎました。

札幌を東洋における学術・文化の中心地にしようと語り合う新渡戸、宮部金吾、内村鑑三（左から）

札幌農学校は初期において大人物を輩出しましたが、その後は大人物を出しておりません。それはなぜでしょうか。１８９０年（明治23年）札幌農学校の予算は5万円でしたが、１８９５年（明治28年）には2万6千円に大幅カットされ、明治20年に設置された工学科も明治27年に廃止されました。当時、札幌農学校

は内務省（井上馨内務大臣）の管轄下にあり、校長・佐藤昌介は、文部省移管（明治28年）によって廃校の危機を乗り切って行きます。佐藤昌介は「時の政府に反対した者がある。それが気に食わないから学校をつぶしてしまえというのである」と述べています。こうして、札幌農学校の教育は国家主義型の教育へ転換を余儀なくされたのです。

大正14年5月14日、北海道帝国大学開学50周年記念式典及びクラーク胸像除幕式が、高松宮、岡田良平文相、栃内曽次郎海相以下、内外3千数百人が参集して行われました。このとき、内村鑑三は出席を拒否し、小樽新聞に次のように語りました。「今や北海道ほど俗人の跋扈するところはない」、「札幌が出したものは多数の従順なる官僚、利欲にたけたる実業家、また温良の紳士であります。しかれども正義に燃え、真理を熱愛し、社会人類のために犠牲たらんとする人物は一人も出しません。積極的の大人物ではありません」、「私はクラーク先生の精神は札幌に残っているとは思いません。残っているのは先生の名であります」、「先生の自由の精神、キリストの信仰、それは今の札幌にはありません。札幌は先生のボーイズ・ビー・アンビシャスの広い意味においてこれを知りません」。

内村鑑三は、「もはや札幌（北大）からは、Ｎｏと言える人物が輩出されなくなってしまった」と痛烈に批判しているのです。

新渡戸先生は「政治は教育機関に干渉すべきではない」と言われました。旧教育基本法（昭和22年施行）は、戦後民主主義教育の基盤となった法律です。この法律を作った教育刷新委員会のメンバーは、安倍能成（委員長）、南原繁（副委員長）を初め新渡戸先生の影響を受けた人が多く、旧教育基本法は札幌農学校の精神であると言えるのです。旧教育基本法第10条は「教育は不当な支配に服することなく、国民全体に対して直接に責任を行われるべきものである」と述べています。

新教育基本法は、戦後教育に対して懐疑的な意見を持つ勢力によって改正を余儀なくされ、平成18年12月に施行されましたが、これはかつての札幌農学校に対する行政の圧力と軌を一にするものなのです。

クラーク先生の「大志」は「大いなる士（さむらい）の心」であり、新渡戸先生の「武士道」の精神とあいまって、現代の世相を変える指針となり得る精神ではないでしょうか。

自・由・投・稿

都ぞ弥生・ある記憶

角幡　春雄
（S19年入寮）

札幌に、むかし、セコンドという喫茶店があった。音質のいい電蓄とクラシックの豊富なコレクションがあったから、音楽好きや文学青年、あるいはただの怠け者学生の溜まり場になっていた。

教室を素通りしてここに直行する者もいたし、ある寮生は、長っ尻になるのを遠慮して、ストーブわきの石炭箱を自分の席にしていた。音楽青年の彼は予科3年のところをウラ・オモテ6年やった。同じ学年を二度落第すると放校の決まりだったし、下手すると一回で進級してしまうから、ウラ・オモテ正確に6年やるというのは誰にでも出来る芸当ではなかった。

狙い通り首尾よく6年間予科生活を堪能したあと、彼は学部を正規の3年で卒業し、社会に出てから余人の出来ない傑出した業績を残したと聞いている。

ある日の午後、このセコンドに、場違いな陸軍の将校が二人連れだって現れた。

野太刀造りの重そうな軍刀を革長靴にばたらばたらと、ぶつけるようにして入ってきた。無遠慮な闖入者を目にして、奥に陣取っていた3年生のひとりが「ゲーエ・ゾルダーテン」とあまり大きくない声で非難した。

その声がきっかけだった。私たちは習いたての怪しいドイツ語を声を揃えて囃したてる。

「ゲーエ・ゲーエ・ゾルダーテン」

「ゲーエ・ゲーエ・ゾルダーテン」

お前たちの来るところじゃない。兵隊ども出て行け。消え失せろ…といった気持ちで非難排撃しようとしたのである。

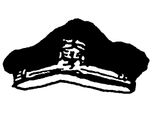
と、いったん席に腰をおろした将校のひとりが、軍刀の柄を押さえるようにして立ち上がった。私達はどきりとして、息を呑んだ。

昭和19年、戦争中である。軍は権勢に驕って学生の自由を敵視していたし、軍人がどんなに威嚇的で、ときに粗暴であるかを、むろん、誰もが知っていた。まさか軍刀を抜くことはあるまいとは思ったが、私達は、いっぺんに沈黙して彼に目を向けていた。

すると立ち上がった将校の口から、思いがけない言葉が出た。

「目障りな恰好で来て、すまない」

静かにそう言った。私達が緊張してこわばった姿勢を解いて、ふっと息をついていると、自分は実は君達の先輩なんだ。軍命令で移動の途上だが、列車時間の合間をつくって大学の構内を歩いたあと、わずかの時間を、むかしよく通ったセコンドでしばらく過ごしたいと思って、ここにやってきた。「目障りだろうが、しばらく我慢してくれないか」



先輩と知ってあわてた先程の3年生が立っていって、思い上がった不作法の詫びを言い、どうかごゆっくりというようなことを、甚だ不細工な言葉にして述べているのを見ていると、軍装の先輩は、その3年生に握手の手を差し出していた。

私達はそれから、なんとも納まりの悪い、変な気持ちで、レコードに耳を傾けるような恰好を続けていたが……。

小一時間もしなかったと思う。先輩だと名乗った将校がテーブルの音を立てるようにして立ち、少し顔を赤くして「諸君にお願いがある」と言った。

「みんなで、都ぞ弥生を歌ってくれないか」

先程も言ったように、自分もこいつ――とわきにいるもう一人の将校をさして、「我々、ここがそういう場所でないことは心得ているつもりだが」と断ったうえで、「いま移動の途上にある。移動先は言えないが、こんな時代だ、生還期しがたい事情にある。無事帰還できるとは思えない。札幌の最後に「都ぞ弥生」を歌って送り出してくれないか。もう時間がない。歌が終わるまで居られるかどうかあやしいが、都ぞ弥生を、耳の底に残して立ち去りたいんだ」

表情は真剣で、必死な思いが声に込められていた。私達に、むろん、否応はなかった。

先程の3年生が、女の子に頼んでレコードを止め、「明治四十五年寮歌・都ぞ弥生！」と音頭をとった。

私達はみんな一斉に立ち上がって、目を瞑って(都ぞ弥生は、改まったときには目を閉じて歌うのが習慣だった) 死地に赴く先輩のために、胸を切なくして歌った。場所柄を無視した無遠慮な歌声が、セコンドの小さな部屋がはち切れるように響いた。

歌が3番くらいまでいったろうか。気づくと二人の将校の姿は消えていた。列車の時刻が来たのだろう。しかし私達は、戸口に向かって、5番の最後まで彼らに届けとばかり声を張り上げていた。

「兵隊さん、手袋で目を押さえるようにして、出て行かれました」セコンドの女の子がそう言った。

戦局はこの前後から転げ落ちるように悪化して、外地では玉砕や転進(と呼んだ撤退)が相次ぎ、内地は米軍機の空襲で火だるま、原爆投下、ソ連軍の参戦……。

このときセコンドに立ち寄った二人の将校が、戦場から生き帰れたのか、それともどこかで、不本意な戦死を免れなかったものか、知りようもないまま60年余経っている。お名前も聞いていなかった。

（東京都北区）

入寮五十年を想う

―「北辰斜めにさすところ」を観よう―

深谷　勲（S32年入寮）

定期購読している「サンデー毎日」2月10日号をパラパラと開いたところ、岩見隆夫のサンデー時評の映画「北辰斜めにさすところ」の

評題が目に飛び込んできた。
ご存知の方も多いと思うが、この「北辰斜めにさすところ」は、旧制第七高等学校（鹿児島造士館）の最も有名な寮歌の一つである。私が日水に入社した頃（昭和36年）同室の友人（鹿大卒）が良く歌っていたので覚えていた。

昨年春、私が永年関与している更生保護活動（保護司）の指導官庁である名古屋保護観察所を訪ね、用件を済ませた後、部屋に貼ってあるポスター「北辰斜めにさすところ」が目に止まった。

所長の広田玉枝氏にその主旨を尋ねたところ、この映画を企画したのは、ご主人の広田稔氏（鹿大卒・弁護士）で、現在の教育に強い疑問を感じ、かつての旧制高校の校風に着目して、「伝えたい志がある。残したい思いがある！」との強い情熱でこの映画撮りを始めたという。しかし、お金がかかり、目下資金集めに大変であると言った主旨の事を熱っぽく話された事が頭の隅に残っていた。

そんな折、このサンデー時評で映画の完成を知り、早速仲間を誘い、この映画を鑑賞した次第である。

戦前のエリート教育の中心である、旧制高校制度が廃止されて既に60年が経過した。戦後生まれが7割を超す時代になり、かつての旧制高校でどんな教育がなされ、学生はどんな想いでそこに学んだか……。現在ではほとんどの者が知る由もないし、また今の若者はその存在すら知らないのが現状である。

ストーリーは割愛するが、主人公の老医師（三国連太郎）が孫に、若き日の七高での、学生生活、寮生活を淡々と語るシーンは、吾々の青春時代、50年前の恵迪寮の生活と重ね合わせて、度々熱き想いが込み上げてくる。入寮銓衡、懲罰、ストーム、寮祭、五高・七高の定期戦、名物教授の講義、そして自治寮生としてのプライド。私が改めて申すまでもないが、弊衣破帽、高歌放吟の蛮色ファッションの底流には豊かな自由の中に真理を探究しようとする高い理念があり、偽善や虚飾を廃する誇り高き精神があった。

企画した広田氏は、現代のシステム化された学校教育の在り方に疑問を抱き、この映像を通して、旧制高校の精神性の高い教育から何かを汲み取って欲しいと提唱している。

久々にサンデー時評推奨の「北辰斜めにさすところ」の残像に浸っていたところ、札幌の同期のN君から電話が入った。用件は昨年9月下旬に行われた恵迪百年記念誌に寄稿して欲しいと言う事だ。一瞬躊躇した。なぜ俺が……。次には俺でいいのかよ〜と。寮務の手伝いもしなかったし、それどころか昭和32年度の赤痢事件による寮祭中止の首謀者・A級戦犯である。50年経過した今、宍戸昌夫大先輩や、中瀬篤信前同窓会長より百年祭参加お礼の丁重なる便りを戴いた。これを恩赦と受け止め投稿を受けることとした。

が、さて何を記して良いやら……。

吾家の古い母家の一室の唐紙に3年程前（愛知万博開催の年）寮歌を10曲程書き殴った。部屋の正面には本学の大先輩、志賀重昂が祖父に揮毫した、日露戦争激戦の地、二〇三

高地を詩った、乃木希典の〝爾霊山嶮豈難…〟の扁額が、その隣には新渡戸稲造の〝ボーイズ・ビー・アンビシャス（本学のコピー）〟が掛けてあり、部屋の隅にはスケート部後輩のO君が寄贈してくれた「初代・忍路丸」（レプリカ）の華麗な帆船が飾ってある。自ら「恵迪の間」と称して時折仲間と一杯やっている。その部屋で今入寮50年を振り返っている。

昨年は自分にとって大きな節目の年であった。〝恵迪百年、入寮五十年、そして古稀〟である。夏場から体調を崩した92歳の母が、札幌から帰宅して2日後に他界した。息子の帰りを待っていたのだろう……。

多感な青春時代を北大に学び、恵迪寮生活を過ごした事に感謝している。寮には先に記したような旧制高校の残照が充満していた。〝紳士たれ！、高邁な野心を持て！等々〟70歳を迎えようとしている今、余命何を為すべきか。

〝大志〟といかない迄も〝小志〟は持ち続けたい。現在携っている「更生保護活動」も小志の一つかも知れない。昨年地元の保護司会の中に地域の企業に呼びかけ、出所者を雇って貰う「協力雇用主会」を12社の協力を得て立ち上げた。就労者と非就労者の再犯率は5倍にもなっている。凶悪犯罪の多い昨今、報われる事は少ないが、若き日、恵迪寮で受けた、〝ロフティー・アンビシャス〟の報恩として。及ばずながらこの更生保護活動を続けていく所存である。

（愛知県常滑市）

「絆」

平野　亮輔（S28年入寮）

前号に掲載された芝垣氏の寮歌にまつわる娘への愛着。玉置氏の入寮経緯の情。病魔に打ち勝った同室の友情。藤岡真知子さんの語りに示された、故人に情を注ぎ続けた寮友の心情。それらは全て「絆」と申し上げたい。特に恵迪寮に寝起きした友は皆等しく「絆」が強い。それは朝食に起因しているように思えてならない。ズッペは桶から均等に四等分。注ぎ終わると一礼してエッセン攻撃に入る。最初に食べ終わった者が空桶、どん尻がたくあん皿を返却する。毎朝顔ぶれは変わるのが当たり前。空腹がしのげない貧しい食事でも、無言で分かち合う心響く5分間が「絆」を深める所作だったかも知れない。

昭和29年8月、両陛下は皇太子殿下とともに北海道をご訪問された。殿下の一番の目的は北大構内恵迪寮近辺であった。寮の正面に雨天でもプレーできるテニスコートの設置を望まれた。学生の一部は少々反対したが、7月には完成した。殿下は内地の某所で、テニスに興ずるひとりの女学生を見初めていらしゃった。わずかな時間でも練習して腕を磨きたかったに違いない……何故、恵迪寮の正面にわざわざ……。

その時から21年前に遡る。正しくは昭和8年12月23日。待ちに待った

親王様のご誕生である。連日連夜の提灯行列。お祝いの歌もうたわれた。殿下と日を同じくした男児にはメダルが贈られた。中国の古典「経書」より「迪宮明仁（みちのみやあきひと）親王」と命名された。

ご来道のお召し船は昭和23年に建造された洞爺丸に決まり、函館どっくでピカピカに磨かれた。当日、恵迪寮には帰省しないほんの少しの寮生に迷惑が掛かったが、時間を区切って禁足令が出され、観音開きの扉は内側から閉じられた。案内役の島学長の説明を受けられた殿下は一入の感があられたに違いない。「自分の名前の原点がここにもあった」と。

昭和天皇は終戦のご苦労もさることながら、嫁がれた内親王の死にも、自らの強い意志で病室に立ち会われ、早朝の悲しみを「もう夜が明けましたね」と呟かれた。そのご様子を時の朝日新聞の番記者は紙面にこう記した。めずらしく叙情文で「陛下の人生で一番長い一日であられたに違いない」。

昭和天皇の親王、内親王への愛情は、市井の私どもと何ら変わることなく心を揺るがすものがある。

老い老いし、落照の身であっても、「絆」だけは大切に心のポケットに納めて置きたい。

（奈良県大和郡山市）

北大構内を散策する

中西　三郎（S19年入寮）

恵迪百年記念祭が平成19年9月22日に開催されることは承知していたが、10月3日に札幌で我々の予科農類同期会が開かれることになっていた。

と言うわけで残念ながら記念祭を欠席せざるを得なかった。

「恵迪百年記念号」を拝見すると、予想を上回る参会者をえて盛大に開かれたとのこと、心からお慶び申し上げるとともに開催に関係された役員各位のなみなみならぬ努力に対し、敬意と感謝を申し上げる。

記念号に投稿された記事はいずれも、恵迪寮に対する熱き想いに溢れ、恵迪寮がいかに若き我々を育み育てた故郷であったかの気持ちが漲っており、まさに「わが恵迪寮」は永遠なりと改めて想いを深くするものであった。

その中でも私の心を打ったのは「高井宗宏氏」の記事であったので、表題と懸け離れるが若干感想を書かせて貰いたい。

学園紛争の華やかなりし頃、第二代恵迪寮に他校の闘士連中が潜りこんでいると風聞したことはあったが、寮が老朽化し新しく建て替えられることになった時、新寮に「恵迪」の名前すら認めないとする大学当局（多分、事務官僚だと思う）、文部省の意向が強かったこと、はたまた「開拓の村」に記念建築物として移築することすら妨害する圧力があったことをこの記事で始めて知った。

新寮設立にあたって、大学・学生部は「恵迪」という寮名を残せば、騒動の巣窟を強化させることになると、反対の意向を示していたほか、

寮生・OBの中にも「寮名」を変えたほうが良いとする意見も多かったというから、今こうして「恵迪」の寮名が残り、一部であろうと、旧恵迪寮が開拓の村に残せたことに対して、当時、交渉に奮闘して頂いた寮生OB諸兄に厚くお礼を申し上げたい。

さて、表題の本論に戻って、同期会を終えて、同僚2人と昨年農学部教授を退官した大沢勝次君の案内で、構内を歩いた。

かつて我々が在学中、北大構内の中では農学部本館が目立って偉容を示していたように思うが、今はその本館はコンクリート建築物に隠れるように建っている。

「都ぞ弥生」歌碑前にて
右：「大沢勝次」北大名誉教授他３人：左から角幡、山岸、中西いずれも昭和19年入寮

あれ程、エルムの森に囲まれていた北大構内も今は高層建築群に占められ、昔の面影を残しているのは、極端に言えば、農学部界隈のローンとエルムの木々。クラーク像から北に延びる中央道路と北13条銀杏並木くらいでなかろうか？

かねがね行って見たいと考えていた総合博物館を見ることにした。ここは我々の頃は理学部の建物だった。

そこで思いがけず私達の寮生当時の写真を見つけた。それは、昭和21年5月、何年も北海道の沿岸に姿を見せなかった鰊の大群が張碓・銭函の海岸に押し寄せてきた時の記念すべき写真だった。

寮の生活部（炊務）では早速、トラック2台を借り受け、浜に駆けつけ、トラックに満載し寮に戻り、寮で待ち受けていた寮生達の応援を受けて処理した時の写真だった。まさかここにその時の記念すべき写真があろうとは考えもしなかっただけに、感激した。

中央道路を北上するとラグビーに熱中した当時のローンがあるはずだったが、いまは建物群に埋め尽くされていて勿論、その前にあった恵迪寮もない。

私はこのローンから工学部の建物を通して手稲の山並みを見る景色が一番好きだった。当時の誰に聞いてもここの景色を賞賛する。

当時の工学部の建物のエキゾチックなこと。今でも瞼の裏に焼き付いて忘れられない。

情けないと言ってはいけないかも知れないが、今の工学部の建物はただバカでかいコンクリートの塊である。

昔の第二農場もまた多くの建物に埋め尽くされていた。

ただモデルバーンの一帯は遠友学舎を含めて見学者の憩いの場と言って良いようだった。

遠友学舎を除いては私が在校した当時からあった建物であるが、建物自体は昔のままである。今は周りが

整備され、こざっぱりとした絵になる佇まいであった。
散策の最後は新しく改築された「都ぞ弥生」の歌碑の前で肩を組んで我々4人は「都ぞ弥生」を高唱した。
想いを60年前に戻って……

(埼玉県桶川市)

今、甦る青春

芝垣　美男
(S39年入寮)

紛失したと諦めていた恵迪時代の〝宝物〟が、二十数年ぶりに見つかり、懐かしき思い出に浸っている。

その〝宝物〟とは、昭和58年2月11日付朝日新聞社発行の「アサヒグラフ」。取り壊しが決まった2代目恵迪寮を記念して「寮歌時代の終わり・北大恵迪寮よ　いざさらば」のタイトルで表紙から16ページにわたって写真と記事で特集されていた。

当時、室蘭の自宅近くのレストランで見つけ、支配人に拝み倒してもらってきたものだ。

驚いたことに、昭和41年2月下旬、退寮前夜に南寮廊下の天井に描いた落書きの一部が写っているではないか。当時、法学部に学部移行が決まり、弁護士を目指して司法試験に挑戦する意気込みを、少し粋がった文章にしたためた。

「悪徳弁護士　芝垣美男　今宵寮を去るにただ涙にくれなん　明日は人生の旅なれば」

グラフの写真では、悪の文字の上が欠けて「心徳弁護士」となっていたのはお笑いだが、家族にも自慢して我が家の〝宝物〟として大事に保管したつもりが……。

あれから25年、アサヒグラフも廃刊、大事に仕舞い込んだはずの〝宝物〟もどこかにいってしまった。諦めかけていた昨年暮れ、我が家の97歳になる実父の部屋を整理していたところ、書物の間に「あった、あった」。

過日の室蘭恵迪会の新年会で披露したところ、先輩諸兄から「これは凄い。みんな欲しがるよ」と言われ、印刷会社でカラーコピーを取り製本化した。そして室蘭恵迪会の会員と日頃からお付き合い頂いている寮生OB諸兄らに贈った。

私の落書きが掲載された同じ写真のすぐ右横に「埼玉川越高校　高彰」と書いた文字が読める。これは同室だった一年後輩の高彰君が、私の一年後に書いたものだ。高君とは、卒業後名古屋や東京で何度か会っているが、共に南寮廊下壁に落書きした

事は、お互いに知らなかった。高君から喜びあふれる手紙を頂戴した。25年前の「アサヒグラフ」が、二人の新しい出会いを取り持ったわけだ。

また、特集記事の中に、当時3年目で愛知県出身の榊原悟志君のコメントが掲載されている。実は数年前、オルゴール箱を恵迪寮に模し、寮歌「都ぞ弥生」が流れるオルゴールを制作したという記事が新聞に出ていた。記事を読んだ私の女房が、愛知県に住むそのオルゴール制作者に電話し、最後の1台をやっと購入した。

私は昨年の恵迪寮命名百周年記念寮歌祭で、その制作者に会い、名刺を交換した。25年ぶりに見つかった〃宝物〃に目を通していた女房が突然、声を上げた。購入したそのオルゴール制作者こそ、現在愛知県で社会保険労務士をしている榊原悟志君だった。榊原君にも製本した「アサヒグラフ」を贈ったが、彼も青春との再会を喜んだに違いない。

星去り、時移ろうとも、夢にも忘れねその名こそ、わが青春の「恵迪寮」。

（室蘭市）

寮歌愛好会からの誘い

横平　弘（S27年入寮）

恵迪寮同窓会からの「新年歌会始め」の案内を受けて張り切って参加したのはまだ一回しかなく、寮歌について書くことは気が引けることではある。

ところが思いがけず恵迪寮歌の愛好会とおぼしき「蒼穹会」実行委員長である小菅高之氏（予科医類S18年入学）から、昨年12月の第81回例会に次いで今年2月の第82回例会の案内を受けた。いずれも都合が付かず不参加となり残念であり、申し訳なく思った次第であった。

しかし実行委員会の熱意は大変なもので、2回目の案内にはアンケート用紙が同封されていた。例会運営に役立たせるべく、寮歌集に掲載の「都ぞ弥生」のほか、大部分の寮歌と校歌、応援歌、ストームの歌まで計85曲のタイトルが列記され、一曲ごとに歌唱力を区分し、A＝一人で歌える、B＝皆と一緒なら歌える、C＝知らないとなっており、その該当欄に○印で記入するよう指示されていた。

私の記録結果を敢えて告白すると、A＝16、B＝6、C＝63で、圧倒的にCが多く、まさに落第生の如き落ちぶれようである。卒業後50年もたつと寮歌も大部分、忘却の彼方に去ってしまったことを数字で知らされて愕然とした。

その案内文では私のような中高年同窓生を予想して「今後は練習を兼ねた歌唱も取り入れる」また、「理想を失った人間は老化が早く進むことを是認して、知らなかった寮歌などの学生歌の習得に積極的であることを切望して止まない」など励まし？の言葉が添えられていた。大いに感謝したい。

これを機会に、わが寮歌を恵迪寮の良き伝統として改めて見つめ直し、老化防止をも兼ねて歌唱力の挽

回に努めたいものと自分自身に誓った次第である。

最後に「北海道大学恵迪寮寮歌集（1954年）に寄せられた、リンゴ博士の名で知られる当時の島善鄰学長の序文の一部を転載して筆を置く。

――無気力、無関心は恥辱である。恵迪の名の示す如く、正しき中庸の道に歩一歩を進めて貰いたい。先輩に負けぬ意気を持って、新しき理想を大いに歌うべきである。人は老いて行くけれども曲は永遠である。

（札幌市清田区）

ヒューマニズムとロマンチシズムの学校をつくる！

亀貝　一義（S31年入寮）

「ヒューマニズムとロマンチシズム」という同じタイトルで「恵迪の青春」（1986年）誌に記したが、そこに、最近の教育荒廃問題を自分の問題として受けとめる気持ちを述べ、2年間の恵迪寮時代で得た重要な生き方の教訓が「ヒューマニズムとロマンチシズム」の光であったと確信している旨記した。

そして非力であっても、私たちが青春時代、体験したヒューマニズムとロマンチシズムを、これからの21世紀の北海道の地に「再現」したいと考えている、と宣言した。

昨年から、恵迪寮の先輩諸氏と共同して「21世紀の北海道を考える会」という少々気負ったネーミングの活動を進めてきた。この中で、新渡戸稲造や北大の先人たちのきわめて貴重な活躍を学ぶことができた。その学び得たことと、私たちが教育の仕事の延長から作り出した体験を併せて、これらかの人生のテーマにするまさにその時に来ていると思う昨今である。

やはり1986年の「恵迪の青春」誌を引用しておく。この小文の最後を「序列と輪切り、偏差値、他人蹴落としの学校から、自由と個性を尊重し、本当の意味の人間教育を貫徹しえる学校を創設」したい、そしてこの人間教育とは「基底にヒューマニズムとロマンチシズムが、すなわち北海道の精神＝恵迪の精神が流れている」と結んでいた。

これまで、私は1993年以降札幌の地で「フリースクール」を進めてきた。学校に行けない子ども、学校からはじかれた子ども、なじめない子どもなどのサポートが主要な内容である。幸いスタッフにも恵まれたし、私たちの真摯さに多くの親たちから支持と信頼を得てきた。この実践の上で、通信制の高校を立ち上げる方向を確認している。「構造改革特区制」にもとづく学校である。

開校は2009年4月、校名は「札幌自由が丘学園三和高等学校」。これは私が卒業した道北の小さな町、和寒町の旧三和小学校を本部校とすることに由来する。

通信制の高校などたくさんある。しかし私たちはこのせいぜい全校200名足らずの小さい学校で、前記の精神すなわちヒューマニズムとロマンチシズムの趣旨を貫きたいと考えている。ヒューマニズムとは文字

どおり人間を大切にすること、具体的には人を差別しない、他人の意見に耳を傾けること、同時に自分の気持ちを示すことでもある。人の命と権利を絶対に粗末にしない教育になるだろう。

そしてロマンチシズムとは未来への希望を共有することだ。かつてクラーク博士が「ボーイズ・ビー・アンビシャス」といったその大志である。クラーク博士のいう「大志」は決して自己本位のものではなかった。世の中のため世界のため日本のため、という志の高いものであった。

最近よく言われる語句の、共生、共同、共存、この三つを総合する原理は「正義」と言えるかも知れない。ヒューマニズムとロマンチシズムの別の表現である。

教育内容にどう盛っていくかは、関心のある方はわがホームページ（「札幌自由が丘学園」で検索）をご参照してほしい。

（札幌市西区）

ものごとの順序

千田　忠男
（S40年入寮）

歳を数えると、寮生活をはじめたときから45年がすぎ、大学で教鞭を執るようになってからもすでに十数年を経たが、いまの私は、文系の大学生を対象とするキャリア教育のあり方について考えることを課題の一つにするようになった。

キャリア教育とは、誤解を恐れずに単純化すれば、大学を卒業した後に仕事に就いて働き続けるそのプロセスと働き方を科学的に究明し、その成果を学生に教育しようというのである。この課題はなかなか難しい面がある。まず、なぜ仕事をするのかというテーマを科学として究明し、学生がわかるようなカタチで説明しきらなければならない。また、仕事への態度や人生観、価値観などにもふれなければならない。さらに、就職活動にも役立つようなノウハウにも気を配らなければならない。実際に内定が得られなければ、大学のキャリア教育は、簡単に吹き飛んでしまうからである。

キャリア教育を心掛けるようになって、学生の違った姿が見えるようになってきた。就職活動のすすめ方やノウハウを求めて入学以来初めて真剣に人生について考えたという学生に出会うこともある。

他方で、「自分に向いた仕事、自分にぴったりの仕事」を探したいと考える学生は多い。村上龍の『一三歳のハローワーク』で強調されている「この世に二種類の人間・大人しかいない。自分の好きな仕事、自分に向いている仕事で生活の糧を得ている人と、そうでない人だ」という主張を素直に受け止めているので、就職活動が進むにつれて次第に青ざめてくるといってよい。面接では失敗ばかりする。OB・OG訪問をすると退職を考えていることが薄々知らされる。先輩の働き方には到底ついて行けないと感じられ、それを打開する方策も、さしあたりは見あたらな

い。学生は途方に暮れてしまう。

先日、長崎県五島列島に出かける用事があった。五島列島で一番大きい福江島で乗り合いバスに乗ったのであるが、マイクで放送する名と、料金掲示板に標示される名前と、さらに通過するときに確認できる停留所名との三つがすべてずれていて、行き先にたどり着けるのかどうか多いに不安になった。そのときに突然に、就職活動を始めた学生の不安にふれたように思えた。そして同時に、学生には「二十九敗一勝で行こう」と言おうと思いついた。

就職活動では立て続けに29回くらいは失敗するだろう、そうしたのちに初めて一勝にたどり着ける。その順番と経過が大切なのだ。仕事を用意し、学生の活躍を期待する側を代表するものとしての企業と学生は直接に、しかも自力で交渉する。骨身にしみるような社会勉強を29回くらい続ければその後に得られる成果は、単に内定を得てひとつの進路を確実にしただけでない。社会の深みをのぞきながら人生を切り開く道筋を一段上ることなのだ。そこでアンビシャスをかたくにぎりしめるのだ、と。

こうしたことを思いつくようなときにはたいてい、恵迪寮を思い浮かべたりしているのだ。

（京都府宇治市）

神田一ツ橋門外探訪記

中村　昭雄
（S41年入寮）

はじめに

恵迪百年記念祭から帰ったある日、かつての東京英語学校を偲んで旧一ツ橋門外を訪ねた。また3月には学士会館で開かれた工学部化学系同窓会「北鐘」に出席し、『北大恵迪寮の男たち』で知られる向井承子氏の講演を聞いた。私はこの地に本学一期生、二期生諸兄が札幌に巣立った歴史の重みを覚え、東京における本学の故地のように感じている。

校名変遷の経緯

札幌農学校伝の幾つかは上記校名を東京外国語学校としていることがあり、どちらが正しいのか疑問に思っていた。その典型として次の事例を挙げることができる。則ち新渡戸先生の略歴（『日本の一〇〇人』）には「明治六年東京外国語学校入学」、「明治九年東京英語学校で札幌農学校への勧誘に応じ」、「明治十年東京大学予備門から札幌農学校に入学」とあり、また開拓使から文部省への第二期生の依頼状には「昨九年中、東京英語学校生徒御譲り受け致し候振り合いにより、東京大学予備門生徒御譲り受け致したく」（『北海道大学百年史』）とある。この背景には学制頒布当時の制度改変が隠されている。

東京、外語、一橋各大学のホームページでその沿革を見ると、この3校は幕末の蕃書調所（開成所）を起源とする。開成所は大学南校から第一大学区第一番中学及び第二番中学を経て、明治6年に開成学校と東京

外国語学校となり、開成学校は明治7年に東京開成学校、明治10年東京大学となる。

東京英語学校は明治7年に外国語学校から英語科を分離して設立された学校で、明治10年に東京大学予備門、明治19年に第一高等中学校、明治27年に第一高等学校と変遷して行く。一方、外国語学校は明治18年に東京商業学校に併合されるが明治32年に独立する。

一ツ橋門外を歩く

旧一ツ橋御門から白山通りを水道橋に向かって右手が神田錦町3丁目で、手前に興和一橋ビル、神田警察通りを隔てて学士会館が見える。左手が一ツ橋通町（現一ツ橋2丁目）で、一橋大学如水会館と学術総合センター、その向こうに共立女子大の建物が並んでいる。

白山通りを如水会館へ歩くと、『東京外国語大学発祥の地』の碑があり、「東京外国語大学の起源は安政四年に創設された蕃書調書まで遡るが、直接の前身である東京外国語学校が開設されたのは、明治六年十一月四日、この地（当時の東京府神田区一ツ橋通町一番地）においてであった。東京外国語大学はこの日を建学記念日として、ここに碑を建造する」と記されている。

学士会館には、白山通りに面して『東京大学発祥の地』の碑があり「この地にはもと東京大学及びその前身の開成学校があった」、「明治五年学制施行当初、第一大学区第一番中学と呼ばれていた」、「東京大学創立当初は、法学部、理学部、文学部の校舎は神田錦町三丁目の当地に設けられていた」と記されている。また神田警察通りに面して『新島襄先生生誕の地』の碑があり、「天保十四年、上州安中藩主・板倉伊予守の江戸藩邸に誕生せられた」、また「Illustrious Son of Amherst College」と記されている。

東京外国語学校跡地

古地図による校地の研究

文久3年改正『江戸切絵図』（板元尾張屋清七）は、神田錦町3丁目が安中藩板倉家上屋敷と御火除地、一ツ橋通町は蕃書調書となっており、現学士会館北の表神保町には越後高田藩榊原家の屋敷がある。明治4年改正『官版東京大絵図』を見ると、上記の蕃書調書と御火除地の区域全てが開成所に変わり、明治8年版『東京大区小区分絵図』（佐藤豊忠編輯）では、錦町3丁目は開成学校、一ツ橋通町は外国語学校となっている。明治11年内務省地理局『実測東京全図』には、錦町3丁目に開成学校、一ツ橋通町に一番中学校がある。一番中学校は先の第一番中学の名残であろう。また表神保町に東京英語学校とあるが、東京府第一中学沿革に「明治十一年創立後すぐ神田区表神

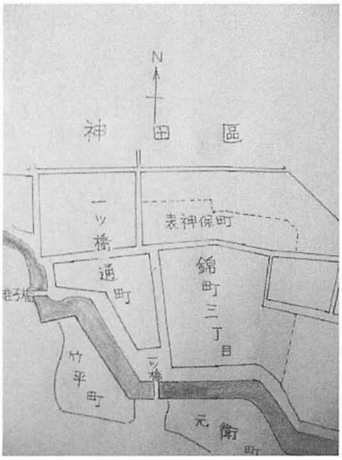
保町の官立東京英語学校の跡地に移転（十四年麹町区内幸町へ）」とこれを裏付ける記述がある。

明治20年参謀本部陸地測量部『五千分の一東京図』は、錦町3丁目が東京大学、一ツ橋通町が東京外国語学校で、校舎レイアウトまで記入されている。件の表神保町は空地になっている。この地図で興味深いのは、東京大学の東に隣接して学習院があることで、学習院は明治10年に設置され、明治21年までこの地にあったことが分かる。東京大学は明治17年に法科と文科が、明治18年に理科がこの地から本郷に移転する。

一方、大学予備門は明治19年に第一高等中学校となり、明治22年に向ヶ丘弥生町へ移転するが、それまで錦町3丁目キャンパスにあった証拠を、八重洲ブックセンターで古地図資料出版㈱の古地図によって見つけることができた。すなわちこの『明治二十年二万分の一（東京近傍中部）』（陸地測量部、明治十三年測量・十九年製版）は、前記『五千分の一東京図』の東京大学が大学予備門に、外国語学校が商業学校に変わり、表神保町は体操練習場となっている。

漱石の記述

小宮豊隆の漱石伝によれば、夏目漱石は談話筆記『私の経過した学生時代』等の中で、「その頃東京には中学というものが一つしかなかった。今の高等商業の横辺りにあって僕の入ったのは十二、三の頃かしら」、「二、三年でこの中学をやめてしまって、三島中洲先生の二松学舎に転じたのであるが」、「発心して大学予備門に入るために駿河台にあった成立学舎へ入学して、殆ど一年ばかり一生懸命に勉強し」、「その年（明治十七年）の夏は運よく大学予備門に入ることができた」、「中村是公氏と共に私塾の教師をしながら」、「一ツ橋の予備門に通学した」と言っている。



一ツ橋周辺の古地図

余談ながら、成立学舎の先生は「目今有要な地位を得ているものが少なくなく」、「新渡戸博士は既に札幌農学校を済まして、大学選科に通いながら、その間に来ていたように覚えている」とある。また成立学舎、予備門以来の旧友・橋本左五郎（八期生、畜産学教授）が「何だ下らないと云って北海道へ行って農学校へ這入ってしまった」（『満韓ところどころ』）のは明治18年8月である。

おわりに

新島襄は元治元年に渡米し、アマースト・カレッジでクラーク博士に教えを受けている。また後年、同志社英学校教授に大島正健を迎えるなど本学とは縁が深い。その新島襄誕生地と、本学一期生、二期生が札幌へ巣立った学校が、同じ一ツ橋門外の地にあったことは偶然ではあるが興味深い。

（埼玉県北本市）

新樹（しんじゅ）

小沢久弥
（S17年入寮）

春

春を待つ足下に鳩の寄り来る

車庫の前少し汚れて水温む

草萌のベンチの隣に人来る

夏

はとバスの出発点の新樹かな

夏川を下る木曽路の水しぶき

犬小屋の裾濡れしまゝ梅雨の明け

秋

対岸の音なき花火次々と

枝打ちの終わりし庭や後の月

故郷の富山の新米届きたり

冬

タクシーの着く末枯（うらがれ）の駅裏に

武蔵野の母校の庭の冬木立

孫を見に汽車に乗りたる二日かな

（川崎市麻生区）

人物点描

河村 征治（S32年入寮）

一期生首席のボヘミアン

荒川 重秀

（一）

荒川重秀は、１８５９年（安政６年）、江戸本所に於いて代々幕臣の子弟として生誕した。１８７２年（明治5年）に東京芝・増上寺にあった開拓使仮学校に入り、同校が札幌農学校として札幌に移転開校すると共に一期生として入学した。同期生が「生まれつきズバ抜けた頭脳の持ち主」と舌を巻いたというが、母校の初代総長となる佐藤昌介と成績を争い、卒業時には首席として卒業生総代となり、開拓使御用掛に採用された。ここで荒川は5年契約の約束を破り2年足らずで退職し、私費で渡米し各地で農業を視察し、たまたま開拓使長官であった黒田清隆が内閣総理大臣になった時に渡米してきた顧問と会い、年額６００円の補助を受けることとなった。これにより荒川は、ミシガン大学とカンバラント大学で社会学と法学を学び、１８８７年（明治20年）に帰国した。その後、報知新聞社の編集や早稲田専門学校の講師をしたり、根室新聞の主筆をしたりしていたが、黒田が再び入閣し通信大臣になると官界に入り、船舶商標識課長・船舶司検所・高等海員審判官・商船学校教頭などを歴任し15年の官吏生活を送った。

（二）

しかし、かつて演劇に関心を抱いていた荒川は役人生活をやめて、小山内薫らが開いていた俳優学校に入り、シェイクスピア劇の講義をしたり、岡本綺堂らと文士劇を作り、自ら俳優として東京座や明治座などで舞台に立った。友達からは「やめたらよい」と忠告されたが全く意に介さなかったという。これが高じて川上音次郎・貞双一座が、大阪・帝国座で旗上げした時に荒川も参画し、本格的な俳優となり、新劇にとどまらず歌舞伎の宗十郎とも共演するに至る。その後、川上音次郎が死んだあと自ら劇団を組織し20数名の俳優を集めて中国・四国などを巡業するが、財政的に破綻し解散するとともにこのような文人生活から足を洗うこととなるのである。

（三）

官吏生活15年、そして文人生活15年、荒川重秀は61歳になっていた。荒川は地方巡業中に農村社会を観察しつつ、その封建的風土や伝統的因習などに強い衝撃を受けていた。そこで、これらを打破してゆくために何をすべきかを考え、１９２２年（大正11年）、法律の研究に発起し京都帝国大学法科に入学することになった。毎朝6時に大阪・梅田駅から京都駅へ、老骨に鞭打って64歳にして法学士として卒業するに至る。

荒川は卒業後、大阪に「社会教育会」という啓蒙団体を結成し、近隣の農村に出向いて政治・法律・文化・

芸術を説きながら青年男女の精神啓発と社会変革への活動を開始する。荒川は札幌農学校一期生が全員署名した「イエスを信ずる者の契約」の福音的ピューリタニズムに立った思想に共感しつつ学生生活を送ったようである。そして、その福音への共感は波乱万丈の生涯の結実に及び、再びよみがえったのである。しかし、青雲の志を持って全国行脚に旅立った荒川はその途上で1931年（昭和6年）、東京小石川に於いて脳出血により倒れて不帰となる。永遠の青年にして偉大なるボヘミアンは73歳にて没することとなった。

北海道酪農の基礎確立

町村　金弥・敬貴

（一）

町村金弥は、1859年（安政6年）に越前国武生（現福井県武生市）に於いて府中藩の足軽の子として生まれた。清貧にして苦学一途の中で上京し、東京英語学校・工部大学予備校に進み、19歳にして札幌農学校に進学することになった。卒業とともに金弥は開拓使に勤め、その廃止に伴い真駒内牧牛場で働くことになった。この牧牛場はエドヴィン・ダンが設計・管理・経営指導し開設された日本最初の畜肉試験場で、面積900㌶、草地140㌶に及ぶ全国最大の牧場であった。エドヴィン・ダンはホレース・ケプロン（アメリカ農務局長）と共に北海道開拓使顧問として1871年（明治4年）に来道し酪農と畜産の指導を担当した。

その後ダンは札幌農学校と密接にかかわる事となり教官を兼務していた。金弥は在学中からダンの直接指導を受け、畜産学及び簿記会計を実地に学ぶ機会に恵まれていた。しかも、バター・チーズ・ハム・ソーセージの加工から採草放牧に関する一流の技術がダンから金弥に直接伝授された。

（二）

金弥はこうして農学校卒業の二期生の中でただひとり、畜産の道を歩むことになったのである。金弥はダンの秘書役として1881年（明治14年）から牧牛場勤務となっていたが、開拓使廃止とダンが帰米するのに伴い、次々と農場の設立や農場長の仕事が金弥の双肩にかかることとなった。中でも明治の元老三条実美を代表として華族達が出資した雨竜華族農場は五万町歩という壮大なもので、アメリカ式の大農法を目指すものであった。金弥はその報酬として八十四町歩の開拓地を送られ、これが町村牧場の先駆けとなる。金弥はまた1901年（明治34年）から5年間、文官として初の陸軍省農事

専任技術者となり、軍馬飼養改良の指導に従事した。この仕事は日露戦争の作戦に大きく貢献するというおまけともなった。

金弥は宮部金吾に次ぐ長寿で84歳で天命をまっとうすることになるが、宇都宮牧場の始祖宇都宮仙太郎と町村牧場の始祖町村敬貴などの傑出した弟子を残すことになる。

（三）

金弥の長男である町村敬貴は、1906年（明治39年）に札幌農学校農芸科を卒業するや1916年（大正5年）までアメリカの農場で実地に酪農を学んだ。金弥はダンに学び大牧場に挑戦してきたが、敬貴に「アメリカで小規模であるが、集約的農業をもって成功しているやり方があるはずであり、学んで来い」との強い希望を伝えた。

金弥が真駒内の場長をしていたころ、福沢諭吉の影響を受け金弥のもとに門をたたいた青年が宇都宮仙太郎である。仙太郎はアメリカに渡り酪農を労働をもって身に着け、帰国後に宇都宮牧場を開設していた。敬貴はこの牧場で学んだ後アメリカに学びに行く決心を固めたのである。

敬貴は帰国して樽川に入植し、江別の地に「牛づくり・草づくり・土地づくり」の三位一体の酪農を成功させてゆくのである。金弥は仙太郎と敬貴という2人の弟子をアメリカで学ばせ、帰国後自立するまでの援助を惜しまず成功を見届けた。ここに酪農と畜産は北海道の大地に根付き日本の畜産業を先駆してゆくのである。金弥と敬貴の系譜は、町村金五そして町村信孝と続き、北海道自立への血脈を形成している。

水産と教育の伝道者

内村　鑑三

（一）

内村鑑三は、1861年（文久元年）、江戸小石川坂上（現在の本郷4丁目）に於いて高崎藩の馬廻り格五十石取りの藩士の長男として高崎藩中家敷長屋で生誕した。長じて13歳に東京赤坂の有馬学校に入学し翌年東京英語学校（後の東大予備門）に入学している。在学中の1877年（明治10年）、北海道開拓使と共にクラーク博士が学生募集のため東京英語学校を訪問したことにより、父の希望した東京帝大法科への目標を捨て札幌農学校に入学することとなった。入学と同時に英語の聖書が配られ改宗が強制されるような雰囲気の中で、札幌神社の現前で「改宗する輩を罰して欲しい」と祈るほど抵抗するが、ついに「イエスを信ずる者の契約」に署名する。他律的な入信であったが、熱心な信者となり寄宿舎の部屋に祭壇を設けたり、日曜集会には交代で牧師を務めるに至る。この内容は「余はいかにして基督信徒になりしか」に詳しい。

（二）

内村鑑三は１８８１年（明治14年）に卒論文「科学としての漁業」をもって首席で農学校を卒業する。卒業と共に就職し札幌県御用掛として１年、農商務省御用掛として１年、この２年間はもっぱら漁務あるいは漁業の調査研究に従事した。内村の農商務省に於ける研究活動は、本人が月給泥棒とさえ表現するような状況で充実したと思われるが、結婚半年にして破婚状況となり明治10年米国留学へと突然の転身を計ることとなった。

　渡米の目的を慈善事業への転身と考えつつ、結局は漁業水産への思いは断ちがたく新島襄に勧められアマスト大学に学び理学士として１８８７年に卒業することとなった。留学中はクラークへの２回にわたる訪問、新島襄や宮部金吾との再会、アマスト大学総長シーリーの好意あふれる支援など十分に英気を養うことができた。

　１８８８年にコネティカット州ハートフォード神学校に進むも退学し日本に帰国することとなった。また、この在学中１８８６年にクラークが鉱山への投資で失敗し破産し失意のうちに病没したことは内村の次の人生に影響を及ぼしたであろう。

　内村は帰国と共に新潟キリスト教により建学された北越学館の教頭になるが、学校改革をめぐり対立し辞任する。翌年１８８９年に水産伝習所（東京水産大学を経て現東京海洋大学）教授に就任し、「水産動物学」や「日本漁類の命名」の仕事に従事することとなった。

（三）

　内村鑑三はこの水産伝習所第１回卒業式のあと１８９０年（明治23年）、第一高等中学校の教授として転ずることとなった。担当は英語・地理・歴史であり、水産学から離れることになるのである。その翌年、一高に於ける教育勅語奉載式で最敬礼しなかったということで依願免職される。いわゆる「不敬事件」である。その後、内村は「万朝報」の英文欄主筆として迎えられ、日英同盟反対や日露作戦戦論を世に問い、日露開戦に反対するが、「万朝報」を１９０３年（明治36年）に退社することとなる。それ以後、１９００年から始めた月刊誌「聖書の研究」へ専心することとなる。内村の聖書研究会「柚会」には一高生が集い、天野貞祐、安部能成、南原繁、前田多聞、森戸厚男、矢内原忠雄などに大いなる感化を与え、これらの人々は戦後に教育基本法制定へ大きな影響を与えた。１９３０年（昭和５年）、無教会主義に立つ偉大な教育者であった内村は心臓病で逝去した。

農学校精神の全国伝播

鶴崎　久米一　他

（一）

札幌農学校の卒業生の第一期（1880年）から第十三期（1895年）までの職業分布は、農業及び実業20％、専門技術者20％、官公庁10％に対し、40％が教職者であったという（札幌農学校・蝦名賢三・新評論刊）。そして、そのほとんどは明治学制に於いて新設されてゆく中等学校の教職者であった。一期生の大島正健は、クラークの勧めによる「イエスを信ずる者の契約」によって建立された札幌独立基督教会の最初の牧師に就任し、以後教育者としての生涯を尽くした。1901年（明治34年）、甲府中学校（県立第一中学）六代目校長に赴任するやクラークの教えを柱にした熱烈な教育を行った。首相石橋湛山は一年間大島の薫陶の下に大いなる感化を受け、生涯それを語った。1965年（昭和40年）、甲府中85周年の年に、校庭の左手に石橋湛山書になる「青年奮起立功名、馬上遺言範熱誠、別路春寒島松駅、一鞭直蹴雪泥行。憶クラーク先生大島正健」の石造のレリーフが建立されている。

一期生の渡瀬寅次郎は開拓使御用掛のあと水戸中学校長に就任し、クラークの教育方針を体現し、さらに茨城県立師範学校長に就任した。ときを同じくして1901年山梨県立第二中学校には六期生の中川太郎が着任している。二期生の岩崎行親は鹿児島第一中学校長に就任し、後に第七高等学校造士館の創立に従い校長を兼務する。

（二）

三期生の鶴崎久米一は、佐賀藩士の子弟として育ち、農学校卒業後に開拓使農林技師として勤め、いくつかの中学校教諭を歴任したあと1896年に神戸中学校が開校されると同時に初代校長に任命され赴任した。その教育方針は全員寄宿舎制度による生活自治と質実剛健による開拓者魂であった。開校10年目にして一切の規制を廃し紳士たることを生徒に課する教育は教育界の驚異の対象となり、遠近の校長の見学も多かった。矢内原忠雄（東大総長）は鶴崎校長により直接の薫陶を受け、1910年（明治43年）に卒業した。矢内原の「私は内村鑑三より〝神〟を、新渡戸稲造より〝人間〟を学んだ、私は札幌農学校の〝子〟である。」と宣言した言葉は有名である。

四期生の河村九渕は、香川県にあった高松中学校長として奮励努力により建学の基礎の確立ならんとしたとき、京都大学総長木下広次の推薦により熊本県立農学校初代校長に就任し、教育と人材づくりの傍ら県下の農業近代化を推進した。「農は理と共に実を教ふるにあり、農業の為

すべきところ、これを実践することが肝要なり。」とは河村の言葉である。

（三）

七期生の木村繁四郎は、1897年（明治36年）に創立された神奈川県立横浜中学校の教頭として招かれ2年後に第二代校長となった。現在の希望ヶ丘高校の校舎前には木村の書く「寧静到遠」レリーフが掲げられている。同じ七期生の清水由松は札幌農学校卒業後に水戸の師範学校の教諭として赴任するが、私立麻布中学校の創立と共に創立者江原素六校長の下教頭として赴任し、江原逝去後二代校長となる。キリスト教倫理による自由闊達な校風を築き上げた。橋本龍太郎と福田康夫の二人の首相の出身校である。1900年（明治33年）の農学校同窓会員264人のうち、農学校関係者を除く中等教育の現場で活躍する人は117人であった。ボーイズ・ビー・アンビシャスの木霊は札幌から全国津津浦浦に響いたのである。今もその木霊は響いているのだろうか。

エルムの森から

藤田正一名誉教授に道新文化賞

北大第54代応援団長として活躍した、獣医学研究科の藤田正一名誉教授（3月31日付け退官）が「第61回北海道新聞文化賞」を受賞しました。

受賞理由は「環境汚染物質による野生動物汚染と生態影響評価に関する研究」です。環境毒性学のパイオニアでもある藤田氏は、絶滅危惧種のオオワシや個体の減少が心配されるアザラシ、野鼠など高等野生動物に高濃度の有機塩素系農薬、ダイオキシン類、PCB、重金属などが蓄積していること、これらの動物体内で甲状腺ホルモンの低下など深刻な生化学的変化が起きていることを実証し、社会に警告を鳴らしてきました。

藤田氏は獣医学部卒業後の昭和43年、単身渡米し、オレゴン大学、アルバートアインシュタイン医科大学で博士号を取得。帰国後は、明治薬科大学、千葉大学薬学部を経て、平成2年、母校の獣医学部教授に就任しました。

研究の傍ら、札幌農学校時代に新渡戸稲造らが設立した「札幌遠友夜学校」の復元に尽力したほか、北海道総合博物館の館長として市民に開かれた大学施設を運営しました。

札幌農学校史の研究でも知られ、昨年9月の恵迪百年記念祭の開識社講演でも「新渡戸稲造を育てた札幌農学校」のテーマで、北大フロンティア精神の継承に熱弁を振るわれました。

喜田宏人獣共通感染症リサーチセンター長　学士院会員に

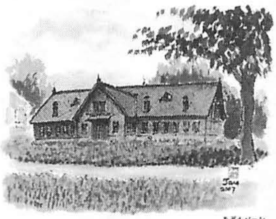
人獣共通感染症リサーチセンター長・獣医学研究科教授喜田宏氏が、昨年12月開かれた日本学士院総会で日本学士院会員（第2部・自然科学部門）（第6分科・農学）に選定され、今年1月10日皇居・松の間で行われた講書始めの儀で「インフルエンザウイルスの生態」について天皇、皇后両陛下にご進講しました。

北大の学士院会員としては、故石塚喜明名誉教授（農芸化学）、故高橋萬右衛門名誉教授（育種学）、故今村成和名誉教授（行政法理論）、横山泉名誉教授（地球物理学）、四方英四郎名誉教授（植物病理学）に次いで6年ぶり6人目となります。

喜田教授は昭和42年北大獣医学部

獣医学科卒業。修士課程修了後、武田薬品工業で細菌を研究した後、同51年北大獣医学部講師、助教授を経てWHOインフルエンザウイルス共同研究センター客員教授などを務めた後、平成13年から17年まで同研究科長・学部長を務めました。

この間、一貫してインフルエンザウイルスの生態学的研究に取り組み、動物インフルエンザの疫学ならびに実験的研究を通じて人獣共通感染症であることを確定するとともに、自然界におけるウイルスの存続メカニズムと伝播経路などを明らかにしてきました。


モデルバーン

北海道大学を会場に G8大学サミット開催

7月の北海道洞爺湖サミットに合わせ、「G8大学サミット」が、6月29日から7月1日まで札幌市で開催されます。実行委員長を務める佐伯浩北海道大学総長をはじめ、国内の国公私立大学とG8各国、中国、韓国など40を越す大学のトップが出席します。

テーマは、主要国サミットと同様、大学が環境保護に果たす研究、役割などで、最終日に共同声明札幌宣言を発表する予定です。

サステナビリティ・ウイークも

一方、北海道大学では、昨年9月から「サステナビリティ・アンド・エデュケーション・プロモーション・マラソン」（持続可能な社会づくりに向けた研究・教育推進キャンペーン）として30以上の環境関連分野のシンポジウムやワークショップを展開しています。

特に洞爺湖サミットの直前となる6月下旬から7月上旬までの約2週間を、「サステナビリティ・ウイーク」と名付け、「食糧やエネルギーに利用するための持続的農業」「有珠・洞爺湖の環境」などをテーマに国際シンポジウムを開催します。学術交流会館や総合博物館などの会場で主に研究者・教育従事者・学生向けのほか、6月28日には、市民向けのサイエンスカフェ「地球温暖化による劇変はどこまでわかったか」がJR札幌駅そばの紀伊国屋インナーガーデンで開かれます。

中央ローンと古河講堂

恵迪サークル史

青春興亡の百年・応援団概史

シリーズ7

谷口哲也
（S48年入寮）

【後編】 北海道大学応援団史

第1章　第1期（昭和26年から昭和30年まで）

概観

新制北海道大学発足間もない昭和26年9月、旧制時代の北大予科対小樽高商定期戦は新たに北海道大学対小樽商科大学定期戦として復活した。この商大戦のために応援団が結成され、ここに北海道大学応援団が発足した。

団長を選挙で定める制度で始まったが、翌年からは有志幹部・リーダー制となり、昭和30年頃までは「2年生幹部4年制」ともいうべき形態で活動を行った。

発足とスタイル問題

昭和26年秋、商大戦挙行にあたり、体育会をはじめとする関係者間に応援団結成を要望する声が高まった。当時の市川教養部長も積極的であり、また島学長も大変好意的であった。

応援団長選挙は、教養部学生（1、2年生）の投票によって行われた。クラーク像前での立会演説会、各クラス遊説等が行われ、投票の結果、村岡達郎氏（理類2年）が団長に選出され、次位の森元譲一氏（医進2年）が副団長に就任した。

以上のように、団長、副団長は選挙によって決定されたが、他の幹部やリーダー達は団長、副団長のブレーン的有志であった。

さて、結成された応援団のリーダー内部で所謂応援団スタイルが問題となった。

当時は大学全体が新制大学のあるべき姿を模索して

定期戦再開　応援状を読み上げる北大・村岡達郎団長

いた時期であり、この問題も出るべくして出たものと言えよう。北大の一貫性を説く伝統論、新制と旧制の気質の違いを訴える遺物論等が激しく論議されたが、結論の出ないまま結局は予算や準備期間等の関係により、今後とも検討を続けていくということになった。

旧学制が幕を閉じたのは僅か1年半前のことであり、当時の学生気質の中には旧制時代から一貫して続いているスピリットも色濃く存在していたため、今まで通りでよしとする意見が大勢を占めたのであろう。

ここで旧制の予科応援団との継承関係について見てみると、先述したように旧制予科応援団の最後の幹部は「新しい時代の新しい応援団が出現する事を期する発展的解消」として予科応援団を葬送したのであるから、とにかく予科応援団とは異なったスタイルと気風の応援団が出現するべきと考えていた。ところが、学校の制度組織が急激に変革されても学生の気質自体がさほど変化しない以上、新しく出現する応援団も以前と変わりないものが考えられたのである。この両者の新しい応援団に対するビジョンのギャップは、両者の間に「継承関係」を生むことなく、一方的な「模倣」しか生まなかったようである。

ともあれ、応援方法を含めた応援スタイルの改革問題は、切迫していない状況下においては保留されることとなり、予科応援団的スタイルを採用することになったようである。

商大戦復活

昭和26年9月7日、いよいよ商大戦が挙行された。当時の新聞に「戦後派は芝居もどき―北大、商大応援団交歓ストーム」という見出しで次の記事が掲載されている。

『北大、小樽商大の秋期定期戦は秋晴れの七日北大競技場を中心に六種目に分かれて栄冠を競ったが、競技に先立って三年振りに復活した應援團が札幌大通八丁目廣場で交歓ストームを行った、この日まず午前九時半約三百名の商大勢が破れ紋付に足駄の團長を先頭に札幌入り、大だいこ、小だいこを打ち鳴らして昔し懐しい学生の縫衣高下駄に明るい笑いを送れば両校團長は笑いもよそに真面目くさった顔で大げさな握手を交

昭和29年春季商大戦　挑戦状を読み上げる高根仟団長

し、北大は畳一枚もある激励文をひろげて読み上げれば、商大も一丈余の巻紙をサット流して激励、かくて應援歌にバン声を張り上げ肩を組んでストームを交歓、十一時から再びたいこを打ちながら街頭行進を行い、競技場でバン声を張り上げた。』

商大戦は、旧制時代と同じく春季と秋季の年二度行われ、第○回春季大会、第○回秋季大会と呼ばれたが、旧制時代と異なるところは「総合性」を重視し、定期戦の参加種目数を明確にして総合優勝制の考え方を取り入れたことである。従って運営方法も、主管校の学長を大会長に推し、両校の関係教官を参与として、両校の体育会（商大では学友会）関係学生を実行委員とする定期戦実行委員会を設けて運営した。

2年生幹部4年制

応援団結成初年度の昭和26年には全教養部生により応援団長選挙が行われたが、翌昭和27年度以降は団長選挙は行われず、応援団は全くの有志制となっている。

この時期の応援団は2年生幹部4年制とも言うべき形態であった。応援団活動の主力は1年生2年生の教養部学生であることから、団長、副団長等の幹部は2年生が当たり、学部移行を目途に幹部交代が行われるわけであるが、幹部を退いた3年生4年生も応援リーダーとして参加していた。この形態は昭和30年頃まで続くのであるが、それ以降応援団が恵迪寮に専属化してしまうと全くの2年制へと変わっていった。

学生の気質

学制改革により旧制大学は廃せられ、昭和24年4月には新制大学1期生が入学し、昭和25年3月に1学年のみ残っていた旧制予科3年生が修了して、旧制予科は永遠に幕を降ろした。しかしながら、学生の気質の変化は、その5、6年後に生じたようである。つまり、昭和24年入学の新制1期から昭和26年位までに、入学の学生は旧制の中等教育を受けていた者であり、新制大学に入学しても旧制時代の頃の気風を是とする傾向が強かったように思われる。

しかも、旧帝国大学でありながら内部に旧制高校である予科を有していた特殊性や、現在は既に存在していないが旧制予科を彷彿とさせる機構であった「教養部」制度が、大学改革者の意図とは裏腹に、多くの旧制時代の気風を残存させる結果となった。

しかし、学生の気質の変化は緩やかながら確実に進んでおり、昭和30年頃を境として本格的なアプレゲール（戦後派）が出現し始めた。

第2章　第2期（昭和31年から昭和39年まで）

概観

この時期は応援団が恵迪寮に専属化する時期であり、昭和35年頃より現状を打破しようとする試みがなされ、昭和35年5月の東京遠征、そして昭和37年の第1回国立七大学総合体育大会（七大戦）の北大での開催などが実現し、昭

和40年以降の応援団改革へと続いていくこととなる。

恵迪寮への専属化

昭和29年、応援団は学内公認団体（サークル）として認められ、この年初めて体育会に所属部として加入したが、実際には体育会との関係はほとんどなかったようである。

この時期における応援団の恵迪寮への急速な専属化については、昭和35年度応援団長の阿竹宗彦氏が「應援團史」（昭和53年7月発行）に寄稿して下さった「応援団回顧」から、その実態を見てみよう。

『私が恵迪生活に入った頃（昭和34年）応援団はちょうど一つの転換期を迎えていた。応援団というクラブ組織は以前からあるにはあったが、いわば恵迪寮が応援団そのものであり、目をむいて組織や体制に奔走する必要がなかった。寮生の中で特に怠慢で、寮歌を愛し、バンカラな者が応援団員であると自他共にゆるし、またそれで良かった。そういう気風を好む者が恵迪寮を慕ってきた時代であった。

応援団が―というより恵迪寮が―扱った年中行事は、春秋の対商大定期戦、春の観桜会、秋の寮祭、水産学部追出し位なものであり、恵迪寮から離れてやることと言えば新入生のための寮歌の紹介だけであった。

しかし、恵迪寮にも次第に現代イズムが流れ出し、寮生気質も個人主義化、脱個性化してくるにつれ、恵迪寮のアパート化の傾向が目立ってきた。寮の催しに参加する寮生も次第に少なくなり、自室に閉じこもり、清潔を好み、昔気質のバンカラな行動を嫌う者が多くなった。

この様な風潮の中で、一部の者がかたくなに昔気質を振り廻しているのは、むしろ喜劇的でさえある。私が入寮したのはこんな頃である。しかし、依然として素朴なバーバリズムを好み、寮歌を愛し、恵迪寮と青春を共にしたいという者もかなりいた。彼らはしかしながら、何もしない、というよりは何もできないくせに無理にしようとする応援団には退屈していた。今はなき金山敬一や荒川など、個性的な、一言でいえば旧制高校生タイプの先輩達と、恵迪寮の良い伝統を継いでいくために私は応援団に入り、その改革にとりかかった。』

昭和35年度団長　阿竹宗彦氏

東京遠征応援

昭和35年、阿竹団長は沈滞した応援団の現状を打破する

ために、ローマオリンピックへの出場権を懸けた戸田でのレースに出場するボート部の遠征応援を計画し、5月に実行に移したのである。その経緯経過について、前述の阿竹宗彦氏の「応援団回顧」から続けて引用する。

『恵迪寮即応援団という時代が去った限り、応援団組織の確立が必要であった。組織造りのポイントは全員が一丸となって行動する場を生み出すことである。はっきりとした目的―しかも魅力的な―をもつことである。

私が初めての応援団東京遠征を思いたったのはこんな動機からである。ちょうどローマオリンピック開催年に当り、東北大と共にオリンピック出場有力候補の双璧といわれていた北大ボート部の応援に東京までかけつけるという計画をねり上げていく内に団員も増え、活動も活発になってきた。初めての合宿を石狩川河岸で行ったが、これには新入生も含めて20人近く参加した。私のねらった通り寮生の興味も高まった。またこれを機に体育会との関係も深まってきた。

体育会と応援団の関係はそれまで殆んどないと云って良い状態であった。だから応援団はいわゆる「応援」をする団体としての価値は体育会にも各部にも余り認められていなかった。それはそれでよいとしても、単なる放歌高吟にふけり、ストームをやり、ボロ衣装をまとい、怠惰を誇りとするバーバリズム団体であってはならない。バンカラという形で反骨精神をあらわすことだけでその存在価値が認められる時代は過ぎたのだ。そういう意味で体育会との関係を密にするのは良いことだと思う。この東京遠征には体育会も学生部も協力してくれた。予算集めは主として私がやったが、その他の準備には、田畑、滝沢、中野、関、浪江など同僚が頑張ってくれ、団員でない寮生も支援してくれた。

東京遠征には商大定期戦を上廻る30人の団員が参加した。出発の夜の札幌駅には、新聞に取り上げられたこともあって、大勢の市民の人達が見送りに来てくれた。東大応援部との接触もこれを機にはじまった。彼等は我々に宿舎を提供し、歓迎コンパを開くなどの協力を惜しまなかった。その返礼として、春の六大学東大―明大戦の野球の応援にかけつけたものである。

初の東京遠征　ボートレース応援風景（戸田ボートコース）

ボートは東北大に敗れた。しかし20万円の予算を使って敢行したこの東京遠征は、その後の応援団の充実につながり、2

年後の七大戦総合の基盤となった。』

七大戦の開始

昭和35年9月に応援団長の任期を終えた阿竹宗彦氏は、当時の体育会常任委員長からの強い勧誘を受けて体育会常任委員に就任したが、翌昭和36年5月、常任委員長の任期途中での辞任により、そのあとを継いで第15期常任委員長に推戴された。

阿竹委員長は、体育会の組織を強化し、各部に新しい息吹を入れるためには、これまでも剣道部や柔道部など伝統ある部では毎年行われていたが時期や開催場所がまちまちであるために一般の関心も引かず消滅せんとする傾向にあった旧七帝国大学戦（七帝戦）を統合して国立七大学総合体育大会（七大戦）とし活発化させるのが最も良いと判断した。

昭和36年8月から各大学の体育会等を訪問して提案を行った。多くの困難はあったが、阿竹委員長の熱誠と卓越した手腕が強い連帯感を生み出し、翌昭和37年3月には七大戦の創設が決定され、北大が第1回の主管校となった。

第1回七大戦における北大応援団の活躍は目覚しいものであった。昭和37年度団長吉原照彦氏統率の下に、各部の応援、諸行事、また他大学応援団の接待などに精力的な活動を行い、学内外より高い評価を受けた。この第1回七大戦の時点で応援団が既に存在していた大学は、北大の他には東大（昭和22年創団）と京大（昭和31年創団）のみであったが、これら北大と全くカラーの異なる応援団と接するようになったことは、北大応援団にとって大きな刺激となり、応援団改革への動きに対して拍車をかけることとなった。

なお、東北大、名大、阪大、九大の応援団は、七大戦開始を機に1、2年中に続々と創団された。

第五十回商大戦

昭和35年の60年反安保闘争を境として学生の気質や生活振りにも一層の変化が生じ、商大戦の行事や応援に参加する学生の数が年毎に減少するようになってきた。

そこで、再び商大戦の全学的な盛り上がりを実現していく契機として、昭和39年の第50回商大戦を盛大に挙行することとした。

昭和39年度団長の氏平増之氏を先頭に、大々的な寄付集めを手始めとして、体育会と協力してポスター、パンフレットの製作、発注を精力的に進め、6月6日には商大戦前夜祭ファイヤーストーム、続いて7日には両校対面式、野球応援等が行われることになった。

さていよいよ前夜祭ファイヤーストームで第50回商大戦の幕は切って落とされたが、学生の集まりが悪く、しかも各部の選手達も来なかったために至って低調であり、さっぱり意気が上がらずに終ってしまったようである。

翌日の両校対面式は例年のように盛り上がりを見せ、いざ両校打ちそろって中島球場に野球戦応援に向かおうとした時に雨が降り出してしまい、結局その場で流れ解散のような形になってしまった。商大戦起死回生の策として大きな期待をかけられていた第50回大会ではあったが、変化し

ていく学生気質と不順な天候には抗することができず不成功に終ってしまった。これ以降、商大戦は全く低迷し、各部毎の試合が学内の関心も引かぬまま細々と続けられ、ただ「応援団対面式」のみがマスコミによる見世物としての興味に支えられて続行されることとなった。

そして、既に実質的な存在価値を喪失した見世物として存続している「応援団対面式」こそが商大戦であるとする錯覚が何時しか当然の如く考えられるようになった。この商大戦の暗黒時代の打開は、昭和51年の商大戦再建まで待たねばならない。

応援団改革の方向性

以上のように、この時期は旧制予科時代から応援団活動の基礎基盤ともいえる存在であった小樽商科大学（旧小樽高等商業学校）との対校定期戦が低迷して精彩を失う一方、新たに生まれた国立七大学総合体育大会（七大戦）が清新な雰囲気の下で伸張していく時期であり、北大応援団にとって根本的な改革が必至となってきたといえる。

その避けがたい改革の方向性について、阿竹宗彦氏は先述した「応援団回顧」の中で次のように述べておられる。

『私が体育会の委員長になってから、商大戦、東北大定期戦、地区大会などに積極的に応援団を派遣させるようにした。第1回七大戦開催における応援団の働きはたいしたものだと評価された。しかし私は試合の応援を行うクラブというだけの応援団にはあきたらなかったし、今でも満足していない。北大応援団は恵迪寮の分身であるべきだ―というのが私の変わらぬ意思である。

バンカラという名の素朴なバーバリズム、「暮しは低く想いは高く」というワーズワースの精神に通じる伝統ある恵迪生活と切り離してはいけないと信じている。成吉思汗をかこむコンパにおける無茶飲みも、深夜のストームや放歌高吟の無軌道性も、講義に出席せず終日部屋で論議する不規則性も、それだけを取り上げれば非難に価するかも知れないが、このような形であらわれてくる青年の心の奥にある何ものかを育てる力を恵迪寮は持っている。その恵迪寮の良き伝統を受け継いで後々に残すことが、応援団の第一の使命であることを認識して欲しいと思う。

この認識のもとに行動すれば、応援団が男芸者的存在という非難をうけることはない。バンカラという気風を誤解する寮生が多くなっているときくが、その様な誤解を植えつけてはいないだろうか。精神的なものの反映がないバーバリズムはバンカラではない。寮歌を単にメロディとしてでなく理解し、愛して欲しい。そこには、友情、大志、悲しみに耐える精神、正義、義憤、感動、信頼、その他あらゆる青春の息吹が流れているではないか。

応援団改造論は不必要である。だから我々の時代は全く論じられなかった。羽織、袴の装束が良いかどうか、太鼓の代りに何を使えば良いか、という問題は北大応援団には関係のないことである。金をかけることは応援団の充実につながるものでないという理由で、我々は先輩が残してくれたものをそのまま使った。

その古ぼけた衣装が論じられること自体、私には不思議

である。最近の応援団は活動範囲が広がっている。体育会との関係も良いときく。また応援体制も我々の頃よりずっと組織的になっており、嬉しく思っている。時代に即して行動することは決して悪いことではない。ただ、応援の形や姿ばかりにとらわれず、余りに不自然にバーバリズムを強調することなく、昔からひきつがれてきた良い風習・伝統はなるべく残すようにして欲しいと思う。

試合の応援と同時に北大応援団には、他の大学にないこのような重要な使命があると考えたい。その意味で、寮の種々の行事、商大戦は大切にすべきである。諸君の活躍を祈る。』

昭和40年から始まった「応援団構造改革」が、その後大きな紆余曲折を経ることを思えば、この阿竹宗彦氏のご意見は真に示唆に富んだものであると深く感じ入る。

第3章　第3期（昭和40年から昭和44年まで）

概観

徐々に高まってきた応援団改革への動きは、昭和40年から現実の改革として進められるに至る。その改革は、3年制移行それに続く4年制移行を土台として、それまでの応援団とは気風も応援スタイルも全く異なる新生北大応援団を目指す「応援団構造改革」であった。

ブラスバンド部とリーダー部を擁する新生応援団は昭和42年には一応の完成を見たが、早くも昭和44年には、新生応援団の要とも大前提ともいえるブラスバンド部が分離独立し、更に昭和44年春を以て3年制へ移行し、同時に改革前の和服リーダーが復活することとなった。ここに僅か2年間で新生北大応援団は実質的に瓦解するに至った。

3年制移行

昭和39年9月、応援団改革の第一歩として3年制への移行が決定された。氏平増之団長をはじめとする昭和39年度幹部がそのまま持ち上がって、翌昭和40年度幹部(3年生)を務めたのであるが、幹部内で交替があり、昭和40年度団長は藤田正一氏が就任した。この3年制は、2年生に独自の教養部幹部（団長、参謀、マネージャー）を置くものであり、1年生と2年生による従来の教養部応援団と新たな3年生幹部との合作体制の傾向が強いものである。

2年生の教養部幹部は商大戦を担当し、3年生幹部は七大戦をはじめとするその他の応援を担当することにはなっていたが判然としない点も多く、昭和40年は藤田正一団長が3年生ではあるが商大戦団長を務めた。

応援団構造改革

昭和40年10月、藤田正一氏を団長とする昭和40年度幹部が引退し、替わって吉川圭一氏を団長とする昭和41年度幹部が就任するや、直ちに「応援団構造改革」が決議された。

すなわち、羽織・袴・高下駄・蓬髪に象徴される従来の所謂バンカラな応援団スタイルを一切廃止し、学生服・白手袋・軽快なブラスバンド伴奏で象徴されるスマートな応援団スタイルを採ることとし、その重要な前提としてブラ

スバンドを設置することに決定した。

　従来の応援スタイルを一切捨て去る不退転の決意をもって断行した応援団構造改革であったが、唯一の過渡期的措置として「寮歌部」の設置があった。

　寮歌部は、構造改革の結果、リーダー部、ブラスバンド部と並んで団内に設置されたものである。その名称から寮歌普及・振興を専らとするセクションの如き印象を受けるが、実際は他の二つの部のように専属の団員がいるわけではなく、リーダー部の1年生と2年生が寮歌部員に当たることになっていた。

　寮歌部活動とは、商大戦に際して1年生と2年生団員が長髪・羽織・袴・高下駄の出で立ちで両校対面式を行うことが主たるものである。そして、商大戦の際の2年生団長のことを「寮歌（部）長」と呼んだとのことである。

　構造改革当初の昭和41年5月15日に札幌で行われた商大戦においては、対面式のみ寮歌部の1年生2年生が羽織袴スタイルで行い、続いての野球応援は全員が学生服・白手袋スタイルでブラスバンド演奏とともに行うという徹底ぶりであった。

　しかし、その翌年昭和42年の商大戦からは野球応援も寮歌部の1年生2年生が羽織・袴スタイルで行うという具合になり、昭和44年には、商大戦以外の競技応援においても1年生2年生は羽織・袴スタイルで応援するようになっていた。

　さて、吉川圭一氏を団長とする昭和41年度幹部（3年生）は、そのまま持ち上がって昭和42年度幹部（4年生）となったが、団長は土井興一郎氏に交替した。ここに北大応援団は念願の4年制応援団として確立された。また、昭和42年11月、前月の10月に新たに昭和43年度団長に就任した千川浩治氏をはじめとする新幹部の下、全学的応援団活動への取り組みの一つとして、北大応援団主催による第1回北大寮歌祭が開催された。

ブラスバンド部の分離

　ブラスバンド部が新設されたのは昭和40年10月であるが、翌昭和41年春の商大戦野球戦応援で公式デビューを果し、七大戦にも遠征して応援に大奮闘するとともに七大学応援団ブラスバンド合同演奏にも参加し

第一回北大寮歌祭　学生服とブラスバンドの新生北大応援団

た。ブラスバンド部は新設以来1年足らずにしてかなりの実力を有するに至ったが、早くも昭和44年には、音楽性追求を第一義として活動したいという理由により応援団から分離独立を目指す動きが出てきた。

昭和44年4月の合宿でブラスバンド部分離問題が連日話し合われたが容易に結論が出ず、最終的には昭和44年度団長の吉田務氏の裁断により分離独立が決定した。同年7月に北大主管2度目となる第8回七大戦が開催されたが、既に独立していたブラスバンドは、応援団に協力して応援にパレードに活躍した。その後同年11月には、新たに「吹奏楽研究部」として学生部公認団体となり、ここに名実共に分離独立が完了した。

第4章　第4期（昭和45年から昭和48年まで）

概観

須磨隆氏を団長とする昭和45年度幹部が就任するや、それまでの4年制から3年制への移行、並びに学生服リーダーを基調とする応援スタイルから和服リーダーを基調とする応援スタイルへの転換が決定され、昭和45年4月を以って実行に移された。

3年制移行と和服リーダー制への転換

北大応援団が4年制応援団として体制を整えてから僅か3年で再び3年制へと移行するとともに、昭和40年秋に応援団構造改革を決議して従来の応援スタイルと基本的に訣別してより4年余りで再び旧に復するという目まぐるしい移り変わりである。

3年制の実施のため、須磨隆氏を団長とする幹部は任期半ばの昭和45年春に代替わりを行い、本田彰氏を団長とする昭和45年度幹部が3年生幹部として就任した。

大学紛争の影響

この時期の応援団活動を考えるとき、昭和44年に勃発した大学紛争を度外視することは出来ない。数年来くすぶり続けていた学内の諸問題は70年安保闘争と重なって大学紛争という形で爆発し、北大に未曾有の大混乱が生じたのであった。

かかる大変動の中にあって、果して北大応援団は無風地帯たり得たであろうか。確かに紛争の最中である昭和44年夏には七大戦の主管を成し遂げる等全学的応援団活動を目指す方向性は堅持される一方、昭和44年には寮歌ソノシートを作成し、更に昭和46年度団長柄谷章氏の陣頭指揮の下に計画を練り寮歌15曲を収録したLPレコードを出版するなど地道な努力を積み重ねていたが、応援団が拠って立つべき北大人の心には大きな傷痕が残った。

第5章　第5期（昭和49年から平成9年まで）

概観

木村成二氏を団長とする昭和48年度幹部から4年制移行が提案され、話し合いの結果、昭和49年度は同幹部が持ち上がって4年制へと移行したのである。

4年制による機動力と経験の蓄積を拠り所として、それまでの沈滞を打破して真の全学的応援団を確立するべく、多くの試みが行われた。先達の苦悩に満ちた試行錯誤はここに結実し、これ以降、北大応援団は一定の安定的発展期に入った。

4年制移行

新制大学が4年制である以上、学生の課外活動は4年制を原則とするのが当然であるのに、北大応援団は何故に斯くも振幅の大きい変遷をたどったのか。おそらくかつての教養部制度が、旧制帝国大学時代の付属高等学校である旧制予科の残像を色濃く想起させるものであったために、旧制時代の予科3年と本科3年というイメージが、そのまま教養部2年と学部2年というイメージに重なったのであろう。

また、恵迪寮が予科生の寮からスムーズに教養部生の寮に移行したことも、そのダブルイメージ化に拍車をかける一助となっている。

その結果、直接的な継承関係こそないが、一種の憧憬をもって予科応援団を模倣した出自を持つ北大応援団は、教養部2年を本籍地とする概念から自由になることが大変な困難事であったのだと思われる。いずれにせよ、旧制予科が消滅してから既に60年近い、もはや新制教養部も存在せず、全ては遥か過去の記憶の中に残るのみである。昭和49年4月、北大応援団は5年振りに再び4年制応援団となり、その後は一貫して4年制を堅持して今日に至っている。

体育会との関係

応援団が全学的応援団への活動を推進していくに伴い、体育会との関係を見直さなければならなくなった。応援団改革期当初から、体育会との協力関係を重視する意見が出されている。応援団が、運動部・体育会・一般学生間にスムーズな交流が生じるように、三者の仲介者的役割を担おうとする構想であり、体育会との関係は応援団出身者または応援団現役の体育会常任委員派遣を一つのベースとして、急速に親密なものになっていったようである。

ところが、全学化への努力が積み重ねられていくに従って、新たなビジョンも現れてきた。まず「恵迪寮専属応援団からの脱却を目指した北大応援団は結果的に体育会（運動競技）専属応援団となってしまっており、北大の大黒柱としての独自の北大全学応援団確立のためには体育会脱退も已む無し」とする体育会脱退論である。確かに、京大応援団は創団間もなく体育会から脱退し、独自の全学応援団のスタンスで競技応援を行うとともに、学校祭主催への積極的関与等、幅広い活動を展開している。

その後「単に体育会を異質のものとして否定排除することによって所謂全学応援団へと純化させていくのではなく、現実の問題として応援団と体育会との関係におけるメリット・デメリットを直視し、その上で体育会応援団という要素を内包した全学的応援団となるか否かを決すべき」というビジョンも示されたが、体育会との関係は膠着状態にあったようである。

一つの現象として、昭和37年の阿竹宗彦氏以来絶えることの無かった応援団出身の体育会常任委員幹部が、昭和44年の中司哲雄氏を最後として昭和48年の安藤俊春氏まで途絶えていたという事実がある。昭和49年の4年制移行を契機として全学化への活動強化を行おうとした時、体育会問題の解決は避けて通れないものとなった。

梶井浩氏を団長とする昭和50年度幹部は、昭和50年5月に体育会との話し合いを開始したが、両者の間に横たわっていた偏見や不信は問題の解決を著しく妨げた。

昭和50年10月、谷口哲也を団長とする昭和51年度幹部が就任するや、さっそく話し合いが再開された。両者の根気強い努力により多くの合意点を見出すに至り、同年12月10日、遂に両者の不退転の決意を示すものとして「応援団・体育会本部共同声明」を広く北大全学に発表した。

その共同声明の内容は「北大スポーツ界の更なる発展と充実を目指し、体育会規約第10条第5項の精神に則り、北大応援団と体育会本部は以下の諸点を取り決めることを、ここに表明する」という書き起こしで、「諸競技試合への動員情宣」「体育会活動に対する一般会員（学生）の関心を高めるための情宣活動」「商大戦の運営」「応援団の関与する体育会主催行事（オリエンテーション・合同壮行会・運動会・合同送別会）」「各運動部に対する応援・支援（競技試合応援・壮行会・差し入れ等）」における「協力と分担システムの確立」および「明確化」を取り決めている。

そして、以上の諸点を円滑に実現し実行していくために、恒常的な協議の場（仮称・応援団体育会連絡協議会）の設置を定めている。

ちなみに、体育会規約第10条第5項とは、第10条（運動部、応援団の任務）の中で応援団のみに規定された条項であり、「5、応援団は第4条の事業を応援するものとする。」という内容である。

以上の共同声明発表に至るまでの過程で、応援団と体育会それぞれの目標・活動の相違が明確にされた。応援団の目標は「校風意気の発揚」であり、その目標を実現していく活動は「北大における学生生活に対して、様々な場において、有形無形の応援を行う」ことである。一方、体育会の目標は「体育の向上、スポーツの振興」であり、その目標を実現していく活動は「学内運動競技大会の実施、定期戦の実施、運動部に対する便宜」を行うことである。この相違を踏まえたうえでの両者の協力関係が模索された。

これ以降、いささかの紆余曲折はあったが、関係者の不断の努力もあり、体育会との関係は概ね良好な状態が続いた。

商大戦の再建

体育会問題と並んで商大戦再建も応援団改革期当初からの懸案であった。対校定期戦としての商大戦は実質的に崩壊しており、七大戦や地区体等の陰で各部レベルの交流試合程度のものとなっていた。そして、かつての対校定期戦の「擬制」に過ぎぬ両校応援団対面式のみが、一種の見世物として続けられているに過ぎなかった。

昭和50年5月、北大体育会と北大応援団の双方から小樽商大体育会に対して商大戦の総合対校戦化の提案がなされ、快諾を得た。ただ年度途中のために本格的な予算を組むことが出来ず、小樽で行われる通算61回目の商大戦で先ずは先鞭をつけることに全力を尽くすこととした。

第61回大会実行委員会が発足し、大会長には主管校の学長である実方正雄小樽商科大学学長、副大会長には今村成和北海道大学学長を推戴した。参与には両校学生部長を推戴し、実行委員長に成瀬栄一商大体育会会長、副実行委員長に福井尚登北大体育会常任委員長が当たることとなった。実行委員は両校の体育会委員並びに応援団員による総勢11名であった。

昭和50年6月15日の野球戦当日、短期間ではあったが精力的な宣伝活動の甲斐があって、200名に近い学生が札幌駅に集まった。小樽駅に定刻に着き、対面式会場である小樽東映前に予定通り到着した。しかしながら、商大勢が今回の商大戦（彼らにとっては北大戦）再建の意義や趣旨を充分咀嚼しきれなかったためか、定刻を大幅に遅れて到着し、更には実行委員会から対面式時間の短縮を申し入れたにも拘らず従前どおりの3時間にも及ぶ冗長な進行振りであり、その結果として野球戦開始に間に合わないという大失態を演じ大いに問題を残した。

翌昭和51年6月、再建第2回目である第62回商大戦が札幌で行われた。準備は3月から始められ、予算も両校合わせて20万円を確保することが出来た。

応援団は宣伝活動を担当することになり、応援団からの実行委員である昭和51年度幹部の中紙麦平君、同じく高橋勲君が陣頭指揮を執り、組織的宣伝活動を展開した。

一方、1年生2年生団員による商大戦応援団の団長斉藤憲一君を先頭に、選手激励、壮行会、競技応援等を活発に行った。6月18日の昼休みには、教養部の中講堂前においてラグビー部と野球部の壮行会が行われ、続いて北大ラグビー場でラグビー戦応援が行われた。

翌6月19日は、待望の野球戦である。北大勢は北大教養部前を出発し、駅前通を行進して中島球場へと向かった。先頭には斉藤憲一商大戦応援団団長、続いて梅津邦夫副団長、更に濱田康団旗長、山内茂鼓手長が歩武堂々と進む。

一方、札幌駅頭で出迎えた千原治参謀が白装束も清清しく先導して、総勢3百の商大応援団も内藤克団長を先頭に応援歌・進軍歌を高唱しつつ球場へ向かう。

さて野球戦に先立って、中島球場横広場にて両校の対面式が行われた。千原参謀の司会により式は開始され、まずは両校校歌の交換、そして花束贈呈へと続く。次に、対面式のメインである挑戦状、応戦状の応酬が行われた。商大内藤団長による重厚な挑戦の辞に対して、北大斉藤団長は

意気溢れる応戦の辞を述べ、邀撃の意を示した。引き続いて、対面式に彩りを添える演舞披露が行われ、商大は雲龍型の拍手、胡蝶の舞、そして女装団員による南蛮踊り、北大は風流舞、そしてユーモラスな泥棒踊りが、定式通り披露された。両校団旗長による団旗エールの後、両校寮歌の交歓をもって式を終了し、双方とも意気高らかに中島球場に乗り込んだ。

1塁側スタンドに陣取る北大応援団500名、3塁側スタンドに陣取る商大応援団300名。ホームベースにおける両校応援団幹部の交礼握手の後、北大勢は全員起立しリーダーの振る旗に合わせて厳粛に校歌を斉唱し北大スタンド前に整列する選手を激励した。大会長である今村北大学長の始球式によって試合は開始したが、北大の応援は猛烈であった。リーダー達の音頭に合わせて総勢500名の北大応援団が「ワッショイ、ワッショイ」と熱狂した。中盤になって北大が得点する度にグラウンドになだれ込んでストーム。回が替わる度に寮歌高唱。そして、商大戦名物の野次の応酬。遂に迎えた勝利の瞬間「ウオー」という雄叫びとともに、北大生全員がグラウンドへ飛び出して感激の戦勝ストームを行った。興奮の坩堝の後、選手を称える優勝歌「桑楡哺紅に」が中島球場に静かに力強く流れた。

以上のように、永らくの懸案であった商大戦の総合対校戦としての再建への第一歩が踏み出された。昭和51年度団長として再建に携わった筆者は、当時「これで商大戦も、あと20年くらいは何とかなるな」と幹部の皆で話したことを今でも覚えている。

その後、両校関係者のご努力により商大戦は順調に開催されたが、前述の筆者達の感慨が皮肉なことに的中する結果となり、再建の昭和51年から21年後の平成9年をもって総合対校戦としての商大戦は中断した。

北大百年祝賀前夜祭

昭和51年、北海道大学は創基百周年を迎えた。明治九年に札幌農学校として学府の基が建てられてより一世紀の記念すべき年を迎えたのである。大学主催の記念行事が計画されたが、大学の主体たるべき学生、そして先達である同窓生、更には北大と共に歩んでいただいた市民など、北大百年を寿がんとする者が誰でも自由に参加出来る催しは皆無であった。

そこで、昭和51年度応援団長の谷口哲也が発案させていただき、応援団として「北大百年祝賀前夜祭」を発起することとした。その催しの性質上、学生・教官・同窓生有志によって幅広く構成される実行委員会を設置することとし、学内外に広く呼びかけたところ多くの賛同を得ることが出来、昭和51年2月23日には第1回の実行委員会を開催した。

大会長には星光一北大名誉教授が、実行委員長には矢島武北大名誉教授が、それぞれ正式に推戴され、事務局長には団長谷口哲也が就任することとなった。また、前夜祭の内容は、第1部を「百年記念寮歌祭」とし、第2部を「提燈行列」とすることに決定した。

なお実行委員をお引き受け下さった方々は次の通りであ

る。
松野正彦先生（医学部）小池東一郎先生（工学部）安井勉先生（農学部）山元周行先生（理学部）青山和夫先生（工学部）山畠正男先生（法学部）水野一先生（文学部）板谷實氏（同窓生）阿澄昌夫氏（同）水野俊男氏（学生）浜田康氏（同）竹中秀行氏（同）増元照明氏（同）

さて、実行委員をお引き受けいただいた方々の御尽力により準備は着実に進んでいった。大学側は当初は半信半疑のようであったが、菅原学生部長の御助力もあり、途中から公式行事の関連行事として協賛する旨の申し出があり、欣然受諾した。

北大百年祝賀前夜祭・寮歌祭　星野奇氏を囲んで「瓔珞みがく」を斉唱

昭和51年9月14日当日は朝から生憎の雨降りであったが、寮歌祭会場である北大体育館には続々と参加者が集まり、開会の午後5時には学生と同窓生で満員となった。

ロビーには北大創基百年を記念する特別銘柄清酒「都ぞ弥生」の大樽酒が据えられ、参加者に振舞われた。寮歌祭は盛大に挙行され、後から後から詰め掛ける人達で席が足りなくなってしまうほどであった。

寮歌祭に続いて提燈行列が行われる頃には朝からの雨も上がり、何と2500人以上の提燈行列参加者があった。行列の先頭が北大正門に達した時、未だ最後尾が理学部（現在の総合博物館）前を通過していなかったほどである。提燈行列は寮歌を高唱しつつ駅前通りを南下して大通公園まで行われた。最後は大通公園4丁目に集合して大ストームが行われ、都ぞ弥生の大合唱のうちに幕を下したのであった。

この前夜祭の盛況振りを見た時、北大スピリットが未だ脈々として伝わっていることを痛感した。また同時に、かかる北大スピリットの旗手たるべき北大応援団の責任の重さに襟を正す思いであった。

ブラスバンド問題、再び

応援団構造改革の一環として昭和40年10月に新設されたブラスバンド部が、昭和44年4月、音楽性追求を第一義として活動したいという理由により応援団から分離独立し、同年11月には、新たに「吹奏楽研究部」として学生部公認団体となったことは前述した。

その後、同部は「北大吹奏楽部」と称し、平成15年には

「北大連合吹奏楽団」と改称して今日に至っているが、一貫して「旧友」としての友好関係を保ち、北大主管の七大戦や諸行事、野球応援の際に駆けつけてくれることも多かった。

さて、高田和重君を団長とする昭和57年度幹部が就任するや、活動綱領に専属ブラスバンド隊の結成を掲げた。この部隊は応援団専属（付属）の「助っ人的な組織」であると規定している。

昭和57年5月22日からの北海道六大学野球リーグ戦までに結成が間に合ったとのことであり、同年12月の時点での隊員数は女性1名を含む8名であった。なお翌昭和58年11月には女性4名を含む隊員14名と増加している。

青木崇君を団長とする昭和59年度幹部は、昭和58年10月の就任時に、応援団内に新たにブラスバンド部を設立する方針を示した。その理由は、専属ブラスバンド隊をそれまで以上に各種応援や壮行会に用いて行きたいが、所詮応援団シンパの集まりに過ぎず、応援団員ではない彼らに更なる活動は強制出来ないことから、団内にブラスバンド部を新設するというものであった。

なお、専属ブラスバンド隊は応援団ブラスバンド部が形を成すまでの橋渡し役として今まで通り活動してもらうとともに、女子ブラスバンド部員の受け入れ体制が現状では不充分であることから、その受け皿となってもらうという構想であった。受け皿とは、明春から始める応援団ブラスバンド部員募集に際して、入部希望者のうち女性は専属ブラスバンド隊に所属してもらうという意味である。

ところが、専属ブラスバンド隊有志10名の連署により「現在の専属ブラスバンド隊員1、2年目を女子も含め速やかに団に統合する」旨の要求書が提出され、応援団が考えていた以上に専属ブラスバンド隊は組織的にも精神的にも発展しており、既に応援団内ブラスバンド部を目指して動き始めていたことを初めて認識した。

この方針を巡って応援団と専属ブラスバンド隊との合同会議が数次にわたって持たれた。その結論としては、昭和59年4月から応援団ブラスバンド部（男子部員のみ）を新設し部員募集を行う一方、専属ブラスバンド隊は専属吹奏楽部と改称し、女子部員を含む部員の募集を行う、そして応援団ブラスバンド部の完成をもって専属吹奏楽部は解散するというものであった。

ところが、応援団ブラスバンド部には1名の応募もなく、実質的にブラスバンド部は成立しなかった。昭和59年8月、馬場修三君を団長とする昭和60年度幹部が就任し、10月13日に専属吹奏楽部との話し合いが持たれた。

その後団内で検討が重ねられたが、結果的に専属吹奏楽部は分離独立し、同年12月3日に「北海道大学競技応援吹奏団」が発足した。発足時の吹奏団員数は不明だが、1年後の昭和60年12月時点の団員数は保野直美団長以下10名である。

昭和61年1月に「北海道大学応援吹奏団」と改称したが、各競技応援や諸行事で応援団と共に活動するほか、体育会行事や学校祭行事等に幅広く活躍している。その後、学生部公認団体となり体育会所属団体となった。団員数は平成

4年の19名を最高として常に10名を超えていたが、何故か平成6年を境として一桁の団員数となり、今日に至っている。

かつて応援団から分離独立した「北大吹奏楽部」とは「旧友」として友好関係を保ったが、また新たに分離独立した「北大応援吹奏団」とは「同志」として北大の校風意気の発揚に力を合わせている。

応援団OB会の設立

北大応援団のOB会については、昭和41年3月19日、在学中の応援団OBによるOB会設立に関する談話会がもたれた。

「応援団の変貌しつつある此の時に、応援団の素晴しさを身を以って体験した卒団者を自負する我々でOB会なるものをつくり、旧交を暖め合うとともに現役団員とも接触を持とうではないか」との主旨の下に、取り敢えず在学中の卒団者によるOB会「延齢会」が設けられる運びとなった。会長に諏訪正明氏（昭和38年）、副会長に保田勝範氏（昭和38年）、会計に丸山典弘氏（昭和39年）が就かれた。そして、6月には会誌「延齢」創刊号が出された。

同年11月5日に開かれた延齢会総会において「延齢会が発展して現在の応援団の卒団者会となるべきである」という意見が大勢を占めた。そこで、延齢会と応援団現役との話し合いが行われた結果、延齢会を正式な卒団者会（OB会）とすることが確認され、ここに北海道大学応援団卒団者会「延齢会」が発足した。

昭和45年頃までは延齢会の活動は活発であったが、その後、活動の中心であった会員の異動などの理由により停滞し、実質的に休止状態となっていった。それから10年後の昭和55年11月29日に開催された北海道大学応援第70代記念パーティーの席上、応援団OB会の体制強化をすべきという意見が出され出席者の賛同を得た。

その場で準備会の事務局長的役割を仰せつかった筆者は、現在その活動が一段落している地元北海道のOB会を再建すると共に、近年活発な活動を行っている本州各地のOBとの連帯を深め、近い将来には全国のOBをカバーする全国連合OB会を発足させたいと考え、各地の中心的OBに連絡を取らせていただいた。

しかしながら、特に本州各地のOBを中心として、今回の試みについての手順・手続き、そして時期が不適切であるというご助言やご叱責をいただき、小休止する次第となった。

それから4年後の昭和59年7月、あらためて筆者から北海道在住OBの親睦会の設立を提案したところ、多くのOBのご賛同を頂戴し、9月29日に設立発起人会結成会が開かれた。当日は、横山清氏（昭和32年）、髙井宗宏氏（昭和32年）、熊谷治夫氏（昭和54年）、山田淳氏（昭和57年）、太田英明氏（昭和59年）の諸氏が出席し、この際一挙に北海道地区OB会を発足させるべきではないかという結論が出た。

準備段階で、設立総会会場の手配をはじめとする様々な便宜を計って下さった横山清氏と、発起人会の会場や仮連絡先として研究室を提供して下さった髙井宗宏氏の両先輩

の御尽力により、短期間で設立にこぎ着けることが出来た。昭和59年11月2日、北海道大学応援団・北海道地区OB会設立総会が開催された。出席されたOBは25名で、年齢は70歳代から20歳代までの多彩な顔触れであった。まず会の名称を、北大応援団OB会の名称として由緒があり他地区のOB会の名称とも相通ずるものとして「北海道延齢会」と決定した。続いて審議決定された会規約は、会の精神に沿って簡素を旨とし、次の5条のみ。

第一条　本会は北海道延齢会と称する。

第二条　本会は会員相互の親睦をはかり、併せて北海道大学応援団の後援をはかることを目的とする。

第三条　本会は北海道帝国大学豫科応援団並びに北海道大学応援団に在籍した者、及びその関係者をもって構成する。

第四条　本会は会運営のために必要な役員を置く。

第五条　本会の経費は会費、寄附金、その他の収入をもってあてる。

また、選出された役員は次の通りである。

(順不同、敬称略)

名誉会長　大原久友（昭和7年）会長　山本武（昭和14年）副会長　板谷實（昭和23年）副会長　諏訪正明（昭和38年）

幹事長　横山清（昭和32年）幹事　髙井宗宏（昭和32年）氏平増之（昭和39年）熊谷治夫（昭和54年）山田　淳（昭和57年）青木崇（昭和59年）太田英明（昭和59年）事務局長　谷口哲也（昭和51年）

これ以降、毎年秋に定期総会を開催し、昭和63年からは春季親睦会（後に夏季親睦会となる）としてビール会を開催した。また、昭和44年から20年間にわたり北大応援団顧問を務めていただいた山元周行先生が翌春に定年退官なさることから、昭和63年11月2日、北海道延齢会が主催して「山元先生に感謝する会」が開かれた。

当日の出席者50名、先生に贈呈する感謝の記念品に賛同して下さった方は更に73名にも及び、名残尽きぬ盛大な宴となった。

現在、北海道延齢会は設立から24年を経た。初代役員のうち、大原久友名誉会長、山本武会長は幽冥境を異にして既に久しくなったが、他の役員は健在であり、若手の幹事を順次加えて活動している。なお、現在の役員は次の通りである。

(順不同、敬称略)

顧問　山元周行　会長　板谷實（昭和23年）副会長　横山清（昭和32年）副会長　諏訪正明（昭和38年）

幹事長　髙井宗宏（昭和32年）副幹事長　氏平増之（昭和39年）

幹事　千原治（昭和53年）熊谷治夫（昭和54年）森重正也（昭和54年）高橋浩志（昭和55年）渋谷正志（昭和56年）村田勝（昭和60年）藤原伸也（平成13年）事務局長　谷口哲也（昭和51年）

第6章　第6期（平成10年から現在まで）

概観

昭和49年の4年制実施以降20数年にわたり、北大応援団は安定的発展を遂げてきた。しかし平成9年、恵迪寮と並んで北大応援団の重要な精神的バックボーンである総合対校戦「商大戦」が突然の終焉を迎え、再開されないまま今日に至っている。

商大戦両校応援の中断

明治45年に始まった高商戦を引き継ぎ続行されてきた商大戦も様々な紆余曲折を経たが、昭和51年の第62回大会で総合対校戦として再建されてからは順調に回を重ねていた。年号は昭和から平成へと移ったが、商大戦は応援団や体育会など関係者の努力によって年々充実した内容となっていった。

札幌と小樽で交互に開催され、両校対面式と野球試合等の応援が両校学生動員のもとで行われた。かつては冗長な見世物として肥大化した対面式は、それまでの様式を引き継ぎながらもすっきりとしたものとなり、総合対校戦の両校対面式に相応しいイベントとして確立された。また商大戦期間中は、定期戦の雰囲気を盛り上げるために、「オセロ対決」や「カレー対決」「相撲対決」という企画も実施されたり、一般学生の参加するドッジボールや玉入れも実施され、それぞれ成功していた。

しかし、終焉は突然やってきた。平成9年冬、小樽商大応援団が突然活動の休止を発表した。その理由は「団員不足のため」とのこと。

実は、この平成9年の商大戦の際の商大応援団は現役団員が1名のみであり、在学中の応援団ＯＢ（3、4年生）に臨時で再登板願って両校対面式や試合応援を実施していたのであるが、このＯＢ達が卒業することとなり、遂に休団せざるを得なくなったのである。

翌平成10年春の商大戦までには新入団員を確保して活動を再開しようとの努力は行われたようである。また北大応援団も度々小樽商大を訪れて商大応援団唯一の団員である小原団長と存続について話し合いを重ねた。だが残念ながら小樽商大応援団は復活しなかった。

明確に記述された資料は見当たらないが当時の応援団在団者に確認したところ、平成10年は両校対面式をはじめとする総合対校戦としての行事および両校学生による試合応援はなかったとのことである。

明くる平成11年、小樽商大応援団は商大戦（北大戦）に向けて一時的に復活した。つまり平成9年度の小樽商大応援団団長であった小原氏（4年生）が唯一人の応援団員として再登場してくれたのである。しかし、この年の商大戦はもはや総合対校戦という形ではなく、6月19日に小樽の桜ヶ丘球場で行われる硬式野球戦の応援のみを学内に案内し、両校対面式は球場内で野球応援に先立って行われたに過ぎない。

この平成11年度の商大戦に商大戦応援団幹部として出陣

最後の商大野球戦応援　エールを送る藤原伸也参謀

した藤原伸也君（平成13年度団長）が貴重な写真とともに次の一文を寄せてくれたので紹介する。

『私が2年目の頃の商大戦の写真を数枚送付いたします。当時は商大側が主管で行われましたので、我々が北大（クラーク像前）を出発し途中ストームを交えつつ小樽まで向かいました。私達は対面式を行いましたが、あくまでもメインは対面式後の野球応援としました。商大応援団側もひとりしかいないということで（私達は何とか説得しましたが叶わず）応戦状、挑戦状はなく、参謀エールと野球応援後の団旗エールがかろうじて出来ました。

商大応援団の写真は残っていませんでした。私が引退後も商大の応援団が「正式」に復活したという話は聞きません。残念ながら、もしかすると、もはや応援団を伝える人間自体が商大にいないかもしれません。何とか復活をと願いはすれど難しい現状です。』

最後の商大野球戦応援　北大の得点をストームで喜ぶ

かくして総合対校戦としての商大戦は平成9年度の第83回大会を最後として中断してしまい、今は各部毎の定期試合となっている。

我が北大応援団の淵源は旧制予科応援団に求められるが、スタイルを含めた独自のカラーを直接育んできたのは恵迪寮と総合対校戦としての商大戦であったと確信している。

今日の北大応援団の舳先を定めた大先達である昭和35年

度応援団長の阿竹宗彦氏が先述の「応援団回顧」の最後に述べておられる言葉を再掲したい。

『時代に即して行動することは決して悪いことではない。ただ、応援の形や姿ばかりにとらわれず、余りに不自然にバーバリズムを強調することなく、昔からひきつがれてきた良い風習・伝統はなるべく残すようにして欲しいと思う。

試合の応援と同時に北大応援団には、他の大学にないこのような重要な使命があると考えたい。その意味で、寮の種々の行事、商大戦は大切にすべきである。諸君の活躍を祈る。』

北大応援団カラーの揺籃であり、そのカラーを再生産するエネルギーの供給源である商大戦を失ったことの結果は、既に顕在化し始めているのではなかろうか。

応援団員の減少

今日の応援団で深刻となっている問題として、応援団員の減少がある。新制北海道大学応援団の各年度の幹部の人数をまとめると次の表のようになる。

年　号	人数	年　号	人数
昭和26年	14名	55年	7名
27年	8名	56年	9名
28年	(8名)	57年	5名
29年	12名	58年	7名
30年	9名	59年	4名
31年	6名	60年	7名
32年	12名	61年	9名
33年	13名	62年	6名
34年	18名	63年	2名
35年	19名	平成元年	3名
36年	18名	2年	1名
37年	7名	3年	5名
38年	10名	4年	3名
39年	10名	5年	4名
40年	(10名)	6年	5名
41年	6名	7年	4名
42年	(6名)	8年	6名
43年	7名	9年	2名
44年	5名	10年	2名
45年	6•8名	11年	2名
46年	8名	12年	1名
47年	7名	13年	3名
48年	5名	14年	2名
49年	(5名)	15年	2名
50年	6名	16年	(2名)
51年	9名	17年	3名
52年	7名	18年	(3名)
53年	5名	19年	1名
54年	7名	20年	(1名)

（　）の付いているものは前年度幹部留任

昭和40年の応援団改革期以降、応援団の各学年の人数は概ね5名から10名の間であり、新学期に4学年揃うと20名を超える団員数となった。しかしながら、昭和末年頃より各学年の人数が急激に減少し概ね5名に満たない人数である。

更には平成9年以降の各学年の人数は多くても3名という状態であり、近年は総勢10名に満たない状態が慢性化している。

また、新入団員が全員退団したために学年が欠落し、3年生で幹部に就任して4年生まで留任するケースが平成15年以降続いている。

かかる状況では、如何に一騎当千の意気を持つ応援団員とはいえ人手不足は否めず、自ずと日常活動も縮小傾向とならざるを得ない。

先述したが、旧制時代からの好敵手である小樽商大の応援団は入団者が途絶えて、遂に平成9年で実質的に霧散してしまった。北大応援団の現状を直

視すると、商大応援団の消滅は決して他人事ではない。

最後に

「青春興亡の百年」と題して札幌農学校時代から北海道大学に至るまでの「応援団」の沿革を概ね述べてきた。改めて全文に目を通して見ると、本当に色々な出来事があったと思う。

どの時代においても応援団の目指すものが校風意気の発揚であるならば、その時代その時代の社会潮流とは無縁ではあり得ず、応援団は思潮を敏感に反映しながら歩みを継いできた。そういう意味で応援団の歴史は、まさしく各時代を楡影の学園で過ごした若者の青春の興亡史そのものである。

しかし今日まで応援団は積極的に自らの歩みを外部に語ってこなかった。内部の葛藤や懊悩は他者へは見せず、ゆったりと鷹揚に構えてみせて豪快にバンカラに振る舞ってきた。

昭和53年7月に発行された「應援團史」も応援団内部で応援団の在り方と将来を論じるときの道標として編纂されたものであった。だが時は移り変わり、今日の北大応援団はその存亡にも関わる深刻な団員不足に直面し、永年の好敵手であった小樽商大応援団が同じ団員不足という原因から遂に消滅してしまい、商大戦も総合対抗戦としての面影は最早ない。

今こそ応援団は自らの沿革を含めた等身大の姿を対外的に明らかにし、理解と協力を得なければならない時期である。

この時に、北大応援団にとっても魂の故郷である恵迪寮の同窓会誌に沿革記事を掲載させていただくという好機会を頂けたことに深く感謝するものである。

今年から4年後の平成24年は、初めて高商戦応援が行われたことにより応援団発祥の年とされる明治45年から百年目の年である。果して、その時に北大応援団はどのようになっているのであろうか。

応援団の指揮の下、「都ぞ弥生」の大合唱

年表

年号	西暦	応援団長	応援団関係事項	北大関係・一般事項
明治2	1869			開拓使をおく
9	1876			札幌農学校開校
11	1878		※遊戯会豫科応援団時代	第1回遊戯会開催
32	1899			寄宿舎自治制が認められる
34	1901			創立25年記念祝賀会
38	1905			新寄宿舎新築
40	1907			寄宿舎名を恵迪寮とする 東北帝国大学農科大学創設
44	1911			桜星会発足
45	1912		遊戯会豫科応援団、高商戦の応援を行う	寮歌「都ぞ弥生」発表される 高商戦始まる
大正7	1918	佐藤　一雄		北海道帝国大学創設
8	1919	小泊　重名		医学部設置
9	1920	―	応援団結成なし	桜星会歌「瓔珞みがく」
10	1921	小峰三千男		寮記念祭公開始める
11	1922	館野包三郎	有志豫科応援団結成される	この年で遊戯会中止となる
12	1923	一戸　銀三		関東大震災
13	1924	橋本　吉雄		工学部設置
14	1925	泉　由松		普選法・治安維持法公布
15	1926	宮下　利三		創基50周年式典
昭和2	1927	中村　光慶	応援団団則制定され、公式機関となる	恵迪寮の自炊制度崩壊
3	1928	前田　登		全学ストライキ
4	1929	鳥羽　信次	応援団「桜星会部報」発行	寮生章制定される
5	1930	田村　貢		理学部設置
6	1931	出崎　邦吾		恵迪寮移転　満州事変
7	1932	大原　久友		5.15事件
8	1933	豊山　千陰		「恵迪寮史」刊行　国連脱退
9	1934	梶田　文雄		
10	1935	小林　一雄		
11	1936	笹原　二郎		2.26事件　陸軍大演習
12	1937	松野　正彦	桜星会会則の改正により、桜星会に編入される	日中戦争勃発
13	1938	川口柳之助		寮記念祭公開中止
14	1939	山本　武		
15	1940	星野　力	豫科応援団解散	桜星会30周年記念式典
16	1941			桜星会解散　対米英開戦
17	1942			戦前最後の高商戦
18	1943			クラーク胸像献納
19	1944			豫科修業年限2年となる
20	1945			敗戦
21	1946	山口　哲雄	豫科応援団結成	桜星会発足　高商戦復活
22	1947	多田　邦雄		北海道大学と改称
23	1948	板谷　實		クラーク胸像再建
24	1949	和田　輝義	豫科応援団解散	新制大学1期生入学
25	1950	―	応援団結成なし	豫科最終修了式　豫科消滅
26	1951	村岡　達郎	北海道大学応援団結成	商大戦始まる
27	1952	村上　一	※2年生幹部4年制時代	
28	1953	村上　一		
29	1954	高根　仟	学内公認団体となり、体育会に所属する	
30	1955	佐藤　武夫		
31	1956	川嶋　恒二	※恵迪寮専属2年制時代	
32	1957	永沢　昌久		「都ぞ弥生」歌碑建立
33	1958	野村　勝		

年号	西暦	応援団長	応援団関係事項	北大関係・一般事項
昭和34	1959	壁矢　恵行		
35	1960	阿竹　宗彦	東京遠征応援（ボート部）	
36	1961	本間　丈介		
37	1962	吉原　照彦	七大戦応援始まる	北大主管で第1回七大戦
38	1963	諏訪　正明		
39	1964	氏平　増之	第50回商大戦に取り組む	
40	1965	藤田　正一	3年制へ移行	
41	1966	吉川　圭一	「応援団構造改革」決議	
42	1967	土井興一郎	4年制へ移行	
43	1968	千川　浩治	第1回北大寮歌祭開催	
44	1969	吉田　務	ブラスバンド部分離独立	大学紛争　第8回七大戦
45	1970	須磨　隆	3年制へ移行し、学生服から和服へと基調変更	
		本田　彰		
46	1971	柄谷　章	寮歌LPレコードを出す	
47	1972	藤井　康身		
48	1973	木村　成二		
49	1974	木村　成二	4年制へ移行	
50	1975	梶井　浩	商大戦再建に着手	
51	1976	谷口　哲也	北大百年祝賀前夜祭挙行	創基百周年記念式典、第15回七大戦
52	1977	川瀬　和博		
53	1978	斎藤　憲一	「應援團史」発行	
54	1979	三村　良		
55	1980	山下　徹	70代記念パーティー	
56	1981	菊地　慶男		
57	1982	高田　和重	専属ブラスバンド隊結成、後に専属吹奏楽部と改称	
58	1983	常見　雅彦		新寮開設　第22回七大戦
59	1984	青木　崇	OB会・北海道延齢会設立	
60	1985	馬場　修三	専属吹奏楽部分離独立	北大競技応援吹奏団発足
61	1986	服部　保秀		北大応援吹奏団と改称
62	1987	馬橋　宏和		「恵迪寮史」第2巻刊行
63	1988	宜寿次盛生	山元先生に感謝する会開催	
平成1	1989	瀧波　憲二	吉原照彦先生顧問に就任	
2	1990	宮内　徹也		第29回七大戦
3	1991	瀧川　拓哉		
4	1992	小野　善浩		
5	1993	椿　朋征		
6	1994	松森　宏文		恵迪寮に女子学生入寮
7	1995	横田　哲也		
8	1996	松本　靖治		
9	1997	渡辺　憲弥	商大戦、最後の総合対校戦	小樽商大応援団休止発表、第36回七大戦
10	1998	足達　智	対面式・両校応援なし	
11	1999	宮本健太郎	商大戦、最後の野球戦応援	小樽商大応援団消滅
12	2000	松延章太郎		
13	2001	藤原　伸也		
14	2002	橋本　禎士		
15	2003	堀江　峻太		
16	2004	堀江　峻太		第43回七大戦
17	2005	丸上　裕史	藤田正一先生顧問に就任	
18	2006	丸上　裕史		
19	2007	児玉　康成		恵迪百年記念祭挙行
20	2008	児玉　康成		

恵迪寮同窓会通信

vol. 24

事務所：062-8611　札幌市豊平区平岸1-1㈱ラルズ気付
電話兼Fax(011)815-6377

恵迪寮同窓会第11期第2年次理事会報告

平成20年4月26日(土)16・00〜18・30、札幌パークホテルに於いて恵迪寮同窓会第11期第2年次理事会が開催されました。横山新会長が急用のため欠席されたことは残念でしたが、高井副会長が会長代行の職責を果たされ、会議は活発な意見交換により有意義に終了しました。議事次第に入るに当たり、長年同窓会の活動の先頭に立ってこられ昨年ご逝去された幸健一郎前北海道支部長と辻山昌佑前西日本支部長に黙祷を捧げました。

〈恵迪寮同窓会役員（平成20年4月現在）確認及び補充〉

○名誉会長　繁富一雄（S6、元会長）中瀬篤信（S26、前会長）

○会　　長　横山清（S31）〜平成19年9月22日総会選出

○副 会 長　※高井宗宏（S31、会長代行）※厚谷純吉（S30、北海道支部相談役）※山中義正（S32、東日本支部長）

○会計監査　※大西敞（S30）※小笠原孝之（S31）〜平成19年9月22日総会選出

○本部理事
【北海道支部】山崎克彦（S32）和孝雄（S32）魚山和春（S39）※千川浩治（S40）※山田浄二（S41）【東日本支部】※関口光雄（S39）坂倉雅夫（S44）佐藤文雄（S47）※荒木隆夫（S49）竹下忠彦（S53）【西日本支部】※窪田開拓（S32）※間中俊夫（S33）※伊藤靖久（S38）※入江和彦（S41）※岩井隆郎（S51）

○代表幹事　※白浜憲一（S40）〜平成19年9月22日総会選出

○副代表幹事　※新井三郎（S32、事業）※氏平増之（S38、名簿）※皆川吉郎（S43、会計）

○常任幹事　高橋陽一（S30、現寮担当）※大隈昭二（S40、「恵迪」編集長）

○幹　　事　八重樫幸一（S41）※木村正博（S41）※谷口哲也（S48）今村康弘（H5）

○事 務 局　※佐藤静子（ラルズ）※渕上玲子（H8）

※は本理事会出席者

●本部理事補充者（3名）：規約第7条　理事は会長が指名する。
北海道支部推薦〜山田浄二（S41、道北・旭川恵迪会代表）魚山和春（S39、日高・苫小牧恵迪会幹事長）
東日本支部推薦〜佐藤文雄（S47、支部副幹事長）

●顧問推薦者（3名）：規約第14条　顧問及び名誉会員は、会長が推薦し、理事会において承認する。
北海道支部〜伊東孝（S30）河村征治（S32）
東日本支部〜石川舜（S32）

〈第1号議案〉　第11期第1年次事業・決算報告

1．第11期第1年次事業報告

①　会議の開催

ⅰ　第11期総会　平成19年9月22日(土)北大クラーク会館大集会室

○第10期監査報告及び事業報告・決算の承認

○役員選出　会長　横山清、代表幹事　白浜憲一、会計監査　大西敝・小笠原孝之

ⅱ　第11期第1年次理事会　平成19年4月28日(土)センチュリーロイヤルホテル

②　恵迪「百年記念号」(「恵迪」第7号)発行

③　恵迪寮同窓会ホームページリニューアル完成

④　現寮支援・交流の活性化

2．第11期第1年次決算報告と監査報告

皆川副代表幹事より「単年次決算として初めての黒字決算(128万4千円)となり、その主要因は、恵迪百年記念グッズの販売収入の153万9千円である」との第11期第1年次決算報告がなされた。また、大西会計監事より「全て適正であった」旨の監査報告があった。

〈第2号議案〉　恵迪百年記念事業・決算報告

1．恵迪百年記念事業

①歌碑「都ぞ弥生」改修　②北大恵迪寮歌CD「都ぞ弥生」制作　③ポストカード「都ぞ弥生」制作　④恵迪百年記念オルゴール制作　⑤「恵迪」百年記念号刊行　⑥恵迪寮同窓会管理文化財展示寄贈　⑦恵迪百年記念祭DVD制作

2．恵迪百年記念祭

〈記念祭参加者〉同窓会会員　延べ400名、恵迪寮生・大学院生　延べ100名、北大関係・一般市民　凡そ300名となり、合計800名。

①「恵迪寮100周年記念協賛黒百合植花祭」　②歌碑「都ぞ弥生」改修除幕及び寄贈式　③恵迪寮同窓会第11期総会　④恵迪百年記念式典　⑤恵迪百年記念講演　⑥一万人で歌う「都ぞ弥生」　⑦恵迪百年記念「大寮歌祭」(北海道支部主管)

3．恵迪百年記念事業及び記念行事収支決算

皆川副代表幹事より「個人1003名、企業46社の協賛金合計は1290万9千円に上り、当初予測を大幅に上回った。149万5千円の黒字となった。今後、オルゴールや記念グッズの販売による財政の強化・健全化が期待される」旨の報告があった。

平成19年度収支決算書

（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

収 入 合 計 2,849,606

支 出 合 計 1,565,025

次年度繰越額 1,284,581

〈収入の部〉

科目	19年度予算 (A)	19年度決算 (B)	対予算対比 C＝B－A	備考
1．会費収入				
年度会費収入	600,000	579,000	−21,000	184名
運営支援金収入	720,000	432,000	−288,000	216名
終身会費収入			0	
カンパ収入	250,000	244,000	−6,000	67名
小計	1,570,000	1,255,000	−315,000	
2．事業収入			0	
恵迪グッズ販売収入	100,000	1,539,993	1,439,993	CD・DVD・ポストカード・陣羽織・その他
「恵迪」販売収入		15,080	15,080	本部扱分
広告収入			0	百年記念事業扱
雑収入		14,000	14,000	
小計	100,000	1,569,073	1,469,073	
3．利息収入	4,000	25,533	21,533	
当期収入合計(A)	1,674,000	2,849,606	1,175,606	
4．繰越金			0	
5．基本金戻入収入			0	
収入合計(B)	1,674,000	2,849,606	1,175,606	

〈支出の部〉

科目	19年度予算 (A)	19年度決算 (B)	対予算対比 C＝B－A	備考
1．運営費			0	
事務局費	240,000	240,000	0	書類保管料・事務局費
会議費	350,000	444,507	94,507	理事会・理事会出席旅費等補助
通信費	110,000	237,134	127,134	フレッツ回線料・プロバイダー料・資料送料等
印刷費		17,850	17,850	封筒印刷代
雑費	90,000	107,645	17,645	振込料・郵便手数料等
小計	790,000	1,047,136	257,136	
2．事業費			0	
恵迪発行関係費		12,640	12,640	「恵迪8号」打合せ
同窓会名簿管理費			0	
同窓会名簿発行費			0	
同窓会通信関係費			0	
現寮関係費	30,000	15,324	−14,676	
総会・寮歌祭費			0	北海道支部所管
支部交付金	334,000	334,000	0	
恵迪グッズ制作費		155,925	155,925	陣羽織・寮歌集
小計	364,000	517,889	153,889	
3．借入金返済			0	
4．予備費			0	
当期支出合計(C)	1,154,000	1,565,025	411,025	
5．基本金繰入支出			0	
6．百年記念事業繰入れ			0	
支出合計(D)	1,154,000	1,565,025	411,025	

恵迪100周年記念事業収支決算書

（平成18年11月～平成20年3月）

	（除基金収支）	（含基金収支）
収入合計	14,669,468	16,669,468
支出合計	13,173,783	15,173,783
収支差額	1,495,685	1,495,685

科目	当初予算 (A)	決算 (B)	対予算対比 C＝B－A	備考
1．協賛金収入				
個人	7,500,000	10,519,000	3,019,000	
法人	2,500,000		－2,500,000	
2．広告収入		2,390,000	2,390,000	46件
3．オルゴール販売	3,800,000	1,745,000	－2,055,000	44台
4．その他収入		15,468	15,468	利息収入・オルゴール送料代
事業収入合計	**13,800,000**	**14,669,468**	**869,468**	
5．基本金戻入収入	2,000,000	2,000,000	0	
収入合計	**15,800,000**	**16,669,468**	**869,468**	

〈支出の部〉

科目	当初予算	決算	差引	備考
	(A)	(B)	C＝B－A	
1．運営費				
会議費	300,000	480,396	180,396	
総会費	100,000	238,770	138,770	
協賛金依頼経費	1,000,000	868,987	－131,013	
通信費	200,000	487,720	287,720	
雑費	100,000	436,299	336,299	
小計	**1,700,000**	**2,512,172**	**812,172**	
2．記念・行事費				
記念開識社	50,000	40,000	－10,000	
記念式典費	300,000	1,630,079	1,330,079	資料印刷・交響楽団謝礼・総会弁当代・手拭・記念ポスター
記念寮歌祭費			0	北海道支部所管
小計	**350,000**	**1,670,079**	**1,320,079**	
3．記念事業費				
都ぞ弥生歌碑改修費	1,400,000	1,519,020	119,020	
博物館展示費		344,550	344,550	開拓村記念プレート
記念寮歌CD制作費	1,400,000	1,516,038	116,038	
記念「恵迪」発刊費	2,000,000	1,421,194	－578,806	送料込み
オルゴール作成費	3,500,000	3,516,500	16,500	
記念ハガキ作成費	210,000	420,000	210,000	
記念DVD制作費	200,000	254,230	54,230	
小計	**8,710,000**	**8,991,532**	**281,532**	
4．予備費				
事業支出合計	**10,760,000**	**13,173,783**	**2,413,783**	
5．基本金繰入支出	2,000,000	2,000,000	0	
支出合計	**12,760,000**	**15,173,783**	**2,413,783**	

〈第3号議案〉支部交付金の配分

〈平成20年度支部交付金〉

支部名	平成19年度会費の納入内訳						平成20年度	備考
	年度会費		終身会費		計		支部交付金	
	人数	金額	人数	金額	人数	金額	50%	
北海道	71	213,000			71	213,000	107,000	
東日本	92	303,000			92	303,000	152,000	
西日本	21	63,000			21	63,000	100,000	特例措置
その他					0	0		
計	184	579,000	0	0	184	579,000	359,000	

〈第4号議案〉第11期第2年次事業計画と予算案

1．第11期第2年次事業計画（平成20年4月1日～平成21年3月31日）

① 第11期第2年次理事会開催
平成20年4月26日(土)　札幌パークホテル

② 役員会開催：随時

③ 各担当部会開催：随時

④ 「○○都・府・県恵迪会」又は「○○ブロック恵迪会」の結成

i　恵迪寮同窓会創立30周年（2013年）までに、東日本・西日本支部の全国の都府県又はブロックに「恵迪会」を立ち上げる。

ii　そのための組織強化費として、特別予算を組む。

⑤ 恵迪寮同窓会創立25周年記念行事

i　西日本支部主管の「平成20年度大寮歌祭」において特別功労者を表彰する。

ii　恵迪寮同窓会25年の沿革史をまとめる…髙井副会長担当

⑥ 会誌「恵迪」第8号刊行：6月発行予定、120頁、2200部

⑦ 「同窓名簿」クリーニング及び平成21年度を目指し「同窓名簿」改訂

⑧ 記念グッズ販売

i　恵迪百年記念グッズの販売を組織的に展開し、同窓会財政基盤の強化・健全化を図る。

ii 販売ルート 北大エルムプロジェクト・恵迪寮同窓会3支部・恵迪寮同窓会本部

⑨ 同窓会ホームページの充実

⑩ 恵迪寮同窓会文化財展示寄贈

⑪ 現恵迪寮生支援・交流の活性化
「観桜会」(5/6)、「第100回恵迪寮祭」において支援・交流を図る。

2. 第11期第2年次予算案

① 第11期第2年次予算案

② 会費の徴収方法について、金融機関の「口座振替」導入を検討する

③ 終身会員からの「運営支援金」徴収強化について

〈第5号議案〉平成20年度「大寮歌祭」(西日本支部主管)

日時:2008年9月27日(土) 13・30〜19・00
場所:京都第2タワーホテル JR京都駅前東

〈大会 式次第〉

第一部 開識社 13・30〜15・30 会場:霊山歴史館
(現地集合)
受付:15・30〜16・30
会場:京都第2タワーホテル 1Fロビー

第二部 西日本支部総会 16・30〜17・00
会場:京都第2タワーホテル 1Fレストラン

第三部 大寮歌祭及び懇親会 17・00〜19・00
会場:京都第2タワーホテル 1Fレストラン

番外編 懇親会二次会(希望者のみ)
会場:二軒茶屋 中村楼

〈会費〉
本人 7000円 女性及び中学生 3500円 小学生以下無料

〈第6号議案〉各支部の平成19年度活動報告及び平成20年度各支部の活動計画

1. 東日本支部

① 平成19年度活動報告

i 「恵迪百年記念事業」への参画
支部目標の金額50万円を達成できた。
式典参加役員を中心とした結団式・先発役員による前日の準備支援
当日の会場での支援(案内・寮歌祭会場受付等)

ii 平成19年10月27日、東京海洋大学楽水会館にて「恵迪寮命名百年を祝う大寮歌祭」を開催。東京商船大学など他校のOBの方々も含め80人近い参加者。

② 平成20年度活動計画

i 今年度寮歌祭 10月4日(土)船橋市・船橋グランドホテルにて開催を予定。

ii 幹事会の開催
約2カ月に1回のペースで開催を予定

iii 平成21年度「大寮歌祭」の準備。

iv 恵迪寮同窓会会員の増強対策の検討と実行。

③　財政状況
現在のところ健全財政にて推移しているが、今後の会員増強対策の実行に当っては相応の費用が必要と思われるので、収入に見合った対策を実行したい。

2．西日本支部
①　平成19年度活動報告
ⅰ　役員会
ⅱ　行事「恵迪」発送、恵迪百年記念祭への出席、CD販売PR活動、歌い始めの会
ⅲ　組織活動　地域幹事の指名
②　平成20年度活動計画
ⅰ　役員会　5月以降8月まで　月2～3回
ⅱ　行事　9月27日(土)　恵迪寮同窓会西日本大会(京都)
ⅲ　組織活動　地域恵迪会の設立強化
ⅳ　課題と問題点　地域的広がりに対応した、会員勧誘と地域恵迪会への支援方法の工夫。

3．北海道支部
①　平成19年度活動報告
ⅰ　恵迪百年記念事業及び9月22日恵迪百年記念祭を成功させることが出来、支部の組織的活動が活性化し、有力な支部幹事と大学院生を中心とした若手幹事候補を迎えた。
ⅱ　北海道支部関係の記念事業協賛金は、個人359名　400万5千円、企業33件145万円。合計545万5千円。記念祭「大寮歌祭」参加者は約300名で、収支は約30万円の黒字になった。
ⅲ　現恵迪寮との交流が強化された
ⅳ　8月4日第1回恵迪夏祭り（ビール会）を開催し、新しい親睦の形を実現した。
②　平成20年度基本方針と計画
〈基本方針〉
ⅰ　各地区恵迪会の自主性を尊重しつつ組織強化と連携を強める。
ⅱ　現恵迪寮の各種行事への積極的な参加・交流を深化させる。
ⅲ　百年記念グッズ販売を促進し、支部財政を強化する。
ⅳ　S40年入寮以降の各年次若手幹事を発掘する。
ⅴ　現在の6部会を4部会に統合し、部会の効率的な運営を構築する。

〈第7号議案〉北大連合同窓会加盟について

1．北大連合同窓会「設立の理念」

2．北大連合同窓会加盟の意義
①　「設立の理念」に協賛し、北海道大学を応援する。
②　北海道大学との連携を強化し、相互支援の体制を作る。
③　恵迪寮同窓会が展開する活動において、北海道大学のソフトとハードを有効に活用する。

3．北大連合同窓会からの加盟の訴え

北海道支部ニュース

1．恵迪百年記念祭の総括

感激の再会あり、感動の「都ぞ弥生」大合唱あり、そして厳粛な儀式ありの「恵迪百年記念祭」を平成19年9月22日、大盛況のうちに終えることができた。

その記念事業及び記念行事の総括と収支の中間決算のため恵迪百年実行委員会が現恵迪寮生代表も含めて、10月13日ホテル札幌弥生で開催された。個人の拠出金は948名（うち北海道354名、東日本457名、西日本126名、遺族その他11名）から、総額1044万7千円寄せられたとの報告がなされた。これは予算を約300万円上回るものであり、そのことを見ても同窓会員の恵迪寮に対する熱い想いをうかがい知ることができた。（最終的には、個人998名、1047万2千円）

2．第99回恵迪寮祭・寮歌祭への参加

平成19年10月31日に北大生協食堂「はるにれ」で開催された第99回恵迪寮祭・寮歌祭に、当支部からも厚谷純吉君（S30）、高橋陽一君（S30）、大限昭二君（S40）の3名の役員が参加し大いに懇親を深めた。

3．幸健一郎前北海道支部長のご逝去

前支部長幸健一郎君（S30）は、恵迪寮同窓会の設立からその後の運営にいたるまで、同窓会の先頭に立ってご活躍された方であり（会誌「恵迪」第四号の中瀬篤信前同窓会会長（S26）「恵迪寮同窓会設立の足取り」参照）、当支部からも平成19年11月10日のお通夜及び翌11日の告別式のお手伝いをさせていただいた。

前支部長が好きだった寮歌を奏でる中で同君と最後のお別れができたことに、感慨深いものを感じた。

4．平成20年度「寮歌歌始めの会」開催

1月26日に氷雪の門において、佐伯総長他2名のご来賓をお招きし、現恵迪寮生を含む100名程が集まる中で、恒例の寮歌歌始めの会を開催した。

歌始めの会に先立ち、横山清同窓会会長（S31）の叙勲（藍綬褒章、フィンランド獅子勲章騎士一級章）お祝いの会、及び北海道支部総会が行われた。

5．財政基盤強化策の実施

同窓会の財政基盤は会員各位の会費を基本としますが、グッズ販売等の事業収入も大きな柱です。そこで、以下に予定されている北大の諸式典の機会をとらえ、式典会場で北大生協が行う販売活動に当支部から販売促進要員を派遣し、百年記念グッズ（CD、ポストカード、DVD、百年記念号等）の売上増強に努めることとしています。

① 3月23日：北海道大学卒業パーティー2008（札幌グランドホテル）
② 3月25日：卒業式（北大体育館）
③ 4月8日：入学式（札幌コンベンションセンター）

6．平成20年度の今後の事業予定

恵迪寮同窓会北海道支部　２００８年度事業計画〈保存版〉に記載のとおりです。

会員皆様のご協力をお願いします。

（文責：北海道支部幹事長　八重樫幸一）

集え！　真夏の寮歌祭

恵迪寮同窓会　第２回恵迪夏祭り

北海道はこの夏も猛暑、酷暑が予想されます。こうした地球温暖化に負けることなく、会員一同、冷たいビールを飲み干し、寮歌を高唱し、暑さを吹き飛ばそうではありませんか。

当日は、昨年９月の百年記念祭の映像や恵迪寮の今昔を描いた昨年放送のNHK「新日本紀行ふたたび」のDVDを放映します。歌い放題、飲み放題、会員の講話や一芸披露も歓迎します。

◇

日時：７月26日(土)午後１時から３時ごろまで

会場：ライオン狸小路店（札幌市中央区南２条西２丁目・狸小路２丁目）

会費：3,000円（２時間飲み放題）

出欠：出席の方は、７月19日(土)までに、下記までご連絡下さい。

電　話：恵迪寮同窓会北海道支部　事務局　011-815-6377

メール：恵迪寮同窓会北海道支部

副幹事長　谷口哲也アドレス　poirot@gray.plala.or.jp

東日本支部ニュース

恵迪101年（平成20年）
東日本支部主催『大寮歌祭』開催日程決まる！

日　時：平成20年10月4日(土)

場　所：千葉県船橋市（船橋グランドホテル）

支部行事等の報告

①8月26日　横浜寮歌祭参加　於：新横浜プリンスホテル

②9月15日　壮行会(結団式)　於：北大東京同窓会事務所

③9月22日　恵迪寮百年記念祭参加　於：札幌北大構内

④10月6日　東京校歌祭参加　於：日比谷公会堂

⑤10月10日　日本寮歌祭参加　於：新宿ＮＳビル

⑥10月14日　静岡寮歌祭参加　於：ホテルアソシア静岡ターミナル（北大予科が幹事校）

⑦10月27日　『恵迪寮』命名百周年を祝う記念大寮歌祭開催

雨台風の中、予定通り品川の東京海洋大学構内「楽水會館　鈴木善幸ホール」で開催しました。豪雨の中80名余りの参加者がありました。

東京海洋大の学長・同窓会「楽水会」理事・事務局長に加え友誼校（東京商船学校・山形高校・一高・東京・富山・東北・東大・学習院）の参加もありました。

〈一部〉海洋大　加藤秀弘（S46）研究室・院生による東京海洋大学構内の「鯨ギャラリー（世界最大の

セミクジラ骨格展示）」解説ツアーと水産資料館の公開
〈二部〉　恵迪寮大寮歌祭　恵迪寮命名百周年を祝い乾杯

⑧10月28日　千葉寮歌祭参加
　千葉県　船橋グランドホテル
　前日の台風一過、当日は好天気。前日の幹事団の心掛けが、前日参加の他校の方々に問われましたが？（それだけ北大寮歌祭は他校の方々に注目されているのでしょうね。有り難いことです）

⑨11月18日　群馬寮歌祭参加　マーキュリーホテル

⑩12月3日　支部役員会兼忘年会
　品川インターシティ　地下1階
当日の主な議題
　恵迪寮命名百周年を祝う記念大寮歌祭会計報告
　恵迪101年（平成20年）東日本支部主催『大寮歌祭』日程・会場検討
　忘年会

⑪恵迪101年（平成20年）新春合同寮歌祭参加　1月14日銀座7丁目ライオン
　「東日本支部の寮歌歌い初め」と位置付けたが、欠席者多数。人数は少ないがしっかり、堂々とトップバッターで「都ぞ弥生」を歌い、他校の先輩と恵迪101年の新春を祝う。

西日本支部ニュース

北大関西同窓会「第1回　賀詞交歓会」開催される　寮歌を大いに高吟

植松　高志（S44年入寮）

　2008年1月6日㈰12時30分～15時30分　北大会館（大阪駅前第2ビル）にて「第1回　賀詞交歓会」が開催されました。
　そもそも「賀詞交換会」は、昨年11月4日にお亡くなりになられた「辻山昌佑さん（S30　農経）」が北大会館で賀詞交歓を是非やろうではないかという声掛けで、10月はじめ頃その構想を数人のメンバーにお話されたところから準備が始まりました。
　世話人メンバーは北大関西同窓会から貴田博（S25　経）と中野昭信（S28　農生）、恵迪寮同窓会西日本支部から入江和彦（S45　水漁）と植松高志（S48　法）、関西地区北大応援団から窪田開拓（S36　工鉱）と岩井隆郎（S56　工原）それに北大関西エルム会から大野正浩（S36　水製）と松本直彦（S40　獣）。その第1回打ち合わせ会は10月31日夕刻ということで、それぞれメンバーが北大会館に集合しました。ところが、まとめ役の辻山さんが時間になってもお越しにならないのでご自宅に連絡を取ると、たった今、急遽入院されたとのことでした。入院して間もない11月4

日にお亡くなりになったとの悲報が届き、11月6日お通夜、7日告別式でした。北大同窓生が沢山参列され、「都ぞ弥生」と「別離の歌」を全員で奏で葬送の曲としました。今まで北大同窓生のために献身的にお世話をされてきた辻山さんへ、のせめてもの恩返しであったと思います。その様な突然の悲しい出来事があっただけに、辻山さんの遺言ともいうべき賀詞交歓会を是非成功させなくてはと言うのが世話人メンバーの思いでした。

２００８年1月6日の本番には40余名もの方々が参加下さり、北大会館は溢れ返りました。交歓会での年始のご挨拶は、関西同窓会会長の遠藤彰三（S37　工鉱）氏、名誉会長の牧野文雄（S17　工土）氏、乾杯の音頭は青木孝（S23　工冶）氏で開宴となりました。

また、窪田開拓さんからは辻山さんを偲ぶお話と、この交歓会は辻山さんの長年の念願であったとの紹介があり、皆この会の持つ意味を嚙み締めることとなりました。お酒も入りのども潤い、寮歌と懐かしの文部省唱歌の大合唱となりました。青春の真っ只中の、それぞれの北大時代を思い浮かべ大いに高吟（うたい）ました。自分の愛唱した懐かしの寮歌はことのほか大きな声を張り上げ、また、作歌作曲者についての交友や消息等もそれぞれから紹介していただきました。それは普段聞くことのできない貴重なお話でした。

参考までに歌い上げました寮歌と文部省唱歌の題名を紹介しておきます。

「都ぞ弥生」（M45年）「瓔珞みがく」（T9年桜星会歌）「永遠の幸」（札幌農学校校歌）「魔神の呪い」（T6年）「春雨に濡る」（T12年）「別離の歌」（S6年閉寮記念歌）「タンネの氷柱」（S8年）「津軽の滄海の」（S13年）「湖に星の散るなり」（S16年）「春来にけらし」（S17年）「ストームの歌」（M38年頃）などの11曲です。

さらに文部省唱歌を中心にした懐かしの歌は、「紅葉」「ふるさと」「ふじの山」「茶摘み」「若葉」「朧月夜」「荒城の月」「赤とんぼ」「たきび」等々です。ほぼ2時間歌い通しの大酒宴となりました。

昭和17年卒業で今年88歳になられる参加者最高齢の牧野名誉会長は、自らパソコンで大きな文字の寮歌集を作成してこられるという準備の良さでした。応援団出身の私もその若々しく張りのあるお声には敬服いたしました。

次いで、全員当たりはずれのない「福引」の後、今回の賀詞交歓会の締めくくりは恒例の肩を組んでの「都ぞ弥生」の大合唱でした。

この初めての賀詞交歓会には、昭和17年卒業の大先輩から平成3年の若き卒業生（末永伸正・理地）―まで40余名が集い、お互い心の通う「自治の宴」を楽しむことができました。

来年以降も毎年参加しますとの牧野名誉会長のお話と、秋の関西同窓会には１２０人以上のご参集を目指したいとの遠藤会長の力強いお言葉で閉宴となりました。

西日本大会の観光ガイド　京都から宇治へ

内藤　拓
（S34年入寮）

昨年京都への観光客は前年より105％の伸びで4750万人。今年も大きく増える見込みで春や秋のシーズンは宿の手配が大変です。外人の増加に加えて、海外旅行を一通り終えた日本人が日本の良さを再認識して戻って来ることも多いとか。単に寺社仏閣を廻る旅から、町家めぐり、町家宿泊、京料理の教室など体験コースも増えています。行政側も、京都市中心部の建物に高さ制限を加えたり、独自の防火条例で伝統的な木造建築が建てられるようにしたり工夫を凝らしている。全国チェーンのCVSの店舗の外装や広告についても、ちょっとしたことですが、配色を変えたり、京都市の中心部を流れる鴨川沿いのネオンの禁止など厳しい規制をしたり、世界に通用する観光都市への努力が少しずつなされています。電柱の地下埋没は未だですが、入洛の折にはそういった面も是非観察して下さい。恵迪寮同窓会の幹事より今年の寮歌祭は京都でやるので何か京都の裏の見所でも書くように言われました。しかし考えてみると、酒を売るという仕事柄、料理屋以外殆んど何も知らない自分自身に愕然とし、ならば私の住んでいる宇治の宣伝でもと思い筆を取りました。

宇治市には北大の卒業生も結構在住しておられますし、地元の学校から北大への進学者も増えてきています。宇治市植物公園の園長は本間和枝さん（S50農・農学科）、京都エルム会の会長、山田昌次さん（S36水・遠洋漁業学科）の経営されている花豊造園の基盤は宇治市の丘陵地です。宇治CCでは法学部のOBを中心に年2回コンペが行われています。

さて今年は源氏物語が記録のうえで確認されてから丁度1000年ということで、歴史や文化を後世に残そうと1000年紀行事があちこちで開催されています。源氏物語の舞台となったところは京都市内だが光源氏の亡きあと、その子「薫」と孫「匂宮」を主人公にした部分は物語54帖のうち45帖から最後まで、宇治十帖と呼ばれ宇治が舞台です。宇治十帖にちなみ物語の舞台となった場所が特定され、江戸時代に宇治橋から宇治上神社、三室戸にかけての周辺に「橋姫」「浮橋」「蜻蛉」などの古跡が置かれました。京都市内から少し離れているためか、見学コースから外れることが多いですが、一見の価値ある所だと住人としては強く感じます。京都から足を伸ばして、お茶と歴史の宇治で住時に想いを馳せてください。取り敢えず京阪電鉄或いはJR宇治駅周辺の主要スポットのみ案内させて頂きます。

◎平等院

10円玉に刻印された鳳凰堂でおなじみです。あとで述べる宇治神社、宇治上神社とともに1994年世界遺産に。平成16年から大修理事業が行われていたが、昨年9月に完成。平等院ミュージアム鳳翔館も綺麗になり、雲中供養菩薩など写実的な仏像が良く判るように展示されている。

◎宇治上神社、宇治神社

日本最古の神社建築。宇治川有等の閑静な森の中にある

こじんまりとした神社。本殿では昨秋ハープ演奏会も開催されたが、紅葉の中での雰囲気はえもいわれぬものであった。

◎興聖寺

道元禅師に伏見で開祖され１６４８年に宇治に再建。宇治川畔にある石門から続くなだらかな登りの琴坂を行くと中国風の白い楼閣に辿り着く。伏見城の遺構を移した本堂には切腹あとの血糊の残る天井、鶯帳りの廊下と往時を彷佛とさせるものがある。

◎宇治源氏物語ミュージアム

平成10年11月に完成。館長は瀬戸内寂聴さん。映像を通して源氏物語の世界を誰でも親しめるようになっている。宇治十帖の古跡巡りやさわらびの道を散策し、源氏物語の薀蓄を傾けるには必見の場所です。

◎三室戸寺

西国観音霊場十番札所で本山修験宗の別格本山。１２００年の建立。平安時代西行法師の「暮れつる秋のかたみにしはしみんもみじちらす三室戸の山」の句があるように、バックの山とともに宇治の紅葉の名所でもある。京都の花寺として名を馳せており、つつじ、しゃくなげ、蓮を求めて来る人が増えている。

◎黄檗山／万福寺

１６５４年中国福建省から渡来の隠元禅師の建立による黄檗宗の大本山。境内では中国から伝えられた晋茶料理が食べられる。坐禅研修も行われている。私も座禅中に振り降ろされた時の痛さよりも警策音の大きさにびっくりしたことを昨日のように憶えている。

他にも見るべき処は多いのですが、上記6か所くらいがちょうど一日の所要時間かと思います。寮歌祭はあとの一日を宇治で楽しんで下さい。

恵迪寮同窓会西日本支部の今昔

間中　俊夫
（S33年入寮）

恵迪寮同窓会西日本支部の発祥は昭和58年春、第二代恵迪寮の閉寮の際に創立された「恵迪寮同窓会」規約第四条による。（「恵迪寮同窓会」創立の経緯については本誌第四号所載の中瀬名誉会長による「恵迪寮同窓会設立の足取り」の記事に詳説）

それまでにも関西には初代恵迪寮出身者で関西在住の有志による「関西恵迪会」なる組織が昭和37年に発足し、平成8年の恵迪寮同窓会西日本大会時まで存在した。(この発足〜解散の経緯は同じく本誌第四号の故辻山昌佑前西日本支部長の「関西恵迪会の歴史と現況」の記事に詳しい）

西日本支部の活動は他支部同様、日常活動としての会員増強、会員相互の連絡、親睦を基本として、さらに3年毎に巡って来る各支部持ち回りの恵迪寮同窓会大会を成功させることにある。幸いにして西日本では、5年前に北大関西同窓会が地の利を得た大阪駅前に自前の会館を取得した。それに合わせて西日本支部ではその会館に拠点を設置することが出来た。

これまでの支部拠点は支部役員が変わる毎に変更を余儀なくされていたが、これで漸く活動を進める上での安住の地を得たことになる。事実、役員連絡会議をはじめとして、諸会合や連絡、待ち合わせなどの便宜が向上したことは間違いない。

支部としてのメーンイベント恵迪寮同窓会大会が7回目の大寮歌祭西日本大会として今年度は京都にて開催される。それを機に西日本での大会の経緯を整理する意味で概説する。

【第1回】'88恵迪寮同窓会大阪大会
昭和63年8月12日、13日
会場・神戸須磨荘

☆大会概要
第1部　須磨水族園見学（園長・吉田啓正氏（S22年入寮）
須磨海岸での海水浴
第2部　支部総会（恵迪寮の存続決議、閉寮記念ビデオ発表）
第3部　須磨海浜における大ファイアーストームとなっており、ビデオ制作時の苦労話、国立公園内でのファイアーストーム実施にこぎつけるまでの苦心談なども辻山さんの追悼記事に詳しく述べられている。

【第2回】'92恵迪寮同窓会大阪大会
平成4年7月4日
会場　大阪港ハーバービレッジ　プレジャーレストラン「サイレン」

☆大会概要
第1部　周辺周遊（サンタマリア号による港内周遊・海遊館見学など）
第2部　支部総会・大寮歌祭
周辺にはプレジャー施設などが多く、家族連れには好評だった。

【第3回】'96恵迪寮同窓会　大寮歌祭西日本大会
平成8年9月14日
会場　神戸シーパル須磨（第1回須磨荘の立替建築物）

☆大会概要
第1部　開識社・演題「恵迪の自治」各年代層の5名による意見の開陳
第2部　支部総会・大寮歌祭
第3部　須磨海浜における大ファイアーストーム
当回はオプションツアーとして姫路城めぐり、昭和26年入寮組の飛鳥ツアーなどが催された。また、前年9月の本部総会で規約が改定され、各支部で3年毎に大寮歌祭を受け持つことになった。この回は西日本支部としては最初の大会である。また前年の阪神・淡路大震災では多数の被災会員が出たが、死亡会員が出なかったのは幸いであった。

【第4回】'99恵迪寮同窓会　大寮歌祭西日本大会
平成11年7月3日
会場　神戸異人館街六甲荘

☆大会概要
第1部　「恵迪四方山話」
小島悦吉氏（S5年入寮）
恵迪寮史編纂を巡って
中瀬篤信氏（S26年入寮）
恵迪寮同窓会創立時を回顧して
中野昭信氏（S22年入寮）
恵迪十傑について
他に合田氏（S33年入寮）小寺氏（S53年入寮）
第2部　支部総会・大寮歌祭
当回もオプションツアーとして有馬・宝塚巡りを開催。

【第5回】'02恵迪寮同窓会　大寮歌祭西日本大会
平成14年8月31日
会場　京都市内
第1部　開識社（同志社大学今出川校舎）
同志社社史資料室　本井康博先生による講演
W・Sクラーク先生と新島襄先生
第2部　支部総会・大寮歌祭（京都第2タワーホテル）
当回は同志社の好意により開識社に先立ち今出川校舎内の重要文化財群参観の機会が得られた。（クラーク記念館他）

【第6回】'05恵迪寮同窓会　大寮歌祭西日本大会
平成17年7月16日
会場　アパホテル名古屋錦
第1部　開識社　演題「盛り上がる愛知万博・その見所」
愛知県国際博推進局事業調整課
課長　勢力常史氏
開催中の愛知万博について開催に至る苦労話と見所について当事者しか知りえぬ話などが披瀝された。
第2部　支部総会・大寮歌祭
当回では開催中の愛知万博の見所の紹介も得られたので、見学予定者にとっては効率的に見学がし得たものと考えられる。

【第7回】'08恵迪寮同窓会　大寮歌祭西日本大会
平成20年9月27日（予定）
会場　京都市内
第1部　開識社（東山霊山歴史館）見学と講演
霊山歴史館事務局長　佐藤等氏（S45年入学）
維新前後の激動期に生きた志士関係の貴重な資料が多数収蔵されている。今回は館長のご好意によりそれらの資料を目の当たりにすることが出来る。さらに秘話を中心とした講演が拝聴できる。
第2部　支部総会・大寮歌祭（京都駅前第2タワーホテル）
以上平成20年3月末現在での西日本支部の昨今をメーンイベントである大会を中心に概要を記してみた。

2008年恵迪寮同窓会西日本大会のご案内

悠久の古都・京都に参集！

同窓会の皆さん、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。
また熱い季節が巡ってまいりました。昨年札幌の地は、恵迪百年記念祭で大いに盛り上がりました。横山・赤木ご両家のゆかりの方々をお迎えしての歌碑「都ぞ弥生」の改修除幕及び寄贈式、恵迪百年記念式典及び記念講演、北大中央ローンを埋め尽くさんばかりの一万人で歌う「都ぞ弥生」、締めくくりは立錐の余地がないほど会場（京王プラザホテル）を埋め尽くしての「大寮歌祭」と、近年まれに見る北大生、一般市民をも巻き込んだ大興奮の恵迪寮同窓会でありました。

さて本年9月27日初秋、西日本支部は、悠久の古都・京都の地に同窓会の皆さんをお迎えし、『恵迪精神』の再現をはかる所存であり、ここに早々と大会アピールを宣言するものであります。

その1　恵迪百年記念祭を今後に繋がるものとして語り継ぎ、同窓会創立25周年を祝おう

その2　社会に目を向け今こそ開識社を推し進めよう

その3　恵迪寮同窓会名簿を整備しよう

その4　年代ごとに名簿整理と連絡を担う地域幹事を指名しよう

その5　故辻山先輩の提言を引継ぎ、地域ごとの交流を推し進めよう

2008年6月　恵迪寮同窓会西日本支部長代行　窪田　開拓

【ご　案　内】

日時：2008年9月27日(土)　13：30〜19：00
場所：第1部　霊山歴史館　京都市東山区清閑寺霊山町1
　　Tel：075-531-3773　http://www.ryozen-museum.or.jp/
　第2部　京都第2タワーホテル　京都市下京区東洞院通七条下ル　JR京都駅前東
　　Tel：075-361-3261　http://www.kyoto-tower.co.jp/daini_tower_hotel/
会費：本人　7,000円
　同伴（女性及び中学生以上）　3,500円
　同伴（小学生未満）　無料
　懇親会二次会　5,000円（希望者のみ）
　※H20年度同窓会費3,000円未納の方は、あわせてお支払いをお願いします。
宿泊：京都第2タワーホテルに、ツイン10室（素泊17,000円）、シングル5室（素泊10,000円）を「北大恵迪寮同窓会西日本支部　伊藤」名で確保してあります。
　先着順ですので各自自力でお申し込み下さい。（ホテル075-361-3261）
お問合せ：西日本支部幹事長　伊藤　靖久（携帯：090-3613-3641）

【式　次　第】

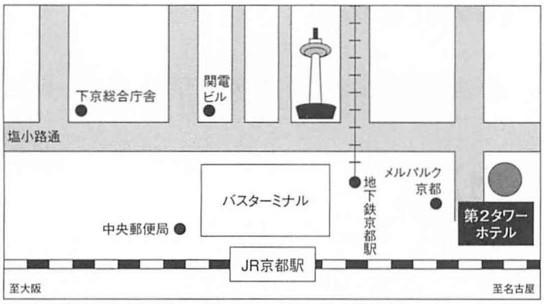
第１部　**開識社**

13：30　霊山歴史館（下記）に現地集合、館内見学
14：10　講演「幕末維新の専門博物館『霊山歴史館』について（仮題）」
　　　　挨拶：霊山歴史館事務局長　佐藤　等氏（Ｓ 49 年法学部卒）
　　　　講師：霊山歴史館学芸課長　木村幸比古（さちひこ）氏
15：30　京都第２タワーホテルへ移動（各自バス・タクシー自費にて）

霊山歴史館への市バス案内
○ JR 京都駅から
　東山回り 206 系統・東山安井下車、徒歩約５分
○京阪四条駅から
　東山回り 207 系統・東山安井下車、徒歩約５分
　または駅から徒歩で東へ約 15 分
○阪急河原町駅から
　東山回り 207 系統・東山安井下車、徒歩約５分
　または駅から徒歩で東へ約 20 分

第２部　**総会および大寮歌祭**

15：30　京都第２タワーホテル（下記）にて受付開始
16：15　恵迪寮同窓会創立 25 周年祝賀行事
16：30　西日本支部総会
17：00　大寮歌祭
19：00　閉会



JR 京都駅の東北東　徒歩すぐ

番外編　**19：30　懇親会二次会（希望者のみ、自費 5,000 円）　会場：二軒茶屋　中村楼**

真京料理　二軒茶屋　中村楼　案内より
　中村楼の創業は室町末期とも伝えます。
　当初は門前の水茶屋を営み、やがて豆腐料理や菜飯、酒を供して、江戸末期には京都屈指の料理茶屋のひとつになりました。『京の四季』をはじめ、小唄にも「四条の橋から灯の見えるアレは円山の灯か二軒茶屋の灯か」と二軒茶屋の呼び名で歌われています。
　明治の文明開化にはいち早く応え、格式ある料亭として世に知られての宮家や政財界、外国の要人、芸術家、文人らが集う、歴史の舞台ともなりました。
　中村楼に漂う風格は、四世紀にわたる文化の蓄積の所産です。

【参加申込】

下記のいずれかの方法でお申込み下さい（**8月20日締切**）。

① 郵　便：申込書にご記入の上、葉書に貼るか又は封書で郵送下さい（当日消印有効）
　〒530-0001　大阪市北区梅田1-2-2-200　大阪駅前第2ビル　北大会館内
　恵迪寮同窓会西日本支部宛

② FAX　：申込書にご記入の上、下記までFAX下さい。
　06-6343-3736　恵迪寮同窓会西日本支部宛

③ E-mail：申込書内の必要事項を下記までメール下さい。
　iwai2@cubemagic.co.jp　西日本支部事務局長　岩井宛

※なお、当日キャンセルは会計に支障をきたしますので、後日、会費を請求させていただきます。

恵迪寮同窓会西日本大会「2008/9/27㈯　京都」申込書（8月20日締切）

住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　入寮年＿＿＿＿＿＿（所属サークル）＿＿＿＿＿＿

学科＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　卒年＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

TEL＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　FAX＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

メールアドレス（できるだけご記入下さい）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏　　名	性　別	年　齢	開識社	大寮歌祭	2　次会
（本　人）			出席・欠席	出席・欠席	出席・欠席
			出席・欠席	出席・欠席	出席・欠席
			出席・欠席	出席・欠席	出席・欠席
			出席・欠席	出席・欠席	出席・欠席

幕末維新の専門博物館「霊山（りょうぜん）歴史館」

佐藤　等（S 45年入学）

私は、昭和49年に北大法学部を卒業し、松下電器産業に入社しました。昨年3月より京都東山にあります財団法人霊山顕彰会に出向しております。

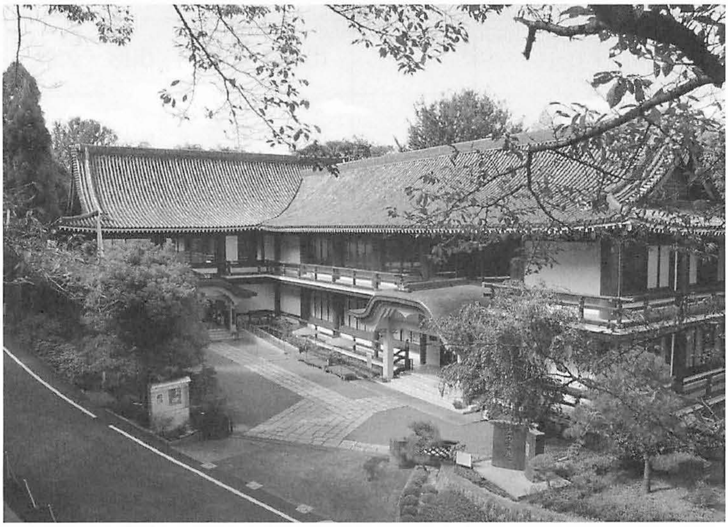
弊顕彰会は、明治100年に当たります昭和43年に、松下幸之助が中心となって全国に呼びかけ設立したものです。維新の大業を成功に導き、近代日本の礎をつくりあげる大きな原動力となった先覚の志士たちを顕彰するとともに、志士の中に流れていた日本の伝統精神を後世に受け継いでいくことを使命としています。設立の2年後には幕末維新の専門博物館として霊山歴史館が開館し、現在に至っております。

霊山（りょうぜん）は京の街を見下ろす東山三十六峰の中央に位置する霊峰で、幕末の頃勤王の志士にとって、霊山は亡くなった志士を慰霊する聖地でありました。明治元年5月に、明治政府によって発せられた第一号の太政官布告によって、霊山招魂社が建立され、国のために一身を捧げた幕末維新の志士たちの諸霊が祀られることになりました。坂本龍馬、中岡慎太郎、桂小五郎こと木戸孝允など386柱の墓碑及び3200柱が現在合祀されています。坂本龍馬の命日であります11月15日には、全国から龍馬ファンが集まり、盛大に龍馬祭が催されます。

霊山歴史館は、霊山の山裾に位置し、春は桜、秋は紅葉、そして何よりも清水寺と「ねねの道」で有名な高台寺との間に位置するという、京都でも有数の風光明媚な観光スポットにあります。収蔵資料は約5000点を超え、全国から龍馬や新選組等の熱心な幕末ファンが訪れます。

本年は霊山顕彰会創設40周年を迎え、春と秋の特別展に加え、夏と冬には企画展等を予定しております。折りしも現在NHK大河ドラマ「篤姫」が放映中で、弊館も篤姫関連の展示を行い、多くの入館者から人気を呼んでおります。資史料のみならず、大型映像や、龍馬暗殺の場面の映像再現、龍馬暗殺の場所である近江屋のミニチュア模型など、多彩な展示をしております。京都へお越しの際は、是非ご来館下さい。お待ちいたしております。

（霊山顕彰会　理事）



開識社会場の霊山歴史館

恵迪寮命名百年記念グッズ

1．北大恵迪寮歌CD「都ぞ弥生」

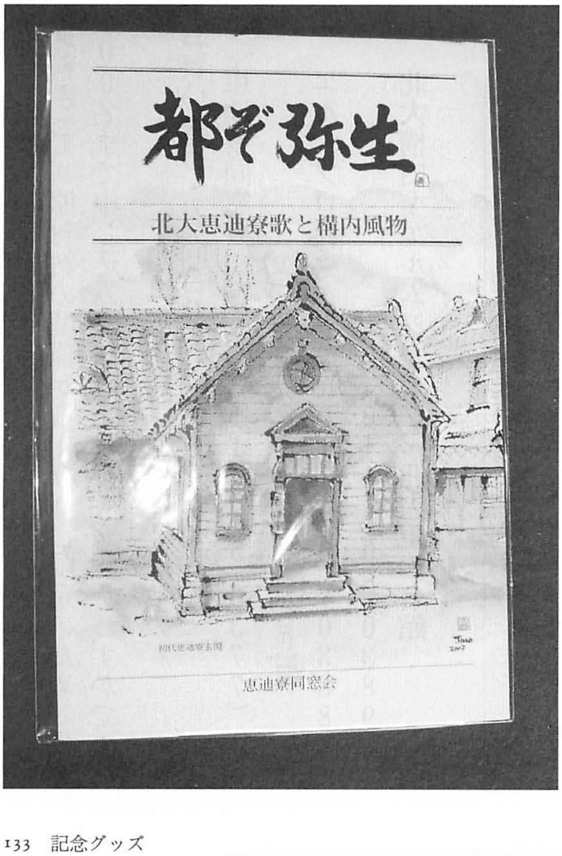
明治45年から平成18年まで作歌・作曲された１００曲を超える恵迪寮歌の中から、33曲を厳選しCDに収録しました。斉唱録音は北大合唱団ＯＢ会にお願いしました。「都ぞ弥生」と「永遠の幸」は合唱となり、見事なハーモニーで荘厳な響きとなっております。

ＣＤ２枚組みで、頒布価格は２千円です。

2．ポストカード「都ぞ弥生」～北大恵迪寮歌と構内風物～

北大構内風物（オオバナノエンレイソウ、クロユリ、ハマナス、スズラン、ニセアカシア、中央ローン、モデルバーン、旧中央図書館）の伊藤太郎画伯による竹ペン透明水彩画と「都ぞ弥生」をはじめとする恵迪寮歌代表曲8曲を組み合わせました。

８枚組で、頒布価格は５２５円です。



3．恵迪百年記念オルゴール
（100台限定、完全予約販売）

寮生章・恵迪百年記念文字入り「都ぞ弥生」オルゴールを特製しました。箱素材には北大広報課の全面的協力により、十分乾燥させた北大雨竜研究林のミズナラを使用し、荘重な音を反響させせます。曲は「都ぞ弥生」の全曲が再生されます。

頒布価格は4万円（送料別）で、原材料の関係から100台限定のため、先着100名まで申し込み順に販売します。残りわずかです。

〈お買い求め・お問合せ先〉

① 恵迪寮同窓会（Tel＆Fax 011-815-6377）
(E-mail keiteki@spa.att.ne.jp)

② エルムプロジェクト（Tel 011-708-0388）
（Fax 011-708-0389）
北大構内～エルムショップ、北大生協会館

恵迪寮同窓会ホームページにアクセス・投稿を！

21世紀型の情報発信・交換のツールとしての役割を担う恵迪寮同窓会ホームページは、本年2月11日に装いも新たに「新ホームページ」へ移行しました。これまでのホームページの掲載内容・デザインを一新し、「事務局のお知らせ」・「談話室」のブログ化など同窓会会員のみならず多くの方々が楽しめるものとなりました。

この2カ月間のアクセス件数は約1200件、一日平均約20件となっております。情報の更新性を高めることや「談話室」の活性化などを通じて、会員相互の情報交流・会員増強のツールとして有効に活用して参ります。

「談話室」の投稿方法や写真などの添付も簡易化され、誰でも参加できるようになっております。会員諸氏の積極的なアクセス・投稿をお願いいたします。

新ホームページURL　http://www.keiteki-ob.jp/

平成20年度「年会費」と「運営支援金」納入のお願い

本会は、年会員の年会費3,000円と終身会員の運営支援金2,000円およびカンパの供出により、全国3支部持ち回りの「大寮歌祭」や会誌「恵迪」の発行、文化講演会「開識社」の開催、現寮との交流、地域ごとの親睦交流・地区寮歌祭などの活動を展開しております。

平成19年度の会費等の納入状況は、総件数467件、125万5,000円（年会費は184件・57万9,000円、運営支援金は、216件・43万2,000円、カンパは、67件・24万4,000円）となっております。

「会員相互の親睦を計り、恵迪精神の伝承発展に務める」という会の目的を実現するために、平成20年度「年会費」の納入と「運営支援金」の供出をお願いいたします。それぞれ同封の郵便払込取扱票によりご送金ください。

① 年会員の方は、平成20年度「年会費」として3,000円

② 平成16年までの終身会員の方は、平成20年度「運営支援金」として2,000円

③ 任意のカンパ

※ 同窓会という任意団体の性格上、会費未納という請求関係は発生しません。あくまでも年度ごとの処理となります。払込の失念などがないように宜しくお願いいたします。

「恵迪」第7号　訂正一覧

1．恵迪百年記念事業協賛者ご芳名録追録

・T 2入寮、林文平・薫及び文平会

文平会代表の四方英四郎様名義で掲載（P 36下から12行目)。「恵迪百年記念誌に文平会の名を残したい」という、文平会会員の皆様の深い想いと期待に応えられなかったことを深くお詫び申し上げます。

・JFEホールディング　数土文夫

銀行振り込みのカタカナ表示の同音の寿時史郎（P 36下から10行目、ご逝去）で表記してしまいました。数土文夫様に深くお詫び申し上げます。

2．記念号発行以降の協賛金拠出者（ご芳名録に追加）

青木　寛（S 13、12/21)、田辺　秀治（S 14、12/3)、塩田　敬司（S 16、2/4)、
仁木　良哉（S 29、12/7)

3．本文訂正

・P 20　グラビア左列の2006年東日本大会…とある3枚の写真。2006年は、一番上の一枚で、中と下の2枚は、2005年の仙台大会（於：ホテル白萩）の写真。

・P 29　下段6行目　佐藤芳介氏→横山芳介氏

・P 45　高松正信氏と清水由松氏の写真上下反対

・P 118　23行目　作詞者→作曲者、27行目　仙台二高→旧制二高

・P 119　最終行　中山義正→山中義正

恵迪寮同窓会会長
横山 清
昭和31年入寮
水産学部遠洋漁業学科卒
〒064-0913
札幌市中央区南13条西12丁目2-15
☎011-530-2361

恵迪寮同窓会副会長
髙井 宗宏
昭和31年入寮
農学部農業工学科卒
〒061-1132
北広島市北進町4丁目3-2
☎011-373-4268

恵迪寮同窓会副会長
厚谷 純吉
昭和30年入寮
札幌医科大学卒
〒005-0013
札幌市南区真駒内緑町3丁目4-1-1004
☎011-583-2936

恵迪寮同窓会会計監事
大西 敞
昭和30年入寮
法学部法律学科卒
〒065-0023
札幌市東区北23条東4丁目3-20
☎011-702-6431

恵迪寮同窓会会計監事
小笠原 孝之
昭和31年入寮
農学部農業経済学科卒
〒064-0913
札幌市中央区南13条西14丁目3-7
☎011-551-2467

恵迪寮同窓会代表幹事
北海道支部長
白浜 憲一
昭和40年入寮
法学部法律学科卒
〒001-0922
札幌市北区新川2条8丁目8-2
☎011-762-7526

恵迪寮同窓会副代表幹事
新井 三郎
昭和32年入寮
農学部農業経済学科卒
〒062-0933
札幌市豊平区平岸3条18丁目4-23-304
☎011-841-9373

恵迪寮同窓会副代表幹事
氏平 増之
昭和38年入寮
工学部鉱山工学科卒
〒061-1105
北広島市西の里東4丁目13-1
☎011-375-3638

恵迪寮同窓会副代表幹事
皆川吉郎
昭和43年入寮
農学部農業経済学科卒
〒071-8142
旭川市春光台2条3丁目4-25
☎0166-53-8115

恵迪寮同窓会現寮常任幹事
高橋陽一
昭和30年入寮
工学部土木工学科卒
〒062-0034
札幌市豊平区西岡4条14丁目4-10
☎011-582-9419

恵迪寮同窓会会誌常任幹事
大隈昭二
昭和40年入寮
教育学部教育学科卒
〒062-0933
札幌市豊平区平岸3条18丁目4-10-203
☎011-812-5413

恵迪寮同窓会
日高・苫小牧恵迪会幹事長
魚山和春
昭和39年入寮
工学部機械工学科卒
〒053-0042
苫小牧市三光町5丁目20-8
☎0144-32-4777

恵迪寮同窓会
道北・旭川恵迪会代表
山田浄二
昭和41年入寮
法学部法律学科卒
〒070-0814
旭川市川端町4条6丁目2-13
☎0166-53-8061

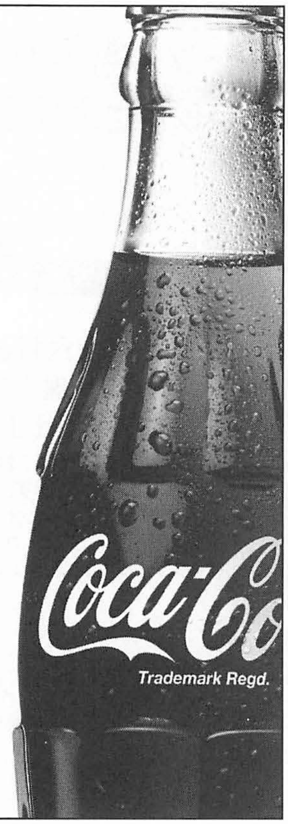
恵迪寮同窓会北海道支部副支部長
ふるさと回帰塾主宰（紀州）
千川浩治
昭和40年入寮
獣医学部獣医学科卒
〒062-0023
札幌市豊平区月寒西3条9丁目6-3
☎011-853-1787

恵迪寮同窓会北海道支部幹事長
八重樫幸一
昭和41年入寮
経済学部経済学科卒
〒005-0006
札幌市豊平区澄川6条10丁目6-1
☎011-583-4688

恵迪寮同窓会北海道支部副幹事長
谷口哲也
昭和48年入寮
文学部東洋史学科卒
〒061-1148
北広島市山手町7丁目2-9
☎011-373-0987

～北の大地とともに～
おかげさまで４５周年

北海道コカ・コーラボトリング㈱



信頼され、選ばれる
ナンバーワン食品卸へ

お客様の繁栄が
当社の繁栄に繋がると信じて、
「**お客様第一主義**」の
スローガンを掲げ、
日本アクセスグループの一員として、
北海道の食文化と食の流通に挑戦し、
地域食品卸ナンバーワンの
企業経営を目指します。

ACCESS
日本アクセス北海道株式会社
〒065-8522 札幌市東区苗穂町9丁目1番1号
電話代表(011)750-3100

恵迪寮同窓会北海道支部組織常任幹事
山崎克彦
昭和32年入寮
工学部建築工学科卒
〒069-0853
江別市大麻高町1-1
☎011-388-2155

恵迪寮同窓会北海道支部広報常任幹事
畑　博
昭和42年入寮
理学部地質学鉱物学科卒
〒002-0856
札幌市北区屯田6条2丁目1-16
☎011-771-7528

恵迪寮同窓会北海道支部渉外常任幹事
木村正博
昭和41年入寮
工学部土木工学科卒
〒004-0882
札幌市清田区平岡公園東3丁目8-2
☎011-882-8547

恵迪寮同窓会北海道支部会計常任幹事
西雪弘光
昭和40年入寮
農学部畜産学科卒
〒063-0054
札幌市西区宮の沢4条3丁目12-25
☎011-664-1034

恵迪寮同窓会副会長
東日本支部長
山中義正
昭和32年入寮
獣医学部獣医学科卒
〒279-0011
千葉県浦安市美浜5-11-1006
☎047-353-8475

恵迪寮同窓会東日本支部副支部長
関口光雄
昭和39年入寮
工学部土木工学科卒
〒176-0021
東京都練馬区貫井4丁目47-47
☎03-3926-0080

恵迪寮同窓会東日本支部幹事長
坂倉雅夫
昭和44年入寮
農学部農業工学科卒
〒260-0033
千葉市中央区春日1丁目19-7-1001
☎043-246-0244

恵迪寮同窓会東日本支部副幹事長
加藤秀弘
昭和46年入寮
水産学部増殖学科卒
〒259-0133
神奈川県中郡二宮町百合が丘3丁目31-11
☎0463-71-9518

「食を通じて、家庭の幸せに役立つ」

おいしさとやすらぎを

ハウス食品

札幌市西区山の手1条1丁目1番34号

TEL(011)611-8781

恵迪寮同窓会東日本支部副幹事長

佐藤文雄

昭和47年入寮
農学部林産学科卒
〒113-0021
東京都文京区本駒込4丁目49-6
☎03-3821-0316

恵迪寮同窓会東日本支部副幹事長

松岡繁幸

昭和48年入寮
工学部原子力工学科卒
〒173-0004
東京都板橋区板橋4丁目46-6
☎03-3961-2665

恵迪寮同窓会東日本支部副幹事長

荒木隆夫

昭和49年入寮
水産学部食品化学科卒
〒347-0032
埼玉県加須市花崎4丁目16-18
☎0480-65-6456

恵迪寮同窓会西日本支部長代行

窪田開拓

昭和32年入寮
工学部鉱山工学科卒
〒666-0138
兵庫県川西市西多田2丁目29-17
☎0727-92-0104

恵迪寮同窓会西日本支部副支部長

間中俊夫

昭和33年入寮
工学部機械工学科卒
〒658-0065
神戸市東灘区御影山手3丁目1-9-100
☎078-851-4831

恵迪寮同窓会西日本支部幹事長

伊藤靖久

昭和38年入寮
工学部建築工学科卒
〒665-0886
宝塚市山手台西2丁目9-4
☎0797-89-4351

恵迪寮同窓会西日本支部副幹事長

入江和彦

昭和41年入寮
水産学部漁業学科卒
〒536-0004
大阪市城東区今福西6丁目2-2-1520
☎06-4303-4366

恵迪寮同窓会西日本支部事務局長

岩井隆郎

昭和51年入寮
工学部原子力工学科卒
〒594-1111
大阪府和泉市光明台2丁目46-24
☎0725-56-4713

札幌市中央卸売市場
株式会社
丸誠本田誠一商店
代表取締役 本田誠一
札幌市中央区北十二条西二十丁目二番二号

CGC
世界中から良いものを

CGCは、日本全国の
有力中堅スーパーマーケットが協業の旗のもとに、
その総力を結集した大量共同仕入機構です。

北海道のCGCグループ

■北海道の企業数…10社
■店舗数……217店
(2008年4月現在)

株式会社北海道シジシー
代表取締役社長 横山 清

おいしいパンと
暮らそう。

ヤマザキ
www.yamazakipan.co.jp

大人?
なったら
LG21
リスクと戦う乳酸菌
LG21
自然のちからを、未来のチカラへ。

お口の恋人
LOTTE
60th
ANNIVERSARY
いい歯のために、
おいしさがさらに長続き。
neo
XYLITOL
LOTTE
No.1
デンタルガム
ロッテ キシリトール ネオ 新登場
*インテージSRIデータ ガムカテゴリー 2007年1月〜2007年12月 累計販売金額
むし歯のない社会へ。
厚生労働省許可
保健機能食品（特定保健用食品）
(財)日本学校保健会推薦 (社)日本学校歯科医会推薦 ガムをかんだ後は紙に包んでくずかごへ。

EVOLUTION 21
「おいしいね」って
今日は何回言ったかな?
リョーショクは“日本の豊かな食”を
美味しくコーディネート。
わたくしたちは、食品中間流通機能にさらに磨きをかけ、
「あらゆる食シーン」にフルラインでお応えします。
「おいしいね」が行き交う食シーンをお届けするために。
消費と生産を結ぶ価値あるかけ橋
リョーショク

日清製粉グループ
マ・マー
バンバン食べよう
晩パスタ
晩パスタ
検索
ほほえみ約束品質
マ・マー
Fine Quality, Fine Smile
日清フーズ株式会社

編集後記

百年記念祭も終わり、誰しもが、燃え尽き症候群で虚脱状態になっていた昨年末、白浜代表幹事から「同窓会誌の編集長をやってくれないか」と相談がありました。前任の平岡編集長が苦労されていたことが頭によぎりましたが、「君しかいない」と半ばおだてられ、及ばずながら引き受けることになりました。

懸念された原稿は皆さんの協力で予想以上に集まり、増ページを心配するほどでした。特に、予科時代から昭和30年代の大先輩たちの原稿には、時代とともに歩んできた恵迪寮での喜怒哀楽や、波乱に満ちた寮史が熱く書き綴られていました。

これからも同窓会が伝えていかなければならない「恵迪精神」(ロフティー・アンビション) に満ちあふれ、〝明日へのメッセージ〟を読むような思いでした。

また、昭和40年代以降の〝若い世代〟の寮友も、恵迪寮に対する想いは一つです。同じアイデンティティーを共有する仲間たちの拠り所として、本誌が担う役目の重みを改めて実感しました。

最後に、幹事の皆さんに名刺広告の掲載をお願いしましたが、会誌発行を持続可能なものにするための方策としてご理解願います。

事務局の佐藤静子さんをはじめ、北大広報課など多数の関係者のご協力に深く感謝します。

文責 「恵迪」部会長・大隈 昭二 (S40年入寮)

【編集委員】厚谷 純吉 (S30年入寮) 高井 宗宏 (S31年入寮)
白浜 憲一 (S40年入寮) 谷口 哲也 (S48年入寮)

会誌「恵迪」第8号 2008年7月

発 行 恵迪寮同窓会
〒062-8611 札幌市豊平区平岸1条1丁目9-6
株式会社ラルズ内
TEL・FAX 011-815-6377
E-mail keiteki@sap.att.ne.jp
同窓会ホームページ
http://www.keiteki-ob.jp/

発行者
恵迪寮同窓会会長
横 山 清

印刷・製本 株式会社アイワード
〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5-91
TEL 011-241-9341(代)
FAX 011-207-6178

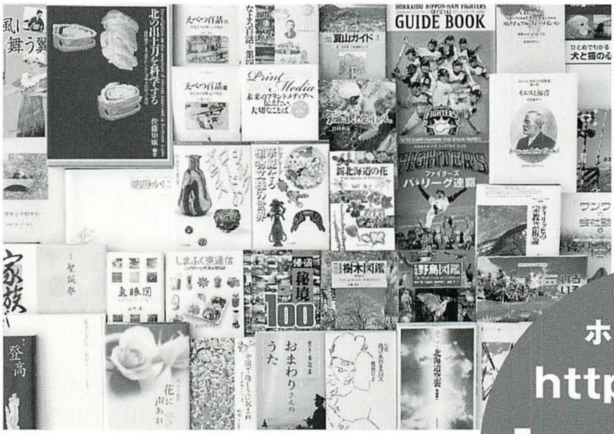
さまざまな想いがつまった本づくりは
実績豊かなアイワードにおまかせください

自費出版

自分史やエッセイ集、画集や写真集・作品集など自費出版から
記念誌、研究論文、報告書、出版物、辞書・事典まで

本づくり

原稿作成、リライト、工程、撮影、費用…、どんなことでもご相談ください。創業以来
40年以上にわたり蓄積してきた本づくりのノウハウと最新技術でお手伝いします。
お気軽にご連絡ください。詳しくはアイワードホームページでもご覧いただけます。



ホームページ
http://www.
iword.
co.jp

新時代の〈企画・情報処理・印刷〉企業
株式会社 アイワード

本　　社：〒060-0033 札幌市中央区北３条東５丁目５-91 TEL(011)241-9341 FAX(011)207-6178
東京支店：〒101-0065 東京都千代田区西神田2丁目4番3号 TEL(03)3239-3939 FAX(03)3239-3945
(高岡ビル6階)

個人情報保護のマネジメントシステム プライバシーマーク 10190203(02) 2005.9.6 認証取得
品質マネジメントの国際規格 ISO 9001 JQA-QM6545 2001.5.11 全社で認証取得
環境マネジメントシステム ISO 14001 JQA-EM2417 2002.6.7 石狩工場認証取得
障がい者就労支援マーク 北海道が制定し、障がい者の就労支援企業であることを示します。
ハートフルマーク 全国重度障害者雇用事業所協会が制定した会員事業所共通のシンボルマークです。

フクハラ
株式会社 福原

RALSE
株式会社 ラルズ

SUPER CHAIN Fuji
株式会社 ふじ

RALSE
株式会社 道南ラルズ

RALSE
株式会社 道北ラルズ

RALSE
株式会社 道東ラルズ

〈関連会社〉
株式会社エルディ
株式会社イワイ
株式会社ライフポート
ホテル福原
アークストラベル

全道に広がる169店舗
ARCS アークスグループ

株式会社アークス　代表取締役社長　横山　清